
東方奔放紀

露木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方奔放紀

【Nコード】

N2173S

【作者名】

露木

【あらすじ】

「とりあえず言っと・・・ここどこでしょうね？」
少ししか東方知識が無い少年が、自分のする事に迷いながらもなるべく良い方向へ行ける様に、自分勝手ながらも努力する話。オリキャラがやけに多目です。

説節 ステータス？（現十六人？）・・・ネタバレチュウイ（苦笑）（前書き）

とりあえずしっかりと考えておけるうちに主人公ステータスを固定
します）

まだ出てないところもあるかもしれないので見たくない人次へ早めに
）

説節 ステータス？（現十六人？）・・・ネタバレチユイ（苦笑）

ネタバレが現時点でかなり？含むので嫌な方はまだ読まないことを
お勧めいたしますです

というか読んだら読む気失せるので速く一節までお進みを。

設定で分らなくなったら読んでです、今ある所まで読み終わって
から見てください。

ハクリユウ・コテツ
伯柳・弧徹（現）

種族（人間？）

能力（現在）

（少年時）能力（全てを・視・具現化・行使・する程度の能力）

（女性時）能力（全と無を扱う程度の能力） - （未知と既存を扱う程度の能力）

（少年時・暴走克服）能力（全てを・扱う・操る・統べる・超える・程度の能力）

（最終）能力（ に能力を使う程度の能力 ）

（全てに対応）能力（死神の能力を決める程度の能力）

+

(全てに対応) 能力(音と波紋・波長を扱う程度の能力)

少年時の容姿は見る者によって格好よく、可愛くも見える。

名は伯柳弧徹、孤独を貫き通すと理解し、本当の意味では解釈していない。

髪は腰よりも下まで伸ばしたのを束ねている。

髪と目も黒色と普通で、身長は160cmから140cmになった。(偶に変化する)

性格はふわふわしている感じ、ちなみに不老だが不死ではないので、死ぬ。

周りから見て完璧に善者、だが本人は偽善者を目指している。

自分の事が本気で嫌いだが、ある事があり死にたいと思わなくなつた。

信用している者なら絶対に疑わなく、裏切られる事が多い。

相手の感情に気づきやすく鋭感。好意なら一瞬で気づく。

絶対に許せない事があるが自分の事でもある。

力は強いが、強力過ぎて少年時はコントロールができていない。

それにより一緒に居ると能力が新たに出たりなどする

口癖は基本的に(……です……です……)が主流、気分によって変えていく。

教えなければ女の子と見間違われることが多い。

服装は基本的に、黒か水色を基調としている。

常にポケットを持っていて幼いときの弧徹とその妹由紀が写った写真を容れている。

しかし現在持っていない。

こちらに来る前には、幼少期から妹の面倒を見てただけあり、和食、洋食、中華、和菓子、洋菓子和、全てが我流だが、基本的に全部作れる家庭的な子……因みに右利き。

大切だと決めた者が傷つくと、力が暴走するので任意でなくとも、女性になりバランスをとる。

ちなみに言つて置くと原作知識が全て無いと言う訳ではない。主人公は本来なら知らない。

女性時の容姿は、美人、大人な人と印象が付けられる。

名は珀鈴靈絶、意味は理解できていない。

髪は束ねていた髪を垂らしていて、髪と目の色は琥珀色。

身長は180cm。性格はかなり落ち着いていて、ほんわかな感じ。

意外と心が傷付きやすい。

口癖は無くなり普通に（・・・じゃないかしら）など紫に似た口調で話す。

こちらの時は少年時以上のお人よし。

けれどこちらの場合敵に容赦を一切しないため、嫌われやすい。

基本的に自由にこちらの姿になれるが、上記の通り力を制御するため、この姿になる事も。

けれど本当に危険な時は、女性から少年の状態になる。

因みに左利き

最後の姿は髪は短くバツサリ切つてあるが、髪が伸びやすく今は肩まである。

性格は気ままな性格で、性格は

体格に少年時との違いは余り無いが、身長は165cmまでは一応ある。

両利きで装備は（珀刀）と（弧刀）か（龍刀）と（徹刀）という組み合わせ。

左から順に（珀色）（灰色）（蒼色）（黒色）となっている。

口調は男性口調に近いけど冷静じゃなくなると、私など適当に使う。

《能力説明》

少年時の《全てを・視・具現化・行使・する程度の能力》は、全て……つまり弧徹自身が任意している物ならば、自由に使う事が出来る。

視は何もかもを視ると付けば、視覚化して視ることが可能。

具現化は弧徹が頭にくつきりと、思い浮かぶ事が出来るなら全て存在させる事が可能。

行使は自分の考え、全てを意識して行う事が可能。

しかし、全てを行う事が出来るための、力等々を無意識に使うので、結果死に至ったりする。

女性時の《全と無を扱う程度の能力》は

全は存在している物、無は存在していない物、それらを扱えるので意識をすればあらゆる事が可能。

ただし少年時も女性時も、基本知識が同じなので、この能力について理解仕切れて居ない所があるため半分の効果しか扱えていない。

（死神の能力を決める程度の能力）は、自分がこれが死神だろうと思えばそうなる。

これは常時扱っておけるが、戦闘をするための能力ではない。

過去にトラウマを持っていて克服していれば、自分の自由に扱えるという物で、克服するとこの能力で戦闘が行える？

(音と波紋・波長を扱う程度の能力)は、どんなに小さい音でも大きく、どんなに大きい音でも小さくが、普通の使い方。

攻撃時は鈴を出して音を響くようにし、波紋によって全てを消し去るなど。

応用としては、空間の波紋の広がりを変えたり無くしたりし、弾幕を勝手に変えたり出せなくしたりする事が出来る。

後は、波紋を凍らしたり、燃やしたり、通電させたりと、色々が可能。

《全てを・扱う・操る・制す・超える・程度の能力》は、全て認識をして扱える。

扱うは存在している物であれば、それを使い全てを行う事が可能。操るは存在を認識できれば操る事が可能。

制すは全てに上限、ルールのような物を付け、行う事を不可能にさせる。

超えるは認識した物の存在、力等を超える事が可能。

しかし女性時の無という、概念は扱えないために、能力は劣っている。

制す、超える、は完璧に使えない。

能力が発動していない時に相手と戦う時は、明らかに手を抜いている証拠。何故なら能力を使わなければ、精々一般の人間の十倍程度の運動能力。それでも十分に強いかもしれない……

オリキャラ(？)

(随時追加) (随時編集)

其の壱

ファイエ

種族(妖怪)

能力(？)

髪は長く女性なら誰でも懂れる体の持ち主。

弧徹を殺しかけたよく分からない存在。

右手に短剣、左手に分らないものを戦闘時装備。

弧徹は兄であり父の存在。

弧徹を溺愛している。

其の貳

燈珀・由梨

トウハク・ユリ

種族(人間)

能力(能力を操る程度の能力) (現在)

髪は短く、蒼い髪色でスタイルがよく胸はさらしを巻いている。

能力は弧徹が消えた時に出た。
村は弧徹の所為で出ることになったが、別に恨んでない。
弧徹により護身術を学び、妖怪は敵ではない。
料理は弧徹と五分五分。

其の参

レスチノーレ

種族（妖精）

能力（冷気を操る程度の能力） + （冬を扱う程度の能力）

髪は長く、澄んだ水色で容姿は綺麗という感じ。

能力は弧徹の所為で現れた。

チルノに似ているように思えるが、頭脳明晰。

どんな暑さでも制御できる。

強さは弧徹に全く引けを取らなく最強。

大切な者のためなら努力するという弧徹にひかれた。

料理は作ると山が二つ吹き飛ぶ。

其の四

ルティア・ホワイトロック

種族（妖怪）

能力（寒気を操る程度の能力）＋（冬の現象などをを扱う程度の能力）

髪は短く、薄い紫色で美人なイメージ。

能力は弧徹の所為で増えた。

レティに似ているようだが違うと何故か分る。

レスチノと同じで暑さを制御可能。

レスチノよりも武術に長けていて強力。

弧徹とレスチノの思考は甘いと思っている。

料理は作ると山一つ吹き飛ばす。

其の五

ルーミア・エイリス

種族（妖怪）

能力（闇を操る程度の能力）＋（夜を扱う程度の能力）

髪は長く、金色で清楚な感じ。

能力は弧徹の所為。

ルーミアだがルーミアでは無い

弧徹よりも強く、さらに弧徹に創ってもらった剣で、勝てる者は
そうそう居ない。

意外と世話を焼く方。

お菓子では弧徹に負けるが、料理では負けない。

其の六

フエリス・レイラ

種族（妖精）

能力（自然系統の属性を扱う程度の能力） + （強度を操る程度の能力）

髪は中ぐらい、薄い緑色で清楚な感じ。

能力は弧徹の所為。

大妖精だが名が存在する

力ではなく、頭を使って勝つ方。

一番の大人で、被害を一番受ける。

お菓子だけは弧徹に絶対負けない。

其の七

零季^{レイキ}

種族（神）

能力（季を扱う程度の能力）

龍神と同等に偉い方

少し天然かと思わせ気味だが弧徹でさえ気づかないことに気づくな

どかなりの策士

本当ならかなりに慕われても良いが本人が嫌がっている

そのため柚木が様付けじゃないことは結構嬉しがっていたりする（柚木は分かっているため）

容姿は大人っぽく美人・口調は少し撲つ娘に似ている

腕輪については元々零季が考え出した全部で6の嵌めることのできる穴があり

これにより神力を分けたり能力を使えたりする

本当はこれで通信紛いのことをできる

弧徹は生まれた時から何故か記憶に存在していてそれが想いが募つて少し恋を自覚している

弧徹を君と呼ぶのは単純に恥ずかしいから・意外と純情

弧徹に好意抱き中・・・x

其の八

ハクレイ・ユズキ
博霊・柚木

アズナ
阿須奈

種族（人間）

能力（掴む程度の能力）

容姿は霊夢に似ている気がすると思う感じ

巫女として存在しているが零季と共に生まれているため限りなく神に近い存在

弧徹の事は零季に聞かされていて段々と好意が生まれた

零季と生まれたため神との顔がかなり広い

弧徹が言うにはヤンデレとなっている・・・
それは弧徹に対しての恋と言うのが分からずにいるための行動
意外と零季の近くに居たからか純情
弧徹に好意抱き中・・・

其の九

セリカ

種族（神）

能力（全てを行う・制す・操る程度の能力）

容姿は可愛い・綺麗・などをすぐ言ってもいいくらい
元々はこの世界を創った神に一番最後に創られた神
実は零季達を生み出したのはセリカ

零季が弧徹の事を知っていたのはセリカ自身が弧徹の事を知って
いた為

弧徹の事を知ったのは弧徹がこちらに来るずっと前から
翼があるのは天使を催して創られたため
騒ぎを起こしたりするのは構って欲しいから

さらに言えば弧徹と関わる切っ掛けの様な者が欲しいから
現在では弧徹よりもより高位の存在なため誰よりも最強
結構何処でなく無茶苦茶内面は寂しやがり・純情など一番この
面が零季達に影響が及んでいる

弧徹と協力したとき能力が混ざったため制すと操るを持つ事に
弧徹に好意抱き中・・・？

其の十

桜癒オウユ

種族（神）

能力（春と癒しを扱う程度の能力）

春の神様で容姿は清楚な印象

敵などには少し無口に接するが仲良くなれば結構砕けて話してくれる
そこまで力が弱いわけで無いが力を使うのが面倒なので大体手を抜く
珍しいがそこまで弧徹に興味が無くて親友関係な状態で良いと思っ
てる

他の季節の神と意外と仲が良いが上記のとおり結構人見知りが激しい
弧徹に好意は抱いてない・・・x

其の十一

幽華

種族（神）

能力（夏と華を扱う程度の能力）

夏の神様で容姿は幽香の幼い感じで少し髪が薄緑

敵と判断していると口調は幽香に似ているが本当はクール・無口な方
弧徹には好意を抱いてはいるが正直になれないので毒舌無口で
弧徹が言うには何故か守りたくなる存在？

弧徹に好意は普通・・・

其の十二

亜樹

種族（神）

能力（秋と亜を扱う程度の能力）

秋の神様で容姿は美人なタイプ

ちよつと恥ずかしがりや弧徹には尚更

真面目な話はきちんと話す臨機応変がしっかりした方

幽華と結構仲が良い

弧徹に好意が柚木よりも意外と上・・・好意に順位付けるのは失礼

かもね

弧徹に好意い抱き中・・・

其の十三

幸恵

種族（神）

能力（雪と恵みを扱う程度の能力）

冬の神様で容姿は可愛い方

柚木の事を溺愛していて会った時罵倒したのは溺愛していた感情を恨みの感情に代えられたから

弧徹よりも柚木な方なので弧徹を少し羨ましがって妬んでいる
柚木は幸恵の事を結構好いているので一番の仲良し
弧徹に嫉妬中・・・

其の十四

ホン・メイセン
紅・美穿

種族（妖怪）

能力（視を理解し解る程度の能力）

美鈴の妹で幼い方

四十三節の通り弧徹を理解したため忌み嫌っている

・・・けれど本当のところはその理解した事に始めての苦しみを覚えて
いるため興味あり

美鈴がすっかり者になったバージョン・・・本当はさらにおっとり
弧徹嫌い・・・？

其の十五

シュンリ・アカハ
俊離・赤羽

種族（白狼天狗）

能力（自分の発言を成立させる程度の能力）

白く長い髪の犬っ娘

由酒と実質妖怪の山を牛耳っている

天魔と対等に戦う事が可能で鬼側にも一目置かれている・・・が
天狗の中では能力を妬まれたりしており少々犬猿の仲
意外と寂しがりやな所もあり弧徹には自然と接する
弧徹に興味・・・？

其の十六

ソウウガ・ユシユ
沿穿・由酒

種族（鬼）

能力（対象者に気づかれない程度の能力）？

角が何故か生えてない鬼の娘

俊離と常に絡んでいて親友同士

能力の所為で他の鬼に忌み嫌われている

だが実力は鬼神母神に匹敵する物で天魔同様に普段鬼神母神は留守
なので代理者

結構純粋な娘で鬼に悪口を言われると実力で勝っているが泣いてし
まう

喋り方に似て軽い

弧徹に興味・・・？

技説節 技的な一覧（随時追加）

伯柳・弧徹

《伯刀》

基本はここから。

《徹刀》

全て存在している物を貫き通す。

《霧生刀》

刀身が長く、霧の状態になって斬る事も可能。

《氷霧・垂桜》

辺り一面に雪結晶を降らしそれに触った物は永遠の氷結へと。

《風雪・水刹》

吹雪を起こし、その後液体状になり、それを永遠と繰り返し、体温を奪っていく。

《斬》

マスタースパーク見たいなのをスッパリ真つ二つにできる。

他には斬って消去するなど。

《伯刀・煉撃覇》

火を纏い地核の温度まで一気に上げ放つ。

効果対象に向かって行くので周りには影響が無い。

《風火双陣》

白い炎まで温度を上げて自分の所から円の様に放つ。

《伯龍刀》

伯龍刀の上の刀・存在しているだけで空間が歪む

弧徹は女性状態でないとコントロールできない危なっかしさ。

《全斬無斬》

伯龍刀で出すことのできる技

その名の通り全てを斬り無と言う概念さえ斬る。

《全能なる無碍気》

かなり大きい砲撃・何だって打消し存在しているだけでもその場を壊し尽くし穢れを生む。

《全と無の交差》

決して交わるはずの無い二つが交わり対象を全ての概念から消し滅ぼす。

《絶無》

無そのものを無くし尽し絶対なる死を迎えさせる。

《全なる掌握》

任意している空間のみを掌握し全てを行う事を可能にする。

《無の結界》

元からこの結界を張ってあった場合今の起こった事を他に移すことが可能。

《スペルカード》

《初源符・斬想夢想》

地霊殿のこいしが出す本能『イドの解放』や抑制『スーパーエゴ』のハートを出現させ、

全面に出した後一気にそれを真つ二つにする・・想像的には失恋？

《無符・無斬切》

全ての弾幕を残り時間三十秒になるまで斬つて消す・・それだけでダメージは無い

しかしその三十秒間後ひたすら密度の小さい弾一つが執拗に追ってくるので時間切れは免れない。

《禅符・全刀禅》

全ての弾幕を一定時間弾き相手へと向かわす。

《全無符・全と無の交差》

最初は円になり周りを周回しているが段々と何個かの十字状になり回り、

時間が経つと少しずつ弾幕の密度が大きくなっていく。

《無幻符・幻の空間》

縦斜めと弾幕が進んで来る当らない弾や透ける弾が進んで来るなど鈴仙の弾幕に似ている。

こちらも時間が経つにつれ密度が大きくなっていく・弾幕を見極めることが重要。

《伯符・名の刀の導》

一直線に少しスキマがある弾幕がこちら側に向かってくる。

来るたびに密度の大きい弾幕ができそれが一定時間ごとに分裂してこちらに向かって来る。

《季符・四季は儂く脆い》

四つの斜め部分からマスタースパークの色違いが来る・・・二度目は不規則に移動・回転をする。

避けた後赤 緑 黄 白 黒と弾幕は密度が小さい順に留まっているものが来る。

二度目を出す前に次のスペカを出させるのが無難で時間切れ狙いは不可能。

《無春夏・終わり来る季節の前兆》

紅と緑の弾幕が上方からかなりの速さで来る……

密度は適当で結構バグタイプ。

《季符・終わり来る永遠の季節》

全方面から四色の弾幕が来て中央に溜まってから一気に広がりそれを繰り返す。

《全四季符・一の季の永遠》

最初から透けて見える弾幕が来て最初は周りを回っているが後から色が虹色に変わったたり中心にスキマ が小さい円の弾幕が連続で来たりする。

《全無季符・現の季節を変える花》

黒い弾幕が中心に円や一直線や波の様にランダムで集まり四枚の巨大な花弁状になり残り1.5秒の所で四 枚の花弁が散りそれが分裂し辺り一面に一気にはら撒かれ密度の小さい虹の弾一つが追ってくるので常に動いて弾幕を避けなければならない(耐久スペルカード)

技説節 技的な一覧（随時追加）（後書き）

最近名前の意味を使ったのが好きです

一節 二二二ですか？（前書き）

この小説は小説と言えません、お気を付けください。
そして東方の二次創作でオリキャラが嫌に多いです
これでもよければお進み下さい
現在編集中〜

一節 ニジギジですか？

どもですす〜伯柳弧徹こと〜……ハクです！

私は今平原にいますです……おかしいですね、私は死んだ筈なのに生きていますよ。そして現在私は

真後ろからずつと耳を劈く様な、叫び声が聞こえてくるのですよね。そして地震みたいな揺れに、木が何本も折れていく音……

現在私は東京タワーを二した位の大きさの、今まで一度も見たことの無い何かに追いかけています。まあしいて言うなら恐竜かな？

さて、まるで説明口調で自分に言い聞かせておりましたが、いい加減逃げるのが疲れてきました……

だけど明らかに私へ向かって来ているので逃げるしかなく……そこにいきなり足元が無くなり 浮遊感が訪れて……
思いつきり目の前にあつた木にぶつかってしまった。

「痛い……ですね」

目の前は赤く染まりカナズチに、叩かれている様な感覚を、頭に憶えながら後ろを振り向くと……

そこには大きく突き出た木の根と先程からずつと逃げていた、恐竜と仮説した生き物の、足が存在していた。

「私また死にますか……でも夢なら元に戻るかな」

そして恐竜の口が素早く近づいてくる。

「やっぱりまだ死にたくありませんね……！」

そう思いながら手を近づいてくる口へとかざし、この手から何か剣でも刀でもいいから出せたら。と願ったら……

いきなり恐竜の悲鳴のような声が発せられた。見ると口に何か尖った細長い物が刺さって、血が噴水のように出ていた。それに吐き気を覚えながらも、何とか足に鞭をうち何とか逃げようとした。

まだ死ぬのは早い、次に死ぬのは……そう思いながら走ってこの場から逃げ去った。

《少年（少女）逃走中……》

一節 二二二ですか？（後書き）

（前書きで言い忘れ）

この作品は何かと歴史的におかしい所がありますと思われ
ます。それでも読むという方はどうぞです。

六月二十日編集一話目

二節 現状の能力です

はいはい〜今私出歩き中〜

ちなみに何かハント中〜熊でしょうか？今日は熊肉かな。

さて《武器具現化・伯刀》・・・《行使》

そして手に琥珀色に輝く刀を出現させて目の前の熊に思いっきり振りかざした。

そのまま熊は悲痛な雄叫びを上げ血を噴き出しながら後ろへ倒れ付した……

「取りあえずもう能力は扱えてきたかな……？」
自分の能力を再確認して纏めておくよと能力は……

《全てを視・具現化・行使・する程度の能力》

これが私の中で不思議と分った能力……程度ってどこかで聞いた事があるけど、それは置いときましょう。そしてそれを纏めておくよ……

《視》は、過去・未来を意識を集中させると視えるというもの。
他にも敵の思考・軌道も、視るとついてしまえばなんだって視ることが可能。

《具現化》は、自身の頭にくっつきりと想像することができれば、何だって出せる事が出来た。

他にも、自分の名前を模った武器、何故か刀になってしまっけど、

他に具現化した物よりもさらに強力でした。

けれど名前というのは、かなり大切な物で、その刀を壊されたりなんかしてしまうと、一気に自分の持つてる力が無くなって、動けなくなってしまうみたいです。

後この刀は、私の想いにより、強度、属性、鋭さなどが変わるようです。

《行使》は、私が認識している物を全て何らかの影響を与えたり、自身には身体強化をしたりと、応用が色々利くので扱いやすい。例で上げると……

《絶対に死なない・壊すことは絶対に不可能》そんなものが存在していても、殺す・壊す・ということが可能で、さらに付け加えると、存在意義が強力な物になると……

それこそ全てを無に返すなどできてしまう。

使い方を変えると死んだ者さえ蘇らすなんてことも可能。

さすがに使い方間違ったらそれこそまずそうだけど……

というかこれ程度ってついていいのかな……？

まあ能力については、考察した所このような感じで収まった。

とりあえず……現状報告終了です。

二節 現状の能力です（後書き）

六月二十二日編集

三節 東方……初めての出会い、嘘ですが

はいっ只今八ヶ岳にいますです……

どこでしょうねここ？まあ冗談は無しにして。

簡単に言うと幻想郷が出来た時の妖怪の山らしいです……

後、「もうなんであの妹はいつもああなのかなあ！？」……

今現在石長姫の愚痴を聞いてます。

石長姫って怒っても美しい方です、髪はロングヘアで、色は姉の木花咲那姫と同じ薄めの赤色で、私よりも身長が高いのです。私って身長高い女性に憧れますです。

ここ東方の世界……の幻想郷の無茶苦茶前の、日本神話位に称される世界ですね。

……だって現に有名な？山の背比べが目の前で繰り広げられて……でも木花咲那姫は妹紅の恨まれている方なんですよね。でも私にお二方はとても優しくしてくれましたから、その事件が起こらないよう頑張りますよう！

でも今は……今度のお二方の喧嘩は暫く止まらなさそうだし……

因みに喧嘩原因は木花咲那姫が……

「何で貴女の八ヶ岳よりも私の山が低いのよ！」

そんな事が発端で……

「そうよ！貴女の八ヶ岳を割ってしまえばいいのよ！」

そう言っつて八ヶ岳を何かをして割ってしまいました……

まあこんな妹に石長姫が愛想つかして今現在にいたるのです……

「もうあの妹本当に在り得ない！」

「はあ……」

そんな風に溜息しか出ません……

「ほんとあの妹と来たら……！」

「もう嫌よ！今まで目瞑って来たけどもう耐えられない！」

「でもさ……？自分の妹なんだからさ」

「スー……スー……弧徹……むにゃ……」

「寝ないで下さいよ、全く……」

……

「うにゆう……おはよゝ弧徹……ってあれ？」

だけどそこには弧徹の姿は無かった……

「弧徹？何でいないの……？」

呼びかけても弧徹はいなくて、代わりに一枚の紙が。

それには……

《しっかりと仲直りをしないともう二度と会いませんから》

《ps風邪引くと困るから……体調には気をつけてね……?》

そして石長姫の目から透き通った水が流れていた……

「弧徹の……バカ……」

今は醜くなった低い八々岳からは、とても美しくも悲しい声が出
ていた。

.....

「やっぱり……好意を無下にするのは心苦しいですね……
ごめんなさい石長姫、また戻ってきますからね……?」

三節 東方……初めての出会い、嘘ですが（後書き）

六月二十二日編集

三・五節 出会で死に際です色違いませんか？

周りは鬱蒼と生い茂る森の中……ではなく、太陽の光が差し込む林の中。そこには澄んだ泉のような物が存在していた。

「水が有るってことは人が住んでいたら……嬉しいですけどねえ……」

暫くは人に会わなくて大丈夫で、食料だって能力で何とかなっていたが、事実今は分らないが元は私とて人間です。いい加減人の形をした者に会いたくたってなる。

だけど現実には理不尽な物で、あの二人から別れてからと言うもの、会うのは只管、妖怪、巨大生物ななにか、動く何か、はつきり行つて意思がある者などに、ここ数千年？会えた記憶が存在などしない。だからいい加減……」

「人間さんでできてえ〜」

常人には理解不能な言葉をいいながら、私だって泣きたくもなる。そんなときふと、今まで何回か感じた事がある妖力を感じ、思わず私は殺気立ってしまう。そして振り向いた先には、髪色は黒く輝いていて、長い間放置しているかのような地面に付くほど長い髪。それに加え……女性として誰もが憧れるような体つきに、容姿端麗な顔つき。

「アナタハ……ダアレ……？」

そしてまるで頭に響くかのような、聞いただけで体がふらつく様な錯覚を覚える美声。そこにはまさしく、誰もが羨むような、美人、この一言でさえ言い表せる事が出来ない女性が

まるで何かを伝える様な、ゆらゆらと蠢き轟く短い刀身……ナイフの様な物を右手に持ち、そしてもう一方には、私の《視》でさえ、視る事が苦しい、何か半透明の小さな物を左手に持っていた。

「私は……しがない迷子です」

少し声の上擦りかけたが、それを抑えて言った。

「ジャア……アナタハ

シンデモダレモコマライヨネ」

その一言を言う前に私は何か、嫌な情景が浮かび上がり、咄嗟にバックステップを行った。

案の定、いきなり恐ろしい勢いの風圧により吹き飛び、少しばかり後ろにあった木にぶつかった。少々頭が熱い気がするがそれを片隅へ追いやり、先ほど私が居た所を確認したら……

そこには、先ほど在った泉など存在せず、況してや草木さえもが存在していないく、それどころか妙な歪さえ存在していた。

「ヨケタ……!?」

美人　妖怪の様な存在は、私が居た所を不思議そうに見下ろし首を傾げた。

そして妖怪はこちらを見て、まるで面白い物を見つけたかのように、静かな物だったが、微かに笑みを零し、先ほどとは違いどこか虚ろな目で……

「オニイサン、スゴイネ、コンナノハハジメテ、ダカラ、モット、ワタシトアソボウヨ」

「冗談願いたいですね」

私は咄嗟に自らの名を象る刀を出し、目の前の存在へと瞬時に走り、隙という概念を無くして刀を横へと降ったが、それは当るうとした瞬間……

「ソナモノハ、ワタシニハイミナンテナイヨ、オニイサン？」

まるで何が起こったが分らなかったが、刀に一瞬という言葉さえ生易しい瞬間に、輝も入らず砕け散った。それはまるであたかも水が蒸散したかの様に。

「つつ……!?」

まるで信じられなかった。今まで出会ってきた何かの存在をどん

なに強くて、この刀により切り伏せる事が可能だったというのに……。

その時突如、自分の中の何かが減った感覚があった。

今思い出したが、刀に名を籠めているという事は自分の存在を具現化していると同じ事だった。

つまりその存在が壊されると同じことなので、力がその分消える。今刀に籠めた名は《伯》だから私の名は全てで四つ、つまり私の中の力等々が全て四分の一になったという事。

今まで気にしなかった事だけに、今更ながら危険だと理解する。もし全てが無くなったら私という存在が死ぬなんてことも在る、それどころか存在が消えるという事だって。

「ここからは本気にならなきゃですね……」

「オニイサン、マダアソベルノ？」

「ええ……もっと楽しく遊べますから……安心してください」

「ジャア、ワタシモ、ホンキデアソブネ？」

『ダカラ……カントンニ、シナナイデネ……？』

その言葉を聞いた瞬間に相手の所へ一瞬で進む。

「オニイサン、ソレジャア、サッキトイツショダヨ？」

「残念だけど一緒じゃありませんよ」

先ほどとは一つ違う所、それは刀の名の違い。今度の名は《徹》つまり何かを貫き通す事。

そしてその意味も刀に存在する。
だから

「アレ……ナンデ……」

そして刀に斬るではなく、貫き通す、一種のレイピアの様なものになる。そして意味も合わせ、絶対に貫く刀身になるということ。

そして女性はゆっくりと地面に倒れ付していった……

それを受け止め《行使》により、この戦闘で起きたことによる傷を消去した。

それが甘いなんて事を理解して。

「さて、これからどうしましょうか……?」

はつきり行って困りものでしかこの女性は無い。事実、何時人を襲うかさえ分らないから、こうやって見ているしかない。まあ私の殺したくないなんて甘い考えによる物だけ。

「少しなら、構いませんよね……」

そして私は女性に少し近づき……《具現化》

これまた最低ですね、なんて思いながら女性の記憶を覗くが、そのような物は一切存在せず、それどころか、たった今生まれた存在だとも理解した。

「どういづことでしょうか……?」

そして、いままでなら絶対しない、存在の概念の具現化をしてしまった。これはその者の生まれた意義、存在の意味を現実に存在

させるので、プライバシーも何もないと言ってしまえるものだから。そしてその具現化したものには言葉が書いてあり……

「《全てにおいての恐怖と畏れの象徴》……！？」

これはつまり、全てにおいての初源であり妖怪などにおいても、存在意義が頂点であるという事。

そしてその存在はたった今生まれた存在。 事実矛盾だらけではない。

「本格的にどうしましょうかねえ……？」

全くもって自分で収穫した悩みの種をどうしようか、悩むしかなかった。

そんな時、微かだか圧力を感じ振り向いたら……

「そこにいるのは誰かしら？」

「しがない冒険者です」

「じゃあ貴方の傍に居る女の子はなにかしら？」

私は瞬時に理解した……勘違いされてるですね、と。

そしてその瞬間、まるで視えなかったが弓矢の弦を引く音が微かに聞こえたため、女性を抱えて一気に横へと跳ぶ。

案の定弓とは思えない音がしたかと思ったら、その後に爆発の様な音がして、そこにはクレーターが存在していた。

「あら？まさか避けられるなんて思ってたわ」

「冗談ですよね……そしてその勘違いを解いて頂けると助かります、女の子さん」

そう、先ほどから私に圧力の様なものをかけているのは、恐らく六歳あたりかと思われる少女。

「私には名がすっかりあるわ。だからその呼び方を止めなさい」

「だったらその名を教えてくださいただけると助かります」

「貴方に名乗る名は存在しないわよ！」

そういつて……銀髪の少女は先ほどとは比べ物にならない量の矢を、一発での確に私へと狙いを定めてくる。それを女性……先ほどから妙に縮んでいるが、抱えながら必死に逃げるが、終には矢に当り始め、それにより速度が落ちていく。

「痛いです……！《行使》」

それに対抗して矢を遅めにするためこちら一体に重力を三倍ほどかける。

しかしそれを物ともせず、矢は速度を落とさず何万発もやってくる。

それに避けきれず、せめて抱えている女性に危害が加わらないようにするのに必死で、気づけば体中が矢によって貫通してはいないが、穴だらけになり、血が留めなく溢れている。

最早意識が保てずにそのまま地面へと倒れ付しそうになる……が先に、もはや私を狙う六歳児と同じような体になった少女をおろし、そして能力を使おうとするが、連戦の所為で体が限界なのか、そのまま前に突っ伏してしまった。

.....

「全く……手間が掛かる妖怪だったわね……」

私が居る所は別に妖怪を寄せ付けないように、私が発案した薄い幕を張つてあるので大丈夫だが、こんな風に強力な妖怪が現れてしまつと、膜が破られかねないので、私自身が狩りに行かなければならない訳だが……

「あつあれ？もしかしてやつちやたかしら……？」

その妖怪と思っていた少年からは妖力など一切感じなく、それどころか常人といつても良いかもしれないくらいの力量だった。

「不味いわ……今すぐ家に運ばないと……！」

勘違いで殺しては流石に私としてもバツが悪い……でもそれは建前で、先ほど私が一回で一京という数の矢が出る物を只管後ろに少女を守りながら避けていた事に關心して、そしてなにか今まで感じた事の無い感情が溢れてしまい、その原因の少年自体に興味が沸いたからが本心。

「ふふっ……」

そんな事に思いをはせて微かに笑ったわけだが、傍から見ると仕留めた事に笑っているようにしか見えなかった、とさ。

三・五節 出会で死に際です色違いませんか？（後書き）

六月二十四日作製

ヒロイン昇格

説明疲れたよ

四節 今いる人は〜です〜

はいはいっ、今私は「二人とも、今日は何が食べたいかしら？」

……

「別になんだって構わないですよ〜」

「私もなんでもいい〜」

私の思考を止めた方は、白い服を着てそれに合わせているかのように、銀色に光る長い髪。そしてその返答に美人さんは困るように。

「一番困る返答ね。」

流石に私でさえ困る質問であるので……それは建前として。

「じゃあ和食で暖かい物で〜」

「お漬物も〜」

私に返答、それに何時かは忘れてしまったが、私が死に掛けた理由の少女も、随分と和風な返答をする。普段なら直ぐに……いえ、私以外には直ぐに返答するはずの美人さんは、少し考えて。

「じゃあ、ご飯に、大根のお味噌汁、それに鮭でいいかしら？」

「うん、それをお願いします〜」

「いいよ〜」

そしてその美人さんは、いそいそとキッチンの様な場所へ行ってしまった。

暇なので辺りを見渡すが、静か過ぎて寂しいので、どういう仕組みか分らないけど、テレビのリモコンの様な物のボタンを押す。もう今では見慣れてしまったけれど、あたり一面が宇宙の様に、星やら惑星やらが現れる。

「凄いいけど見飽きた〜」

「やつぱり外で見たいですけどねえ……………」

この仕組みは理解しないけど、この前銀髪の美人さん……………八意永琳さんが説明したのを簡単に説明したら、今ではもう外では妖怪を近づけないための薄い膜……………つまりバリアのような物が張っており、その所為で、今ではもう星が見えないそうだ、けれどももう宇宙の真理やら原理やらを解析してしまつたらしく、こんな風に擬似的に宇宙空間を出せるらしい。

しかもそれを解析したのは永琳さんで、僅か生まれてから三年でそれを解析してしまつたらしい。

しかしその所為でなにやら永琳さんは、家族から少し疎まれてしまい、生まれてから四年で自立をしたらしいです。この情報は一部の人の間では普通の事らしいですが……………

私が何故この事を知っているかというところ、会った時に初めは誰でも友好らしいですが、その内永琳さんが気味悪がられる様になり、相手が自然と離れていくのですが、私はずっと、友好的でいるため永琳さんが何やら不信感を抱き、本当のことを告白する薬を私に飲ませて、それにより私の本当の事が知られてしまつて……………流石にその時は今横に居る少女、フィエと仮に付けた名だけど、フィエが本気で怒つた。今となればいい思い出、でもその姿を見たかつたというのは内緒。

私の本当の事とは、永琳さんに対しての親心？心配？などですがそれ以外に何か喋つたらしく……………

自白する薬を飲んだら記憶が曖昧になってしまつて、らしくな
りですけど。

それで永琳さんは私に心の内をさらけ出して全部話してくれたの
で、こんな情報も知っているのです。あれから永琳さんは私に、す
ごく優しくて最早私としては、罪悪感が存在いたしませんね。

「二人とも？ご飯出来たわよ、もう擬似宇宙空間をやめなさい」
取り敢えずそんな罪悪感を捨て、ご飯を食べる事にした。

「はいです」

椅子に……では無く胡座を掻いて座る。

「頂きますです」

「毎回思つけどそれって何なのかしら？頂きます」

「永琳さんへの感謝ですよ、感謝」

他にも意味が有った気がしたけどお腹が空いたので切り捨てる。

「別にそんなの構わないのに……まあ悪い気はしないけどね？け
ど感謝するなら、その永琳って呼んで絵欲しいんだけど？」

「この鮭、塩が効いてて美味しいですね」

そんな風に永琳さんの話を逸らして行く。

「そんなに呼び捨てが嫌なの……？」

「それは　　あの、その……」

かなり戸惑つてしまい玉子焼きを落としてしまった。

「パパはどうして永琳って言わないの？」

「ファイエはまるで昔、一番最初に会った事を憶えていないかのよう
に聞いてきた。まあ実際覚えていないわけなのですが。」

「少し永琳さんは吹っ切れたように、またご飯を食べ始めた。私は
少し罪悪感を感じながら食べようとしたら……箸は空を切り机に、
ガツと音を立てた。」

「永琳さん……？」

「ほら口開けなさい」

「箸が空を切った訳は永琳さんが私のおかずを取ったから。因みに現
在そのおかずを永琳さんに……俗に言うあくんをされそうになっ
ている。」

「この人はやはりただでは起き上がらない方だった。」

「えっとその……」

「ふふっ」

「永琳、私も」

「誰か私を助けて頂けませんでしょうか……？」

「その後口移しまで持つて行かれそうになったが、呼び捨てにする
ことで、なんとかあくんだけですんだとき。後々思ったらそれが
狙いだったと思う。」

四節 今いる人は、です、（後書き）

六月二十三日後半部分を半分編集、
前半部分を追加予定、

五節 綿綿姉妹く愛でないで下さい私が年上ですく

周りは……四名だけど、そこからねたましい視線が。

「お兄様くよしよしですく」

「ああフイエ、ずるいわよ抜け駆けは」

「ほらまだ三十秒残ってますよ」

「うう……弧徹が取られた」

誰か助けてくださいですよ。

現在私の周りにいるのは綿月豊姫様と、綿月依姫様と、永琳と、フイエが私を愛でております。

「お兄様く」

「ほら、今度は私よ」

「違いますよ八意様、私です」

「私もまだ愛で足りないく」

「お願いだから離して下さい……」

『やだ！』

誰か……私の長い髪がそろそろ解れてきて……

「なら今度はブラシを上げてますねお兄様」

「フイエ、いい加減変わりなさい」

「私もブラシやりたいですよ」

「じゃあいつその事、皆でお風呂でも入りましょうか」

「私は男です~~~~~!」

『大丈夫!』

「大丈夫じゃないですよ!？」

流石に私の危険が直ぐ目の前に来ていると第六感がいつているので、瞬間移動で逃げようとしたら。

「逃がしませんよ、お兄様？」

今や私の身長を超えて、綺麗の言葉にピッタリと当てはまる少女に育ったファイエですが……

この頃私に対して恐ろしい、運動能力以前の物を発揮します。

「お兄様……私達がすっかりとお背中お流しいたしますからね?」

私は、ここで終わってしまうのですね……
そんな風に明け暮れていると。聞き覚えのある警報音が街中になる響いていた。

「ちっ……」

「へえ……私達を邪魔しようなんていい度胸じゃない……妖怪」

「八意様……別に妖怪を皆殺しにしても構いませんよね……?」

「妖怪如きが……」

「えっと……皆?」

四人から恐ろしいほど殺意が伝わってきたので、《視》で四人の感情を見てみたら……

色が分らなくなるぐらいの真っ黒さだった。

「血祭りにしてあげる……！」

「甘いわ、存在ごと消し去ってあげるのよ」

「八意様？それではまだあまいです」

「存在しているのが自ら嫌にさせて上げないと」

皆様……お願いだから正常に育ってください。

そんな願いも届かず、四人とも街の外へと行ってしまった。

「平和……じゃねえですねえ」

私には平穩なんて存在してないと、理解できた瞬間だった。

そして二時間後に四人とも帰って来たが、サンタさんが驚くぐらいの紅だったので、私が四人を無理やりお風呂へ入らした。お風呂から出た後、皆何故か顔を真っ赤にしてそのまま寝てしまった。

取り敢えず、これから四人を私関係で怒らせないように絶対しようとして、心に誓いを立てて、これから私が妖怪を退治すると決意した。

五節 綿綿姉妹〜愛でないで下さい私が年上です〜（後書き）

六月二十五日編集

六節 怨み怖しです (前書き)

何か最後眠っておかしくなった気がする・・・

六節 怨み怖しです

今私は永琳と豊姫様と依姫様が用意してくれた家にいますです。

「お兄さんご飯でできたよ?」

「今日は……懐かしいですね、オムライスですか」

そして今は四人では無くて、フィエと二人だけです。

「今日だっけか……?」

唐突にフィエがそんな事を言い出した。まるで私の思っていることが分っているかのように。

「大丈夫ですよ、月へ行ったらまた五人で楽しく過ごせますよ。だからそんな悲しそうな顔をしないで下さい……」

先ほども行った通り、今はフィエと二人だけでここに住んでいる。永琳達は月へと移住する計画を創案と、この地上に居たらいずれ穢れは全てに及ぶがために、寿命が百年まで縮むという事を証明してしまったがために、上層部の奴等とその計画の責任者として任命の様なものをされ、やむ終えず私達と離れる事になった。まるで上層部側には、私達ではなく私が邪魔のように。

「やっぱり永琳の味が再現できないよ……」

「それでもフィエの料理は他と比べ物にならないくらい美味しいよ」

最早この地上の民はおかしくなっている。昔は信仰していた神

を封印してしまったり、生活の物は、昔は再度活用できる物のみを作製していたのに、今は使って捨てるなど当たり前、捨てた物は地面に付いたら即座に消去されるなど、生活、技術の水準が年を重ねるごとに高くなっていき、服装さえ血迷ったかのように奇抜な物へと変化している。そしてここには金なんて物は存在さえしなくなつた。金って何ですかと言われて答える事が出来るのは永琳と同じ位の年の者でしかない。最後には、味の意味さえ忘れたのか調味料など存在しなくなり、遺伝子を操作して作られた必要最低限の食物しか食さなくなった。しかし一部のものでは、つまり月への移住計画を反対しているものは調味料などを自ら作製したりと、今の歴史の波を反対している。そして私達は現在、月へ行く予定だといふのに、その反対派のみが住んでいる区域に住んでいる。これはある意味永琳達への反抗なのかもしれないけど。

そんな事を考えながら、味が薄くなったオムライスを食べっていると、今や何年も使っていない通信機能の付いた相手が映像で見えるというものがピピピと小さな機械音を立て、誰かがここに掛けているという事を知らせていた。

「お兄さん……出ないの？」

「……今出る」

誰が掛けているかなど分っているからこそその戸惑いだった。そしてあの三人が有言実行な人だったからこそ、今日に思いを馳せていたのかも知れない。

今日こそが、この日こそが、月へと移住できる最後の日だからこそ、私は……

「ファイエ……先に行ってくれろ？」

「分つた」

そして最高二十回で切れる機械音のボタンを押す。

「久しぶりね……弧徹」

そして忘れたくても、忘れる事の出来なかった声、そして私が作った白き服など捨て、今の流れの服になった、赤と青の服。

「そうですね……永琳」

何故か涙が流れそうになるのを堪えていつて見せたが、今の私はあの時と同じようにうっすらと笑みを浮かべて入れてるだろうか。

「今日中に残りの者達がここを出て月へと移住するわ」

「そうですね……」

私はいつも通りの声を出せているのでしょうか。

「弧徹は月に来ない気なの？」

「まさか、私は行きますよ」

私に嘘の癖は無かったのでしょうか。

「なら時間分ってるわよね」

「今から六時間後の夜中十二時です」

私は永琳達に辛い思いをさせなかったのでしょうか。

「間違えてないわね、速く来なさいよ？あの二人も貴方達が来るのを待ってるんだから」

「じゃあファイエの大好きな料理をいっぱい作っておいて下さい」

私の選択で四人は涙を流さないでしょうか。

「じゃあ切るわよう」

「はいはいそれじゃあ」

その時唐突に耳を劈くような音がして、通信が切れた。そして辺りを見回すと、そこには私が住んでいる家以外は全て跡形も無く破壊されていた。

その意味は、ここの居住区が全破壊されたという事だから、明らかに人為的なもの。

そして嫌に響く音が聞こえ真上を見たら……

そこには今日飛び立つはずの飛行船が存在していた。

「ああ……そういうことだったのか」

ようやく私は理解した。何故今日、通信物に今から一時間前に集まるようにと書いてあったか。

何故私のところに届いたものが文字化けしていたのか。

だけど一つ理解できなかった。何故永琳までもが私に嘘を付いたのか。

「まさかっ……」

一つ嫌な予感がし先ほどの通信機を直前までの状態に直し、履歴を見たら……

《ハツキング》

この一文が、全てを理解させるまでに至らせた。先ほどの永琳の声は同じだけど喋る位置をずらされていた。だからこそ気づけなかった。

「ああ……なんで私は……」

悔やんでも悔やみきれなかった。だが唯一良かった事はフィエをギリギリだったに乗せれた事だろうか……そして目の前にさっきまで無かった機械物質があった。

それは何かを見るときに使う物だから、今頃この場所が月と飛行船で生中継でもされているのだろうかとおもつと、恐らくあの四人暴れているだろうなあ……と落ち着きながら思考をする。

そしてフィエが乗っている飛行船から縮小拡大可能の爆弾が大量に降ってくる。

「あれって……永琳と豊姫様と依姫様が中心に考えられた物だったっけ」

あの三人自殺しないですよ。なんて考えてしまう。

「……………」

そして空耳だろうかとても遠い所から悲痛な叫び声が聞こえてし

まっ。

「もういいですよ……」

もう疲れたかのようにそこ等の壁に寄りかかりながら腰を下ろし、バリアが機能しなくなったのか、あたり一面から、いままで何処に居たのかと思うような大量の妖怪の軍勢が来ていた。

「なんだかなあ……ははっ……」

もう私は笑うしかなかった。いまからどう足掻こうとも、愛しの四人には会えないと理解したから。そして自分が恐らく死のう事も。

そして先ほどとは明らかに大きさが違う爆弾が一万と降ってきて内部が光り始めていた

それに気づいたのか、妖怪たちは慌ててここから逃げようとしているが、もう遅い。

「せめて……私の事を忘れても構わないから……生きてください」

その言葉を言うだけで、どうしてか涙が流れてしまうのは、私が弱いんだろっなと思いつながら目を閉じた、死を受け止めるかのように……

.....

そして飛行船では一人の少女が泣き叫びながら穢れを出し、その飛行船の人間を殺しつくした。

月では美しき三人が、只管自分を恨み、苦しみながら泣いていた。

どちらも一人の少年の事をずっと思い続けながら

六節 怨み怖しですゝ（後書き）

六月二十五日編集

一歳八ヶ月

おかあさんはさんにちかえってこなかった おとおさんは ぼく
ともうとに たくさんけーきとおすしをたべさせてくれた おか
あさんはにがてだけど おとおさんはだいすきだよ

.....

二歳一ヶ月

おかあさんとおおさんが ぼくをなくって来た あか
いものが たくさんぼくから でてくるしいけど いもつと
のために がんばりたい な

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

- - - 二歳六ヶ月

きよおは おとおさんがたくさんないていた だから つらそう
だったから いっしょにねてあげた ねるまえに おとおさんに
ぎゅっしてもらえた うれしいな

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
三歳四日目

お母さんは お父さんじゃない人を たくさんつれて来た お父
さんは どこにいったのかな
ごはんのときも 妹がないちやうから 苦しいな

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
三歳十日目

今日はお父さんが帰ってきた 僕の左腕と 妹の右腕を 悲しそ
うに見ていた

べつに僕たちは気にしていないのに

夜に お父さんは出て行っちゃった

妹を守ると。

もう私の手は、心は穢れてしまったけど。
私は決めた。

もう、私だけだから。

親の、血の所為で、顔は良く見えないけど。これの所為で、もう、
動かない左腕だけど、優しくかった筈の父に感謝し、絶望へと導いた
母へ憎悪を抱いて。

私は、妹を。これが汚しかけた妹を守るから。

また、殺しても。私が。

.....

- - ? ? ? ? ? ?

ボクハ モウ モドレナイカラ

ワタシハ モウ クヤメナイカラ

ヨキヒトニナド ナレナイカラ

アシキヒトニナド ナレナイカラ

セメテ ギゼンヲ ワタシハ ボクハ ススムヨ

七節 「どこですか？あれ？デジャヴ・・・」

痛い……痛い……誰か助けて……！

「つつ……！？」

目を覚ましたら回りは鬱蒼と木が生い茂るところだった。

何やら背中がベタベタするので触ってみたら、余程嫌な夢を見ていたのか、物凄い汗を掻いていた。

「あれ……？」

ふと、いつもある筈の感覚が無い事に気がつき、首元を見たら

何も無かった。

「何で……！」

急いで辺りを探すが見当たらず、行使でここ一帯を検索するが何も引つかからなかった。

「幸先悪いですねえ……くそっ……！」

思いがけず、口が悪くなってしまっが、こればかりはどうしようもなかった。

しかし諦め切れず、具現化で出そうとしたが、どうしても出来なかった。

「ああもつ……！」

無くした物は、幼き頃の私と、最愛だった筈の妹が写った写真を入れたロケット。

常に肌身離さず持っていたというのに、この現状に最早苦笑するしかなかった。

どうしても諦めきれず、具現化で出そうと思いつくが、やはり一つの気持ちが上回りすることが出来なかった。

ふと、ロケットを思い浮かべたら、過去の忘れることの出来ない妹の言葉、そして私の最低な行いを思い出してしまった。そしてあの時の姿を……

「こんな所でそんな事思っているも仕方ないですね……」

どちらにしてもいずれは受け止める事実、なら前を向ける間は向いていよう、そう思って、次の疑問に頭が取り掛かる。

「どうして私はこんな所に居るのでしょうか？」

事実私は最期には、あの異常な数の爆弾によって、余り覚えては居ないが、死んだ筈。それなのに私は生きていて、そして木々が生い茂るところにいる。おかしいと言えない。

けれど、考えても仕方ないと理解して、何処か村のような所が無いか、散策してみようと歩き出そうとしたとき……

「くそつたれ……！」

気持ちがまだ落ち着かず、口がまた悪くなるが、一瞬の理解で後ろへと跳ぶ。

そして私が居た所へ、何か大きなものが振りかざされ、地鳴りの

様な物がしたと思い、前を凝視するが、砂が立ち込めており、見ることが出来なかった。視によって、再度何が居るかを確認する。そして視えた先には、蟹の鋏の様な物。そして行使によって風を止めて、砂の舞を止め、私に攻撃を仕掛けて来た者を見ると、それは明らかに蟹だった。違う所は精々大きさと、木の二倍辺りの大きさだった。

「面倒ですね……」

私としては相手にするのが面倒臭いのと、気持ちが悪くなるので、容赦せず攻撃を加えるため、私自身の名を具現化により出し……

「あれ……？」

しかしそれは刀ではなく、銃だった。

「刀なら使い方心得ているけど……銃器は……」

自分の名は、今まで《伯》と《徹》だけで、今回は《柳》の名を取ったら、何故か銃器に。

「私の事ながらもう判りません……」

取り合えずまだ間は有るが、蟹の妖怪は着々とこちらへ向かっている。多少卑怯だが、視によって蟹の弱点を検出と銃の軌道を視える様にした。

「これで終わりです」

そして一発を弱点へ狙いを定め、撃ち、蟹は泡を吹きながら倒れ

付した。

銃は必要ないので、何故か一緒に出てきたホルスターに、銃を回転させながらピツタリと収めた。そして、蟹の妖怪を縮小して凍り付けにして、食料として保存する事にした。

具現化でも食料は出せるが、どうしても考えて出すことになり、常に味が一定になってしまつてしまうので、例え妖怪でも、元が判つていれば食べることが出来るので、こういったあからさまに蟹と判る物は貴重だからこそこうやって保存しておく。今更ながら、行使は応用どころでは無くなっている気がしてしまう。取りあえず、何時までもここに居ても仕方ないので動くことにした。

「あれは……」

暫くしたら、何やら木がまとまって置いてある所があり、それを辿って行くと、村を発見できたので、寄る事にした。本音は見つけられて良かった。

そして木の門がある……言ってしまうと恐らく小学生で飛び越えられる策のような物が見つかり、そこへ行くと……

「貴様何者！」

無難に答えるように……

「しがない旅人です」

「悪いな旅人とやら、家のの者が迷惑かけて」

現在私は、この村の村長の、豪気さんと杯を交わしています。

最初は怪しまれたけど、蟹の妖怪を倒したと言って証拠を見せたら、豪気さんが私を気に入ったらしく、家に連れて来てくれた、そして今日は泊まって行っても良いそうです。

「いえいえ、まず来た者が怪しければ、恐れずに立ち向かう、私は立派だと思います」

「そうかそうか、そう言って貰えると助かるよ」

「いえいえ」

ちなみに今食べてるのは、私が倒した蟹の鍋。

「そうだ、どうせだから家の娘の由梨を嫁にとらんか？」

「ちょっとお父さん！何言ってるの！わたしじゃ駄目ですよー！」

「ああそうだったな……お前は……」

「ほらお父さん、泣かないの」

「ああ悪い……どうも涙もろくてな」

何やら事情があるみたいですが、無闇に首を突っ込む物ではないですね。せめて情報を持ってから首を突っ込みましょう。

「ほら旅人さん、あんたも飲みなさい」

「ありがとうございますです」

「してあんたさん、名はなんという？」

「伯柳弧徹、孤独に徹すると解釈してます」

「そうか、なかなかいい名だが……寂しい気がするな」

「そうですか？」

「ああ弧徹さん、あんた命を大切にしろよ？親より先に死ぬなんて一番酷い事だから……」

「つつ……！……はい……そうします……」

「まったくお父さんったら、お酒弱いのに直ぐ飲むんだから……」

「はは…… 由梨さん父親思いなんだね」

「由梨でいいよ……こんな父でも凄く優しく強くて……とって
も……かっこいい……お父さん……なんだ……！」

由梨はまるで豪気さんにこれからが心配だと言っかのような目を
して、そして由梨は話している内に堪え切れなくなったのか、
ポロポロと泣き出してしまった

「あ……！ごめんなさい……わたしったら……」

「良いんですよ、泣きたかったら……幾らでも泣いたって……理
由なんて聞きませんから……」

そして私はなるべく優しく、強くしたらまるで壊れてしまっかの
ように思い、出来る限り優しく抱きしめた。

「ありがとう……」

とにかく子供をあやすように、優しく抱きしめ、全ての思いと気持ちを受け止めてあげた。

七節 ニゴどゴゴですか？あれ？デジヤウ・・・（後書き）

六月二十なのか、編集

七・五節 最低やら記憶やら泣きやら

現在私は村の豪気さんと由梨の所にお世話になっています。そして雑用をやっています。

「弧徹さん、悪いがこの近くの川に水汲みに行ってくれないか」

ちなみに現在真夜中で、具現化で出した時計では、十二時を回った所です。

「はあ……別に構いませんが、何に使うのですか？」

「まあ色々とあるんだよ。取り敢えずこの桶一杯分で良いからさ少々謎ですが、涼みに行ってみたいですし、そのついでとして行きましようか。」

「場所を間違えないようにな」

「一ヶ月もここに居るんですから、分かりますよその位」

そのまま、豪気さんから桶を受け取り、川へ向かうことにした。

……
……
周りは私が少しでも迷わないように、木を伐採してあり、随分と開けた所になっていた。あれからと言う物、子供は迷わなく、この道自体に妖怪が寄り付かないような結界が張っており、安全となっている。だけど稀に、私の結界を超える強力な妖怪が来るので、その時は私が感知し、直ぐに来て退治するのですが……

「そろそろかな……」

目の前は、川が夜空の星に反射して居るようにも見え、近くに来ると、川自体が輝いている様にも見える物だった。

「よつと……です」

取り敢えず涼むため、桶を横へ置き、靴と靴下を脱ぎ、足を川の中へと入れた、今の季節は夏真っ盛りで、夜も暑いけど、川に来れば、とても涼しく丁度良かった。

そんな風に目を瞑りながら、涼んでいると、何処からかパシャパシャと何かの音が聞こえた。

「誰か居るですか……」

怖くて思わず声が裏返ってしまいそうだったが、何とか抑えて聞くが、何も返ってこなかった。だけどそれで以降パシャパシャと水の音は特に聞こえなくなり、水が流れる音のみが聞こえた。

それが自分をさらに恐怖心を掻きたて、直ぐに桶に水を入れて立ち去ろうとするが、運の悪いことに、足を滑らし、川の中へそのまま入ってしまう。

「痛い……」

もう思わず泣きそうになってしまつが、堪えて出ようとしたとき、先程と同じ方向からまた、パシャパシャと水を弾く音　ではなく、こちら側へ、少しずつだが進んでいる音。

今悔やんでも仕方ないが、改めて自分の耳の良さに、恨む勢いだつた。

そしてさらに此方へ来る音が早くなり、もう涙が出る直前で……

「ひぐっ……！」

思わず女の子のような声を出してしまつが、羞恥よりも、恐怖が上回り、頭が最早ぐちゃぐちゃだった。そして遂に人影が見えてきてしまい、気絶しそうな勢いだったが

「弧徹さん……？」

その声で恐怖などなくなり、予想以上に安心したのか一筋涙が流れ出てしまう。

「弧徹さんどうしたんですか!？」

「なんでもないんです……あれ？」

もう頭が色々と働かなかったので、取り敢えず由梨の顔を見るため、目線を上へと上げたら

……それはとても薄い……大事な所が透けて見えてしまうような、タオルとも言えない物だった。

なので思わず私は目を背けてしまう訳で。

けどそんなことに無関心か、それとも気づいていないのか、私の行いに由梨は首を傾げていた。

「弧徹さん？どうかしましたか？」

「あの……その……服着てくれると私的にとても嬉しいのです」

その事に良く分からなかったのが、由梨は今一度、自分の今の状態を見て……

「あっ………!!」

幸いかは知らないけれど、由梨は叫ばず、早く私としては服を着て欲しい物の、由梨は頬を赤く染めたままで、その場に立ちっぱなしで。

「あの………由梨？」

思わず、目を背けながらだけれど、尋ねるしかなかった。しかし由梨は全く返答せず、何やらグラグラして 倒れかける。

「ちよっとまった………!!」

由梨の後ろには大きな岩があり、もう助けることだけに専念して、抱え込むことにした。

一応顔を見たら、真っ赤にしたままだったので、どうやら気絶したようでそのまま倒れかけたようです。

その後も暫く目が覚めなく、仕方なくおぶって行くことにしたけれど、豪気さんが待っていて、この状態を見て、何とも言えない顔をしていて、確信犯だと、理解する。

その後、由梨とは暫く、話をせず、顔を合わせるたびに由梨は顔を真っ赤にして逃げてしまった。

「はあ……」

私はあの時から何回……いや、何十回ものため息を付いているのだろうか。そして弧徹さんが来てからという物、余りため息は付かなくなった筈だったのに……

「はあ……」

あの時、弧徹さんに思いつきり私の体を見られてからというもの、誰が見てもわかるように、弧徹さんから避けてしまい、それに合わせ、ここ最近の私のモヤモヤした気持ちに、思わず溜息を付かざる終えない。

「お前はいつまでそうやって居るんだ……」

「だって……」

元はと言えば、一番悪いのは、この父だと思うが、それは責任転嫁とおもい、さらに自分へと何かモヤモヤした気持ちが追加されて行く。

「我が娘ながら今の状態は誰に似たんだか……」

「お父さんじゃなくて、きっとお母さんだよ……」

今の発言に思わず、墓穴掘ったかな……と思い父の顔を見たが、特に変わっている所は無かった。

そして私の言った事に父は少し考えるそぶりをして……

「まあ確かに、お前は由希華のいい所を全て受け継いでるもんな」

今は亡き、母の名を父が出したことに、私は驚きを隠せなかった。私の母は、前の……ミシヤグジ様へと生贄になつた身だった。ミシヤグジ様へは、年が三つ回ることに、村の長の伴侶となつた女性か、ミシヤグジ様に選ばれた娘か、村で選ばれた者が行くと言う、三つがあるのだけど、優先順位が、伴侶、娘、村で選ばれたものであり、母は今の村の長、父の伴侶となつたため選ばれた者だった。

それ故に、長の伴侶となつた者は、最初は逃げないで居るが、残りが少なくなると逃げ、村の者が捕まえると言うのが、年を重ねた方が言うにはそれが普通だったらしいが、私の母は最期まで父の傍にて生涯を過ごした珍しい方だったらしい。

そんな母は体が弱く、私は逃げなかつたのではないかと、一時思つたこともあつたが、それは違つた。その事を父に言つたとき、どんな事も寛容に許す父が、私に対して本気で怒り、頬を叩いた。父がその時泣きながら言つたことは今でも憶えている。

『由希華は……お前の母は確かに体が弱かつた。けれどそれでも命を捨てる思いでお前を生んで、そして世話を自分がやるうとして、由希華は私にやらせてと決してお前を放さなかつた、何故か分かるか？』

由希華はこう言つたんだ。『せめて私が生きてる間、この子の命を感じていたい、少しでも母の温かさ、優しさ、顔を憶えて欲しい』そう言つたんだ。その母の気持ちを、お前は侮辱するのか……？』

そして私は母の代わりにこの父を支えていこうと思つた、だからこそ、父はもう二度と泣かないと決めた筈の涙を流していた。この年で私がもう二度と会えない存在になるから。

私は初め、この事を受け止めていた、父は泣いていたが、それも母と同じように死ぬるのなら、そう思っていたのに……弧徹さんが現れてしまった。最初は弧徹さんの事は特に意識していなかったのに、接していくうちに、その優しさ、心の強さに引かれていつてしまった。そしてこの人と……一緒にいたい。そんな気持ちを持っていた。だからこそ父は私を応援してくれて……苦しそうに泣いている。それもそうだ。今の境遇は父の境遇とほとんど同じなのだから。

「なあ由梨、お前は本当に良いのか？」

父が言っているのは私が弧徹さんに思いを伝えないのか、そういう事だろう。けれど私は……

「うん……伝えたら、もっと苦しくて、辛いから」

それなのに、どうしてか涙が流れ出してしまふ。もう決意はしている筈なのに。母ならどうしていたのか、思わずそんなことを考えてしまふ。

「由梨……お前は要らない所だけ俺の血を引いて困るよ」

「本当にお父さんの所は要らない所だけだよ」

「くはは……娘に言われると厳しいな」

「じゃあ私行くね……」

もうこれ以上は、もっと苦しくなってしまふから。

「ああ……由梨、これだけは言っとく。決して無理だけはするな」

「うん……」

そのまま私は、何かから逃げるように森の中へと入っていった。

.....

「むう、何処に居るんでしょうか」

私はやっぱり今の関係が続くのは嫌だと思い、由梨に謝るため村を歩いているけれど、一向に見つからなかった。

「もしかしたら川に居るのかな？」

村に居ないと思い、他はそこ位しか思い当たらないので、少し足を速めて開けた道へ行こうとすると……頭に嫌な感じが来る。これは恐らくこの道に、力のある妖怪が来たと言う事だが、由梨がここに居ないことを考えると、まさか、そう思い、急いで私はこの道を進み由梨の所へ行く事にした。

.....

「びっしょり……」

このまま村へ戻れば弧徹さんと会うことになる。その事が私の足を重くさせる。

「やっぱりもう何時も通りにしなきゃ」

このままこの状態を続けていたら絶対後悔する。そう思い村へと足を早めようとした時……突然黒い何かが私の前に飛び出てきて、

咄嗟の事で足が動かなく、その黒い者が私に何かを振り上げ

「由梨……！」

私は死を受け入れた筈だった、しかしそれは杞憂に終わる。そして変わりに何度も、何度も聞きたいと願った声、そして呼んで欲しかった名が。

「弧徹さん……！」

そして何度も呼びたいと願った名の人が目の前に居てくれた。

.....

「弧徹さん……！」

その名を何度呼んで欲しいと私は思ったのか。その声を私は何度聞きたいかと思ったのか。

そして……しかし空気を壊すかのように、目の前の妖怪は私に対して、何か能力を使ってくる。その事にイラ付きながらも、気持ち

を切り替え、目の前の妖怪に、威圧を掛ける。だけど伊達にここの結界を破っていないのか、それに少し怯みながらも、私に対して攻撃を仕掛けてくる。しかしそれはただ、棍棒を見境なく振り回しているだけで、私には全く当たらない。

「うざったいですね」

私は痺れを切らし、徹の名を取り、刀を出す。そして力を込め……
…思いっきり放つ。

それに当たり、妖怪は腹のちょうど真ん中辺りに、風穴のようなものが開く。

今のは空間自体を貫いたため、簡単に衝撃波の上級な事を行った感じですよ。

しかし妖怪はそれでも立ち、何をするのか、棍棒を目の前に横にして掲げ……

「なっ……!？」

棍棒は一瞬にして、私と同じ色、形状、それどころか性質が同じ刀に。

そして妖怪は私をあざ笑うかのように口の様なものを吊り上げ私の後ろ、由梨のいる方向へと私と同じ攻撃を放った。

「え……」

しかし由梨には気づけても、そこから動くことが出来ず

私の前に出た何かに弧徹さんは全く怯まずに攻撃をかわしたりし
対処をしていく。その動きは何処か手馴れていて、まるで弧徹さん
が別人のように感じた。

そして弧徹さんが攻撃に出て、何かを倒したかと思ったとき、何
かは、持っていた棍棒を、弧徹さんと全く一緒のものへと変えた。
そしてその事に驚いていた私に、妖怪は何故か弧徹さんではなく、
私のほうへ向き、先ほど弧徹さんが出した技と、全く同じだと感じ
られたものを、私の方へと放ってきた。

「え……」

いきなりの事で、私は思わず足が竦んでしまい、避け様とするこ

とが出来ず、あと少して私の所へ届くという所で、何か私に多い被った。

そしてそれは、スルスルと落ちていき、見たらそれは、実間違えようのない格好の……

「弧徹さん!？」

弧徹さんからは、大量の血が出ていて……

「由梨……怪我は……無い……?」

自分の身ではなく、私の事を心配する弧徹さんに私は思わず怒鳴ってしまふ。

「馬鹿言わないで下さい!私なんかよりも自分の心配をしてください!このままだと弧徹さんは……!」

その先の言葉が私には言えなかった。それを言ったら、受け止めてしまふような気がしたから。

「こんなんじゃない……私は死にませんよ……それよりも……」

弧徹さんは私を優しく振りほどき、血をダラダラと垂らしながら、何かの方へと向き……

「私の大切な者をよくも傷つけようとはしましたね……それは……死に値する事……貴方は……永遠の苦しみを味わいなさい……」

そして弧徹さんは腕を上げ、指を合わせ、パチンツ、と音を出したかと思ったら、何かは声も上げずに溶けるように地面へといった。

そして弧徹さんは後ろへと倒れそうになったので、受け止める。

「弧徹さん、傷は……！」

「大丈夫ですよ……だから少し寝かして下さい」

弧徹さんの行った通り、傷も血も無かった、そして弧徹さんは微かだが、息をして寝たようだった。そのことに安心し、私は、とても軽い弧徹さんをおぶって、村に帰った。

そして帰った後、父にとても怒られたが、目は優しい目をしていたので安心したようだった。

弧徹さんとは仲を戻し、残りの時間を楽しくも切なく過ごして行った。

.....

八節 神様ミシヤグジデステ〜？

「豪気さん……一体何処まで行くんです？」

現在私は、村の皆様と一緒に、山を何時間掛けてか、登っております。

「ははは、もう少ししたら分かるよ」

けど、本当の目的を教えてください……皆様とこの一年で仲良くなっただけなのに……

ただとそんなことよりも心配事があり

由梨が少し元気無い様なのです。それに最近、素っ気ない態度ばかり私に取ってきて……

嫌われたのでしょうか……？

いえ、そんなことは……ないはずですよ……うん、多分ない……

一度水浴びをしていた処を私が見てしまい、気まづくなったりはしましたが、すぐに……

仲直りしたはずなのですが……？

どうしまししょう……思い当たる節がありすぎて困ります。

そんな事を考えてる内に着いた場所は……

「寺でしょうか……？」

見た所、そこまでさびれていませんから、恐らく定期的に誰かが来て手入れをしているのでしょね。そんな考えても仕方ないことを、思っていたら突然、豪気さんに呼ばれ。

「弧徹さん」

「はい？……った……！？」

振り向いたら、豪気さんが片手に持っていた、長方形の長い木で、思いつきり頭を打たれた。

「豪気……さん……？」

そして私は……豪気さんの後ろについていた、由梨の、とても悲しそうな顔を見た。

.....

.....
訳ありのようですし気絶した振りをしましょう。

「ミシヤグジ様、今年も豊作を約束して頂きますでしょうか？」

「ああいいだろう。で？今年の捧げものは？」

ああ……そういう事ですか……生贄ですか……か。

皆の馬鹿……私にすっかり言ってくれればさ、お世話になったのですから、その位気絶させなくても、逃げないで引き受けたのに……いや、寧ろ考慮しての事なのかな、皆、人が良いですし。

だから、由梨と豪気さんはあんな顔していたんですね。

なんか、悔しい

「今年は我が娘を捧げに」

え？

「そうか、して、その者は？」

「ここにいます」

「ほう貴様が。あの頃に比べて少しは大きくなったものだな」

ミシヤグジ……の言葉に由梨は、私にしか気づけない位の、微かに眉を顰めた。

「ミシヤグジ様」

「なんだ？」

「豊作の件……お願いできますよね」

「由梨、お前なにを言っているんだ……!!」

「ああ約束してやるとも」

私はようやく理解した。だから由梨はあんなに泣いて、素っ気ない態度とったりしたのですね……

「なら、構いません」

そんなこと知ってしまったら……!!

「では、ミシヤグジ様、これで私たちは」

だからこそ私は、豪気さんの誰にも悟られないような、辛い感情が視えたから。

「私は構わない。なんて言ってますん」

私が替わりになって上げるしかないでしょう……？馬鹿親子……

「弧徹！？お前は気絶してたはずじゃ……！」

そんな豪気さんの怒声を気にせず、私は出来る限り、控えめに聞く事にした。

「あの、ミシヤグジ様？」

「なんだ……」

少々、ミシヤグジは機嫌が悪い声音だったが、気にせずに、私は言葉をつらつらと言っていく。

「生贄を私に変更することって、出来ませんか？」

「弧徹さんなにをいって……！」

由梨が驚いたように問いかけてくるが、それを無視していく。

「早く答えてくれませんか？」

「貴様……いいだろう……」

「どうもです」

ミシヤグジは、私に殺意を向けてきたが、それを無視して、逆に上回る殺意を向けてあげた。

それに驚いたのかは分からないが、生贄の件を許可してくれた。しかし由梨は納得できないのか、反論してくる

「弧徹さん何を言ってるんですか！」

その声をもう二度と聞けないと思うと、少々辛いですが、私はそれを受け流していく。

「きこえなかった？」

「そんなこと……！」

「その人間……」

「え……？」

「貴様はいつまでこの場に居る気だ……」

私に苛々していた為か、ミシヤグジは、声に威圧を入れながら、

由梨に消えると言っている。

「そんな……」

「私を嘗めているのか？貴様は」

「そんなつもりは……！うぐっ……！？」

ミシヤグジに私は殺意を全開にしながら、由梨がこれ以上ここに居るのは危険と思い、由梨に刀の鞘で、気絶させるだけという行使を使い、由梨に峰打ちをして気絶させる。

「豪気さん、早く由梨を連れて行ってください。でないと神の怒りを買いますよ？」

豪気さんは、複雑な顔をしながら、去るように村人に言っている。

「ああ……わかった」

私にとって、その一言で十分だった。

そうして、全員が村へと帰るため、山を下っていった。

「さて人間、貴様、先程から私に対して嘗めた事をしてくれるではないか」

「ははっ………そうですか？」

その私の態度に、本気で怒り出したのか、ミシヤグジで祟って来るが、私には一切意味など無い。その事により、更に油を注いだらしく、辺りの生き生きとした木々が、枯れて行く。

「なにが可笑しい………！」

「まあ主に口調でしょうか………？」

「戯言を………！」

そういって、ミシヤグジは喰って掛かってきた。

それを私は直前まで引き寄せ……

「パンツ！と軽い弾く音を出し、首元に手軽な銀のナイフを掲げてあげた。」

「な……！？」

「ミシャグジ……ではなく、幼い少女の神は、有り得ないとも言つかのように、驚いた顔をした。」

「あんまり力量を謀り間違えると、死ぬよ？」

「いい加減力が暴走しそうだったので、娘に、耐えられる程度の力を流し込む。」

「それに驚いたためか、辺りのミシャグジは消えてしまった。それにより、疑問は更に増して行く。」

「どうして村の人間は貴女のような娘を怖がるんですか？」

「私には最初からミシャグジが視えなく、視を使ってミシャグジを見ることが出来たから。」

「恐怖で大蛇を見ているからだよ……でも君には効かないようだけだ。」

少女は、諦めたようにタネを明かした。けれど私はそれよりも別の事を考えていた。

「その口調のほうが、やっぱりじっくりきますね」

その言葉に、目の前の……諏訪子様は、慣れていないのか、照れたように頬を掻いた。

「ちなみにどんな感じに見える？」

やはり女の子として気になるのか、私に聞いてきたので、ありのままに答える事にした。

「そうですね、蛙がトレードマークの空色の服に、大きい蛙の様な可愛らしい帽子が似合ってます」

その回りくどい言葉に痺れを切らしたのか、諏訪子様は、率直に。

「一言でいうと？」

なので私も率直に。

「とても良く似合ってますよ……諏訪子様」

その言葉に、諏訪子様は、頬を染めたため、私は思わず訂正し掛けそうになったので、唇を噛み、口を嚙む。

「そっか」

その事に、諏訪子様は私を快く思ってしまったらしく。

「どうせだから泊まっていけない？」

私は少し罪悪感を抱きながら、ありがたい申し出を、素直に受けることにした

「はい、ではよろしくお願い致しますです」

その言葉に諏訪子様は顔を顰め……

「ちなみに泊まるのなら、その偽敬語なんてやめてよ」

「善処しますですよ。あ、それとお邪魔します」

諏訪子様は納得いかないという顔をしながらも。

「いらっしやいませ？」

一応乗ってくれた。

少々村が心配だが、大丈夫だろうという安直な考えで、片隅に追いやる。

そして別の心配事を頭に浮かべてしまう。

これから戦争ですか……

歴史は変えられる物なのでしょうか……

そんな事を……

九節 二度目のご飯、決意、それは甘い者

「弧徹」ご飯まだ？」

現在私は諏訪子様と一緒に寺に……神社に住んでいます。

「はいはい、今来ますよ」

今といつても、私が修行に時間を掛けてしまった為、いつもよりも遅めの時間な訳ですが。それに諏訪子様は御気に召さなかったらしく。

「遅い」

単調にそんなことを言われてしまいました。けれど私にも弁明の余地はある訳です。

「諏訪子様は女の子なんですから、料理ぐらい出来る様にしましよつよ」

諏訪子様は私の敬語口調が気に入らなかったようです。頬を引きつらせ反論を。

「嫌だよ面倒臭い。それに弧徹の作る料理の方が美味しいし。とつかいいい加減偽敬語やめろ」

諏訪子様はマジギレして殺意殺気を投げてきますが、それを受け流します。

「はいはい」

どちらにも受け取れる返答をして。

その言葉に諏訪子様は、少々諦めたように今日のご飯の具材に対して、怪しげに見つめています。

「処でこれ……何？」

今日のメニューは、松茸ご飯、シーザーサラダ、猪肉の角にです。
なので。

「見ての通りですが？」

ですが、その返答に納得いかないようで、まだ見つめています。

「ご飯のなかに……茸？」

「松茸、です」

「まつたけ？」

「はい、香りがいいのですよ」

その返答に、諏訪子様は松茸を箸でもち、鼻に近づけました。ですが分からなかったようで、そのまま口の中へ。

「わからない……」

「ふふふ、諏訪子様には難しかったですね」

けれどそれは神の威厳に？関わる事らしく反論をしてきました。
諏訪子様はやっぱり子供です。
名ので口調を戻しましょうか。

「そつそんなことないもん！それにこついつのは、食べるような
ものでしょー！」

「全く……」

「あつ！口調戻したね！」

もついでです……

《もぐもぐもぐ……》

「ほほうでほへふ……はいひいんわひゃひいわいのふあみあ

「食べるか喋るか、どっちかにしなさい。行儀悪いですから

《ゴクンッ》

「ぶはっ

「はい、お茶どうぞ

「ん、ありがとう

《コクッ》

「ぶう……」

ようやく諏訪子様は落ち着いたようですが、それと同時に用件を忘れてしまったらしく、机に突っ伏して、あ〜う〜いつているので、話を聞くために促す。

「で？さっき言った事は？」

「ああそうだった。最近、私意外……風の神がこの辺り一体の神の土地を奪ってどんどん勢力を増しているらしいんだ」

「それで？」

結構長かったですね。そんなことを思いながら、話を聞く。

「そろそろここも争うことになると思うから……」

諏訪子様の用件を理解し、だからこそ。

「だからなんだよ」

つい、口調が悪くなってしまい、諏訪子様の顔を窺うが、それに閉じて聞かれると思い……

「弧徹逃げないの……？」

だけど、来ると思っていた質問と違い、それはとても心配そうな声の質問だった。

だけど、それが逆に訳が分からず。

「はい？」

そんな事を言ってしまった。

その事に、違つ風に捕らえたのか、諏訪子様はもう一度繰り返すように。

「だから逃げないのになって……」

だけど、私はやはり、質問の意味が全く理解できなかった。

「なんで私が逃げないといけないのか聞きたいのですが？」

その答えに諏訪子様は驚いた顔をし、再度、答えて貰いたいかのようじ。

「だって神同士の争いなんだよ。危ないんだよ……？」

ようやく趣旨が理解できた。つまり諏訪子様は私に逃げてもらいたいと、思っている。

そして全てを理解した。それは表の想いで、本音ではないことも。だからこそ私は、諏訪子様に自分の気持ちを言っておくべきと。

「あのねえ、ここに一体何年一緒にいたと思ってるの？」

しかし私の返答に、思っても見なかったのか、諏訪子様は素つ頓狂な声を。

「へ？」

そして私はしっかりと、強く言う。

「私も参加するよ」

「いつでも、本当に危ないんだよ？」

「諏訪子は私にとって大切な人なんだから、守るために戦いますよ」

その言葉に、諏訪子様　　諏訪子は顔を真っ赤に。

「弧徹って誑しだよ……全く」

その言葉には同意しておきませんが、一応反論。

「なにをいうのですか」

「いや、じゃあ、よろしくね……ちゃんと守ってよ？」

「りょーかいですよ！」

私は大切な者の為なら。　　絶対に、命に代えても。

後しっかりと修行しておかないと。

九節 二度目のご飯、決意、それは甘い者（後書き）

七月二日編集

十節 せんとくです……負けたら格好悪いですよ

周りは人、神、人、神と、怖い位私の所に向かってきています。何故私だけか、それは村の方々に危害が無いように、相手が村の存在を視る事を不可能にしていますからです。そして村の人が、今日は村から出れないように、行使によってバリアを張ってますから、私が意識を失わない限り安心ですね。だけど予想以上にこの能力は疲れます……

ですがそんな事をお構いなしに。

「そいつを真つ先に殺せー！ー！ー！」

「オオオオオオオオ！」

相手のほうは、神がリーダーシップを取り人間を従え、私に現在レベルの投擲の石、そして何万ともある弓が、耳障りな空を切る音を立てて、私の所への的確に向かってきます。

それを対処するため私は。

《具現化・刀・伯刀》

《行使・風火双陣》

刀の伯刀を一振りし、行使によって小さな炎を出し、それに辺りの酸素を集め、窒素や二酸化炭素など、余分なものを切捨てて。そして刀に白い炎を纏い、一気に相手側へと、風をも向かわせ、放った。それは相手側の放ってきた矢を消し去り、人間を骨まで残らず塵へ溶かし、神をも姿残さず消し去った。それにより、人、神が居

た形跡は無く、影しか残っていなかった。

少し罪悪感を感じながらも、途絶えなく来る、人と神の軍勢に、容赦なく放っていると……

「つつ……！？」

何処からか、いえ、軍勢が着ている方向の真上から、殺気ではなく、殺意が。

ですがそれは、諏訪子に似た、神の気配も入り混じっていました。

「諏訪子じゃないとなると、恐らく……」

諏訪子じゃない神となると、大方予想は付いてきますので、早く行くために、白い炎から更に温度を上げ、本来なら存在しない火力の、最早想像で創った黒色の炎を向かわせ、あたり一面がマグマ化し、人が訳も分からず溶けていくので、恐怖を抱いて此方へ来ようとせず成功。神にはかなり昔に授かった剣を、無尽蔵に増やし、的確に刺して動けなくさせる。

そして暫くは攻めてこられないでしょうねと思い、明らかに私に向けられた殺意の方向へと、飛翔し向かう事に。

.....

「確かこの辺りだった筈……」

本来なら、筈、なんて言葉を言わなくてもいい筈ですが、私の感が鈍ったのでしょうか？

そんな事を思っていたとき……

「来たようだね」

咄嗟に振り向くと、そこには背中に注連縄、胸には鏡、赤い服に青い袴？と、変わった……

いえ、知らない振りは止して置きましょうか。

「八坂神奈子、でしたよね」

その私の発言に、八坂は驚いたようでした。

「おや……私を知っているんだね？」

一応それなりに。

「ええ、未来人ですから……ね？」

「冗談としては上手くないね……伯柳とやら」

今度は私が驚きそうになりますが、顔には出さないよう平常心を。

「そうですか？……後、何故私の名前を？」

これは少し疑問だった、私はそこまで有名になることはしていませんし。

「あなたの事なら嫌でも耳に入って来るよ。なんでも全てが生まれる前から生きているとか。それにあの諏訪のお気に入りだそうじゃないかい」

その質問には答えようの無い事実が。だけれどあえて私は気づかない振りをしなければいけないと言う事に、諏訪子に申し訳ない気持ちになるが、それを抑え、鈍感な振りを。

「さすがにそこまで前からはいませんよ、私、それと諏訪子とはただ一緒に住んでいるだけです」

「そこまでって事は、それなりに生きているんだろう？後、諏訪の奴はそれだけじゃないことを意外と知っているかもしれないよ？」

逆にどうしてそこまで知っているのか気になるが、一応、鈍感で貫き通す。

「それってどういう意味」

その時、いきなり八坂の神力が上がったことに気づき、咄嗟に後ろへと跳ぶ。その判断は正しく、八坂の周りは、御柱が飛び交っていた。

「さあ、どういう意味なんだろうねえ……まあ、私に勝てたら教えてやってもいいけどさっ」

そういつて八坂はかなりの量の弾幕を放ってきた。それを伯刀で弾くが、一発一発が重いため動けない。そのため一切前が見えない。そして全てを防いでいると……

「私は弾幕つてのが少し苦手なんだよ」

後ろから八坂の声が聞こえ、すばやく弾幕を消し去り、急いで距離を取るうとするが、判断が遅れたため、頬を御柱が掠り、血が垂

れて来る。

「ほら！よそ見してる暇があるのかい！」

もう少し妖怪と戦っておけば良かったと悔やみながらも、刀で受身が出来ないため避けて行く。

だけど遂に避けられなくなり、慌てて刀と御柱を対峙させる。しかし攻撃の嵐は止まず、次第に追い詰められて行ってしまふ。

「ほら！まだまだ！」

御柱を向かわせてくるので、それを避け、危ない時には刀で弾くが、やはり一撃一撃が重く、腕が思うように動かなくなってくる。

「このっ……っ！」

そしてそれを待ってたかのように、八坂は持っていた、細めの剣を私へ、的確に振ってくる。

「はっ！……っ！」

御柱に集中していたため、遂反応が遅れてしまふ。

それをギリギリ刀で受け止めようとし、何も考えず前に出したら

……

《バキンッ！》

もの見事に、刀が砕け散った。

「なっ！？伯刀が……！」

そして、私の気づかれないことが、八坂に感づかれた。

「うん。あんた……確かに私よりも強いけど……戦闘経験全くないね？」

そう、私は修行はしていたけど、一人で行っていた。つまり、強くても、実質的、対処や刀の受身がどうすればいいかなど、怠っていた。

「……………」

だから私は全く反論できなかった。

「凶星かい？」

気づかれたら不味かったから。

しかしそれを知ってか知らずか、八坂は手を緩めずに、剣を振るい、御柱を放ってくる。

「まあとめる気はさらさらないけどねっ！」

そうして剣が振り落とされてくる。

それに反応できず、さらに上手く頭で考えることが出来ず、能力が使えない。

「やばい……避け切れない……！」

「これで最後だ！」

そして思いつきり剣が振り落とされ、死を覚悟し、目を瞑った……

「あれ……？」

ただどいつまでも剣が来なく、目を開けたら……

そこには、見覚えのある、幼い姿が。

「全く、これじゃあ私が守る立場じゃないか……」

そして私が……神社のなかで気絶させた筈の方が。

「ごめんなさい………諏訪子……」

「本当に駄目駄目だよ、弧徹は。だから後は私に任せて休みなさい。もう限界なんでしょう?」

その事に、反論しようも無く。

「にははは、気づかれたですか……」

そしたら諏訪子は呆れ顔になり。

「そんだけ足が震えてるんだから気づくよ。それに息が荒いよ」

その見抜かれた事と、私の不甲斐無さに謝るしかなかった。

「ごめん……」

「謝るんだったら、私が帰った後に一緒に寝てよ……」

意味は理解できたけど、やっぱり私は鈍感でいなきゃいけないから。
5。

「添い寝位お安い御用ですよ……」

「そうじゃないんだけどな〜」

やはり、どうしても、心が痛いです……

「まあいいや。それじゃあお休み……弧徹」

「お休み……かな? 諏訪……子」

そうして私は意識を消した……

……
……

最後まで粘った諏訪子……しかし、信仰では神奈子に勝っていても、勢力は神奈子劣り、諏訪子は負けた。それは皮肉にも、弧徹が目を覚ましたときに、終わりを告げた。まるで少女は一人の少年を守りきったかのように。

十節 せんとくです……負けたら格好悪いですよね(後書き)

七月三日編集???

十一節 ゆつたりと。大胆は苦手で怖いです

「うん……？」

目が覚めたら、真っ白な枕だった。

これは私が作った物ですから、つまりここは諏訪神社ですか。

ですが私は空中で気絶したから……諏訪子が運んでくれたのかな？

まだ体が重いですが、お腹が空いたので、御飯を作る為に起き、周りを見回すと……

「へ……？」

布団……私専用の……詰めればギリギリ三人は入るであろう布団に、諏訪子。そこまでは私も許容できますが、何故か八坂神奈子までが。双方薄着だけれども、今は完璧な夏なので……

「通りで熱いわけです……」

一応服装を行使により、洗濯した後の状態にし、水気を無くし、皺を消す。その上に、まあまあ気に入っている、諏訪子から貰った、蛙のポップがあるエプロンを着て、料理に取り掛かる。

「何にしましょうか？和食、洋食、中華。お肉にお魚？それともソテー？」

一人で寂しく栄養面を考えながら、嫌いな物があっても食べるこ
とが出来るように、そんな事に軽く工夫しながら作っていく。

「~~~~~」

「うん……?」

何処からか、とてもいい香りのする……そういえば暫くまともに食べていないな。そんな事を思っていたら、目が冴えて来た。そしていい香りのする方向を見ると、そこには私と戦い負けたものが……

諏訪子から後から聞いた話だが、諏訪子はその争いの時、最初、出場できなかったのは弧徹に、行く寸前で気絶させられたからだそう。その者が負けてしまっただけは仕方ないと思うが、私としては、その行動が、今まで感じたことの無い……羨ましさをおもってしまった。元からこいつには興味があったが、神である私に、こんな感情を抱かせるこいつに、さらに興味が湧いた。

以前、諏訪子がいる神社に入り、その時は弧徹を連れてこなかったが、私からの宣戦布告を受けに来たとき、周囲からは、争う者同士と思えないほどの、まるで諏訪子がここに遊びに来た様な、そんな感覚を受けたらしい。事実私が諏訪子と呼ぶのもその時なのだ。だから私はその時弧徹に興味を湧いた。

前の諏訪子だったならば、こんな余裕を私に見せられる筈が無かったから。そして諏訪子の話す内容は大抵弧徹のことだった。まるで子の話を、自慢をする様に話していた。だからこそ、身勝手だが、弧徹を諏訪子から奪ってやりたい。そんな気持ちが生まれた。だが、それは絶対に不可能だった。弧徹は全てを理解していたから。始めの時、挑発のつもりで感情を揺さぶるような事を言った。だが、表では分かっているように見せながら、裏では全てを分かっている。様なんて、一滴たりともしていないかった。

「あつ……」

隣で幸せそうにごろごろと転がっているやつに、思わず溜息が漏れる。だから同時に怒りが湧くかと思ったが、どうしてか冷静でいることが出来た。それは恐らく心であいつの本心が分かっているから。

「はあ……」

いつその事弧徹の奴が鈍感ならよかったとも思えるのが不思議だ。

ちなみに私たちが弧徹の隣で添い寝していたのは、こいつが真面目に死に掛けていたから。

こいつの中には、霊力も妖力も魔力も神力も存在していなかった。生きていようが死んでいようが、本来なら存在するものが何一つ無かった。あの時の白い炎に黒い炎はなんだったのか疑問に思うが、取り敢えず、私たちの神力を適当に受け渡すため添い寝をした。

他意が無いと、言い切れない自分に悲しみを覚えるが、諏訪子も同じなので気にしない。

取り敢えず三日で起きれて良かったと安堵する。

「二人とも、御飯出来ましたから起きてください」

「おー」「はい」

一応諏訪子も起きていた様で、返事が。その事に、弧徹は。

「寝た振りでもしていたのですか？」

首を傾げているが、そんな事はない。

取り敢えず諏訪子を買っておく。

「さあ？少なくとも左側の、弧徹の寝ていた所でゴロゴロしている奴はそうなんじゃないかい？」

弧徹はすこし呆れ顔になってた。

「諏訪子、髪が解れてるよ」

「じゃあ後で梳かして〜」

「全く……」

弧徹が頭を抑え始めたので、少しは同情しておく事に。

「弧徹……」

「何も言わないでください、心が折れそうです」

一応、察しておくことにした。

「さて、領土の件なんだけど……」

「ああ、そういえばそうだったね」

「張本人が忘れないでくださいよ」

そう、諏訪子側は、私の力足らずで敗退し、神奈子の方に此方の領土を取られる予定だったのですが……

「冗談だって」

「ああ、そのことなんだけど……」

「うん？どうしたの」

「さすがにここは無理だったことが分かった」

「まあ改めて考えるとそうですね。諏訪子を信仰している人間達は、諏訪子が見せているミシャグジを恐れているため、諏訪子が負けてしまっても、恐怖の所為で信仰は奪えない訳ですし。」

「まあそこで、提案なんだけど……」

「なんだい？」

「私と神奈子で信仰を一緒にしてしまえばいい。というものを」

「なるほど……だけどそれで良いのかい？」

「まあね」

諏訪子が言っている事で確かに丸く収まるけど……

「それって大丈夫なんですか？」

「まあ最初は戸惑うだろうけど、それ位しかやり方は無いからね」

「本当に良いの？」

「なにがさ？」

「いえ、その提案で信仰が減る場合だってある訳ですし……」

「別にその位構わないよ」

「やけにあっさりしてますね……」

「まあ、それ同等の報酬がもうあるからね」

私……か。まあそれだけでなく神奈子と住める事だとも思ってお

きましようか。

「はい。ここで終了して酒酒」

「神奈子……」

「あんた私に勝ててないだろうに」

「今関係ないですよねえ」

「へタレ……」

「諏訪子まで。全く」

「あんなかつこいい事言っておいて最後は任せただもん」

「うう、言い返せない……」

「ほら、じゃあとつと酒をだしな」

「はいはい。って私の能力は……まあいいです、飲みたいですし」

「そうそう酒が一番！」

アルコール度数80でもだしてあげようかなんて鬼畜な事を考えながら、今がやっぱり一番ですね。なんて事を思ったり

「じゃあ度数が強い奴でいいですね」

「どんとこい！」

せめて50にしておきましょうか。

うん、やっぱり此の方が楽しいです。

十一節 ゆったりと。大胆は苦手で怖いです（後書き）

七月四日編集

十二節 出会いは一喜一憂。それは同時に涙を隠れて

「弧徹おはよ！」

「諏訪子おはよう。でも出来れば、布団の上に乗っからないで欲しいですね、何気に苦しいですよ」

「むじゅ……」

だけど私のこの発言に諏訪子は不服だったようで、頬を膨らませた。何気に面白そうなので、頬を引っ張ろうとしたら……

「ほらあなたたち、いつまでやっているんだい、ご飯できたよ」

手を神奈子に掴まれてしまったです。残念です。

そして諏訪子を肩に乗せ、卓袱台がある場所に。そこには私がここ数ヶ月、教えてあげた料理の数々が置けるだけ置いてあった。

その意味を知っているから、心が、凄く痛い。

「で、今日だよね……」

少し気分を落ち着かせるために、惚けてみる事に。

「ああ、そう言えばそうでしたね？」

「言った張本人が忘れてるな！」

そして諏訪子から、食事の最中だと言つのに、跳び蹴りが。今回は、避けずに食らっておく。

「痛いですよ。というか跳び蹴りは酷いですよ」

「今のは流石に弧徹が悪いね」

神奈子も一応分かってくれたようで、乗ってくれる、それに私は反論を。

「どこがです!?!」

「弧徹……鈍感って死より重い罪なんだよ……」

諏訪子は、あの頃とは比べ物にならない様な殺気を私に向けてくるが、受け流し。

「重いと想いでも掛けたのですか?」

そんな風に呆けて上げた。

ですが気に入らなかつたようで……諏訪子の手には神器が……うん、あれは……

「え、流石に神器は」

「一片死んでおきなさい」

そして思いっきり振り上げられ……

そこで私の意識は何秒か飛んだ。

「成敗完了」

全く。弧徹はこの位して置かないと私の気が済まないよ。今日は弧徹がここを出て行ってしまつから私も神奈子と料理したんだから。

「諏訪子あんたいい加減自分から気持ち言わないと、こいつの事

だから気づかないよ？」

そんな事を思っていたとき、神奈子にこんなことを言われてしまった。……その位私だって分かっていているさ。だけど……というか。

「神奈子、その言葉そっくりそのまま返すよ」

その時、神奈子から殺気が来たので、私もそれと同等の殺気を向かわず。

「諏訪子、やるうって言うのかい？」

「やるか？」

前は負けたけど、今回は絶対に負けるつもりはないよ。
そして口喧嘩に。

「私を嘗めるんじゃないよ、蛙やるう」

「そっくりそのまま言い返すよ、ババア」

「なんだって、このロリ野郎」

そして神社が耐え切れなくなっているのか、ミシミシと音を立てているが気にしないでそのまま続ける。

.....
.....
「やめよう……この戦い幾らなんでも不毛すぎる……」

「そうだね……」

いい加減、柱が二三本折れてきたので、これは危険だと言うのと、本当に不毛な争いなので、一時停戦に。絶対次は無いと言い切れないところが悲しい。

『はあ……』

そして神奈子と同時に溜息が漏れてしまう。神奈子と、弧徹の方を見るが、今だ気絶をして……

「はあ……」

突然弧徹は、溜息を付きながら、起き上がった。流石にこれには私達は驚き。

「うわっ!」「おおっ!」「おおっ!」

なんて声を上げてしまった。

.....

暫く、気絶した振りをしていましたが、流石に神社を守るのが辛くなったので、起き上がることにした。というか、本当に心苦しい。

「なんですかその驚き方。それよりも、先程から聞いていれば、まるで私が二人の気持ちに気づかないで、そのまま何処かへ行こうとしているみたいじゃないですか」

もう、鈍感な振りは、私には限界です。

「へえ……？まるで傍から気づいていた様な言い方だね」

「一緒に寝る辺りから、諏訪子にはそれ以上前の会った時から」

「最初からじゃないかい」

そんな事を白状したら、神奈子に思いっきり殺気立たれてしまいました。まあ当たり前ですかね。

「自分鋭感ですから……ね？」

その時、諏訪子が微かに震えているのが分かった。声を掛けようとしたら、諏訪子は、顔を上げ、涙を流し掛けながらも言った。

「それでもいくの……？」

だから私は、本当なら正直に答えなくちゃいけないのに。

「この地に歴史を見ていきたいのです……」

どうしても口が逃げてしまう。

「そうかい……」

その時、神奈子が理解してくれたことを分かった。

「どうしてもいくの？」

「ええ……」

もう諏訪子は顔を下に向けながら、必死に私に話しかけていた。口が思わず、ごめん。そんな事を言ってしまうそうになるが、それを必死に抑える。

その気持ちを汲み取ってか、諏訪子は私の今一番言っただけ

た言葉を言ってくれた。それは私にとってとても残酷な言葉だからこそ、望んだのかもしれない。

「そっか。謝るのはやめてね・・・余計悲しいから・・・」

「ん……」

そして恐らく泣いていたであろう諏訪子は、目元を拭い、私の方を向いてくれた。私の、本当は言っていて欲しかった、最低かも知れないけど、言葉を。

「でも……絶対にいつかは戻って来てよ。破ったら……崇ってやるから」

「流石にそれは怖いよ」

そんな事を私は苦笑しながらでしか、言うことが出来なかった。

「ほら、もう行くんだろっ?」

「うん……」

「ほら私達からの土産だ」

そして神奈子は、太陽の光で、ぼやけて見えるが、何か銀色のものを投げた。

受け取ったものは、白銀か黒銀の調度私の腕に嵌る位の腕輪だった。何故かそれには、七つの窪みが存在していた。

「これは?」

「弧徹の能力に神の力を追加できるもんだよ」

そんな事を、神奈子は簡単に言ってくれた。ですが神力は信仰されないといけない筈じゃあ……

「随分な物ですね……？」

「それなんだけど……」

諏訪子が、妙に言いづらそうな顔をしていたので、聞いておくことにしましょうか。

「どうかしましたか？」

「あの娘……由梨って娘を助けたことで、村の全員に弧徹が崇められていたみたいで、それに神奈子側の神も雑倒して行ったから、さらに崇められて……」

「ああ……」

何故諏訪子が言いづらい顔をしていたか理解した。もう怒っていませんのよ。

そして、諏訪子はさらに加えるように。

「多分、というか私と神奈子よりも神力多いと筈だから、さらにこれから増えてくし……」

良く分からないけど、一応貰える物は貰いましょう。

「まあいいです。気にしても仕方ないですし」

「まあ死なない程度にがんばってきな」

「ええ……じゃあいつてきますね」

最後に、二人の哀しそうな顔を見せないように、急いで私は瞬間移動をした。

弧徹は一瞬で消え、どこかへ行ってしまった。

「これでよかったよね……」

「ああ……いいんだよ」

「かなこお……！」

やっぱり弧徹がいないと寂しいよ……！

「はいはい……泣きたいならな」ときな

その諏訪子の涙で出来たのが、諏訪湖というのはもつひとつの話

……

十二節 出会いは一言一響。それは同時に涙を隠れて（後書き）

七月四日編集

十三節 スキマさんです……若いですね

周囲には規則正しく木々が一直線に並んでいる。

「あうう……」

それよりも気になる事があって、ついおかしな溜息を付いてしま
う。

気になる事とは、最近誰かに見られてる気がすると言う事。

今更ですが私はお化けとか、お化けとか、お化けとか苦手です。

「うう……」

しかも最近分かりましたが、私の能力は、私自身が存在を否定し
ている物に対しては、一切能力を使えないなんて事が分かっ
てしま
いました。

「居るなら出てきてくださいよお……」

もうはつきり行ってしまえば、さっきから木に顔があつたり目が
合つたり。

もう失神寸前なんですよお……

ですがもう、私は勇気を出して口にしたです。確認のために

「ばれてたのね？」

いきなり肩に手が置かれ。目の前には何か

「いやあああああああああああああ!?!」

.....

.....

「はふう.....」

ようやく心が落ち着いて涙が止まりました。
そして先ほど私を驚かせた少女の方へ向き.....

「そんなに驚かなくてもいいじゃない……」

思いつきり泣いていました。

これには私は罪悪感が出てきましたので謝ることに。

「ごめんなさいです……」

その言葉を言った途端、目の前の方は泣き止み満面の笑顔に。はい、騙されました。

「まあいいわ」

「で、一体何の用なのですか？最近私を見張っていましたが……」

それはもう、四六時中、御飯を食べていても。寝ている時も。常に視線を感じましたから。

日に日に恐怖が……ね。

ですが目の前の方　　八雲紫は自分に非が無いかのように話を進めていきます。

「やっぱり気づいていたのね。でもどうしてかしら？あなたから能力のような物が全く感じる事が出来ないのだけど？」

「それはですね、普段から人に接したりする事が多いですから。能力とか感知されないように消しているのですよ」

ですが紫は私の発言に疑問に思ったらしく、首を傾げました。

……まだ顔に幼さが残っているので許容範囲内でしょうね。

「どうして人間なんかと接するのよ？」

その事に私は逆に疑問を浮かべました。紫は確か幻想郷を創った妖怪の筈なのにどうしてでしょうか……人間と妖怪の存在のあり方を理解していないようですが……気のせいでしょうか？

「普通、人間は妖怪に喰われるような存在でしょ？でも貴方は人間でも無ければ妖怪でも無い。ましてや神の気質を持っているのに神でも無い。そして幽霊のような存在でもない。存在自体がおかしい存在のようだけど」

「私だって自分の事が分かりませんよ」

一応反論しますが、それよりも、やはり紫の考えの違いが分かりました。

「どういう意味よ？」

「へ？なんですか？」

つい、思考にのめり込み紫の言った事を聞き逃してしまいました。

「はあ……普通、人間は妖怪の奴らに喰われる存在なのにどうしてって言ってるのよ」

「あのですね、人間と妖怪は本当なら共存するべきなんですよ。妖怪は人間の恐怖から生まれてるのです。その逆もまた然り」

「だからなによ？」

「妖怪というのは人間が怖いと、恐怖するものの象徴でもあるの

ですよ。

あなたでいうのなら人間は……誰かが自分を見ている。何かがあるに存在して自分を見ている。

簡単に言えば、周りからの視線に恐怖すると言う事で、人間が多数で生きていけば必ず恐怖することですね。

そんな恐怖から貴女は生まれたという事でしょうね。」

「まだ分からないのだけど？」

「では、貴女が生まれていない。簡単にいうと人間が今言った事に恐怖しない。つまり人間が恐怖を忘れ……いえ、失った時、どこまでも人間の世界は発展していき、やがて争い、そしてただ死んでいく……こうなってしまうえば永遠と永久にこれを繰り返すのみ。これは人間が人形と同じという事。こうなれば後は滅び行く運命。

その逆もまた然り。妖怪が勢力を増し人間を滅ぼして行けば人間が思う恐怖は無くなる。

つまり妖怪の死を意味することになるのですよ。

だからこそ、人間と妖怪は常に一定の関係を保っていなければいけないんです」

そういえば、いつから紫はこういう考えに至って幻想郷を創ると決めたのでしょうか……

そんな事を思いながら紫の顔を見たら、まるで子供を見守るかのような、そんな微笑を私に見せていた。

「いい考えね……でもそれは幻想、悠遠の望みでしかないわ……」

「そうでしょうね……ですが今のままいけば人間も……」

永琳は極力妖怪を殺そうとしていましたね……ですがこの理論を聞かせてやめさせましたか。

「妖怪も……」

紫がいつかこの考えに至ってくれると嬉しいのですが……ね。

「神だつて……」

諏訪子と神奈子は神が人間を生かしている。そんな理論でしたね

……

むしろ神が人間に生かされているって教えて上げましたが……

「その事に気づかないでいけば、必ず後悔を迎え、死を招き入れるでしょう」

ですが……！だからこそ……そんな場所がいつか出来る事が可能なら……創れるならば。

私は全ての者のために、時間を削つても割いてでも。やり遂げてみたいじゃないですか。

「でもそれには何干つて歳月が掛かるわよ……」

「そんな幻みみたいな事だからこそいいんじゃないですか？」

「貴方本当に変わってるわね？」

「そうかな？」

思わず紫にそんな事を言われ、素が出てしまいましたが、平常を装う。

「ええ……だつてそんな事を考えるの、あなた位よ？」

「むっ……」

私が腕を組んで唸っていたら、紫は微かに笑みを浮かべました。

「でも……面白そうじゃない」

「でしょう?」

「ふふっ……で?その幻想的な場所の名前は?」

「幻想郷ですね。」

そこには人がいて、妖怪がいて、月人がいて、神がいて、死神に閻魔がいて、河童がいて、

巫女がいて、妖精がいて、魔法使いがいて、吸血鬼がいて、幽霊がいて、天人がいて、

地霊達がいて、式がいて、天狗がいて、鬼がいて、半人半獣がいて、不死人がいて……

種族関係なく、たくさんの奴等が集まる。そんな場所です……

「最早そこまで来ると恐ろしいわよ?」

「まあほとんど女性ですがね……」

「なによそれ?」

その事を言ったら、少し紫は頬を膨らましてきました。

「さてねえ?ハーレム的な感じでしょうか」

「本当に面白いわね、あなた」

「いえいえ……これが実現したらもつと面白いですよ」

「ええ……本当にね」

「じゃあそろそろ切り上げましょうか……？」

「そうね、今日はあなたに会えてよかったわ」

「こっちもです」

本当に紫に会えて嬉しかったのですから。

「そういえばまだ名を言って無かったわね……わたしは八雲紫。
あなたは？」

「私は伯柳弧徹です。孤独に徹すると、ね」

その事を言ったら急に紫は私に抱きついてきました。
どうしてでしょうか。何故か……不意に泣きそうになってしま
いました。

この温かさが、不思議と、辛くて、苦しくて、分からなくて

「そう……弧徹ね。憶えておくわ……次会う時もよろしくね」

「こちらこそ……」

今の私は、涙を抑えるのが精一杯で、素っ気ない態度になってし
まいました。

さあ……次はどこへいきましよう……

ところで紫は何のために私の所へ来たのでしょうか……

紫ってよく年増なんて言われたりしていましたが、とっても温かくて優しくて綺麗な方じゃないですか……

また会えたら……いえ、会えますよね。

……きつと。

十四節 雪での妖との出会いですね

「こほっ……！」

目が冴えたので辺りを見渡すと、うつすらとこの洞窟の外が光っているように思えた。

「こほっこほっ……！」

体が冷えている所為か、喉が異様に痛く咳がとまらない。そして両腕は動かそうとしても動かさず、眠る直前で痛かった筈なのですが、最早痛覚さえ麻痺をしているようです。

その内腕が碎けそうで怖いですね……

「あれ？」

今思いましたが、寒さを軽減すれば済む話でしたね。

表に温かさを出してしまうと、両隣の二人が起きてしまいそうですし、内側を温めれば大丈夫ですかね。

早速実行するために、いつも通り頭で思い浮かべる。

《行使・体内温を一定》

行使が発動したため、徐々に体が温まり、指は動かせるようになり咳も出なくなってきた。

今思いましたが、私は毛布一枚しか掛けていなかったもので、これでは気づいていなければ普通に死んでたでしょうね。

私はその事に溜息を付きそうになるが、これで起こしても悪いと思ひ、溜息を抑える。

面倒だと思ひ、目を閉じて寝ようかと思ひましたが、全く眠くな

らなかった。

仕方ないので、両隣の方を見ることに。

今左腕に抱きついていているのがルティア・ホワイトロック。

もう一人似た名前知っていますが、そちらではないようですね……
通称ルティで、私に妙に突っ掛かる。なんて考察を試してみる。

そして右腕に抱きついていているのがレスチノーレ。

今一度よく見るとチルノに似ているように見えますね。

通称チノで、ホワホワして危なっかしく、ルティに世話をかかせるですね。

「ふう……」

大分息が楽になって来ましたね……

今思いますが、何でこうなったのでしたっけ？

「えへへ……」

「ふふっ……」

「うーん……」

.....

「寒いですね……」

今私は雪山にいる訳ですが。

雪山に居る訳は適当に歩いてきたから。

「クシユツ……やっぱり寒いです……」

今の時期、この山は吹雪が酷いらしく、前がろくに見えなくて困ります。

視を使っても、目の中に雪が入って使えないですし……
洞窟でも無いのでしょうか……

「うん……？」

今、一瞬でしたが光る物が見えたような気が……

その方向に視を最大限に使つと……

「あつた……」

雪に多い嵩張り、視を使わないと見えないくらいに埋まっていたが、今ので見ることが出来ました。行使により洞窟を掘り出し、中に入ることに。恐らく誰も使っていないでしょうし。

「ここに擬似的な家でも造りましょうか」

洞窟とは言えるか分からない広さでしたが、ある程度は間が合ったのでありがたく使わせてもらうことにしましょう。取りあえずキッチンな所を作って……それ以外のところは、地面に細工し、雪が溶けなくしましょうか。冷たさは……別にいいですし。

「えつと……何を作りましょうか……寒いので鍋……一人で？」

言つて悲しくなってきましたね……まあ別に鍋でも構わないでしょう。

そんな事を考えながら、ステンレス鍋にお肉、肉団子、牛筋、ネギねぎ、ジャガイモ、ういんな、白菜、……そんなのを取り敢えずどンドン入れていった。

「はあああああ」

つい、今まで以上の溜息が出てしまった。

だって鍋といつても、完全に手を抜いていますし。我流ですが、料理に関しての知識が薄れてきていますし……さらに言ってしまうと、デザートが作れないのが、一番堪える。

さらにさらにいうと、自分のみに最近作っていて、その所為で完全に味が自分好みになってしまふ。

ちなみにデザートが作れないのは、材料が手に入らないから。具現化で出せるには出せるが、味がおかしい。

砂糖を出しても、一定の甘さの筈が、毎度毎度甘さが違うし、塩も以下同文。

他にも、スポンジだって最初から作りたいののに、卵が出てこない。出てきても、中身が無い。これに関しては理由が分からない。牛乳が出せるのは何故か逆に知りたい。

そんなこんなで、料理に関しても、菓子に関しても、やる気が出ない。

「はあ……」

そんな風に、料理中にあるう事が、鬱になっていると。

「その人間！死にたくないならここから出て行きなさい！」

何処からか、というか真後ろから、さらに言つと洞窟の入り口方面から怒りの籠った声がしてきた。

「誰ですか……名前をどーぞ」

振り向くと、どこかで見た事のあるような……そんな印象を受ける人が二人いました。

記憶を探ると、思いついたのは冬。それに雪……思い出しました。この二人、レティ・ホワイトロックとチルノに少し似てますね。ですが二人とも身長は高めです。チルノに似ている方は髪が、腰まで伸ばしてますし、容姿もそこまで似ていませんね。失礼ですが、可愛いと綺麗、両方ですね。

「名前を尋ねるのなら自分からって、親から習わなかったのかしら？」

レティ似の方にそんな事を言われてしまったので、落ち込みかけるが、面倒ですのでさり気無く過去を暴露してみる。

「私の親？……親なんて……親なんて……親なんて……！」

「あ……ごめんなさい……」

その事に悪く思ったのか……ええ、妖精さんと妖怪さんは謝って来た。ですが空気が悪くなる一方ですから、入れ替えるためにボケて置く。

「まあ憶えておりませんけどね！」

「あなたねえ！」

二人とも怒りを露にしていますが面倒ですから受け流しましょう。

「まあまあ、お詫びとして一緒にご飯食べませんか？」

「元々私達がここに居たのに……」

突如そんな事を言われたので焦った。恐らく先ほど光ったのはチルノ似の方の八対の氷の羽なんだと分かったから。埋もれていた訳は、隠すためだったのでしょうか？ですが気にしても仕方ないのでこちらも受け流しておきましょうか。

「……細かいこと気にしていたら太りますよ」

「君のほうが少しは気にしようよ……ルティも落ち着いて」

「ルティ？」

ふと気になってしまい、思わず口が動いてしまう。

「名前。君から名乗らないの？」

恐らく今のはあだ名かなにかなんでしょうと思い、一応私のほうの名前を言っておく。

「私は伯柳弧徹ですね。適当に呼んでくださって構いませんよ。貴女方は？」

私の、丁寧口調に、二人とも口を引き攣らせていましたが、これは仕方がない。

「こつでもしないと……傷付けてしまうでしょうしね。」

「私はレスチノーレ。気軽にレスチノって呼んでね。こつちが…

…」

「はあ……ルティア・ホワイトロックよ。ルティでいいわ。」

一応二人とも名前を言ってくれました。やっぱり名前が似ていま

すがきつと違いますね。

「処で暖かいもの食べれるでしょうか？」

私のイメージでは二人とも溶けてしまいそうなイメージがあつて怖いです。

「その位大丈夫ですよ。私達太陽があつても活動できますし」

「長く生きていれば、案外色々と克服できるものよ？」

「そうなんですか？」

意外な事を言われ、思わずチノに聞き返してしまう。その事に傷ついたのでかルティは、睨んで来る。

「ってどうしてチノに聞きなおすのよ」

「気分でしょうか？」

「気分……」

ルティはふてくされたのか、頬を膨らましてきた。思わず『可愛いですよ！』なんて言いそうになつてしまいました。私はかっこよくて髪の毛の長い女性が好きですが……

取り合えずご飯が冷めてしまいそうですし、話を進めましょう。

「頬を膨らましてないで食べませんか？」

「まあいいけど……」

ルティはまだ不機嫌なのか、不服そうな顔をしていましたが、頭をポンポンと撫でて上げると、猫のように気持ちよさそうに……逆にチノが構ってくれない事に不服だったのか、むー、と唸っていたので同じようにしましたが。ええ、駄目じゃないですが私。そんな事に溜息を付きながらも、頭を撫でた時少し分かった味の好みにするため、鍋に一手間掛けていく。うん。やっぱり誰かのために作ったほうが私は好きですね。お金とか気にしないで出来ますし。そんな事を思い浮かべながら、私はいつもより多目に時間を掛けて料理をしていった。

少年（少女）料理中……………

「出来ましたですよ」

目の前には少し大きめのテーブル。その上には鍋を中心に、サンチュ、甘めのドレッシングであえたサラダ、塩がちょうどいい具合の枝豆、茹でる時間を一秒でも丁寧に行ったピンク色の海老。

鍋は少し辛めにしました。具材は肉を丸めた肉団子、味を染み込

ませたネギやらたくさんの野菜。

はつきり言って作りすぎました。

ですが、二人とも目を輝いて見えるくらいに嬉しそうな顔をしてくれていましたので作った甲斐がありますね。

「美味しそうだね」

「じゃあさっそく……」

ルティが箸を持ってサラダをよそおうとしたので、姿が思わず重なってしまう……

「くら！」

ルティの手の甲を痛くない程度に叩き、ペシッと軽く音が。

「なにすんのよ……」

ルティが恨めしそうに、チノが不思議そうに私を見てきたので、つい言う事を忘れそうになりましたが、しっかりと目の前の二人に對して言う。

「食べる時はいただきますですよ？」

「なによそれ」

ルティは恨めしそうに韓、不思議そうな顔になったので、さっさと答えておきましょう。

「えつとですね、食べるものに感謝する、そして作ってくれた人に対しての感謝
それを食べる前に行う礼儀見たいな物ですよ」

「いい言葉だね」

「いやいや、何でそんな神様崇める様な事しなきゃいけないのよ？」

チノは共感？ルティは疑問。

「別にやりたくないならいいですよ……」

「べつにそんな事いつて」

ルティは否定を言いかけてましたが

「いただきます」

チノが先に行ってしまったため、言えなかつたみたいですね。

「ええ、召し上がれです」

ルティはなにやらしょげていますが、ルティにも感想を聞きたいので……

「ルティは食べないのですか？」

「うぐう……」

「ルティ？」

つい急かすような事を言ってしまう、自分に嫌悪を抱いていると。

「……いただきます」

「ええ、どうぞ召し上がれ」

やっぱりルティは根は良い娘ですね。

「美味しい〜」

「妬ましい位美味しいわ」

「どんな褒め言葉ですかそれ」

二人から良い感想が貰えたので、多分私の顔は笑っていますかね。うん。やっぱり嬉しいですね。

「ルティは料理が苦手なんだよ〜」

「ちよっチノ！というかチノより酷くないわよ・・・」

そんな事を思っていたら、チノがそんな事を言ったので、気になっ
って聞く事に。

「例えば？」

「チノは目玉焼き作って爆発する！」

「ルティはゆで卵作って爆発する！」

何ですか！？この二人に今度料理の基礎から教えましょうか…

…というか。

「どっちもどっちです!」

ですが私の言葉にショックを受けたのか、『うつろ』なんて二人で言っている。全く。

「まあ……いいんじゃないですか？料理出来なくても私が作ってあげますから」

「ふえ!?!」

「え!?!」

二人とも何故か驚いた声を上げてきて、私の今の言葉におかしい所はあったでしょうか、と、思い返して私は思わずひざをつきそうになってしまった。

今の言葉……駄目駄目じゃないですか！取り合えず鈍感なパターンの言い訳でもしましょう。

「二人とも何時でも私の料理が食べなくなったら来てもいいですよ?」

そんなのことを言ったら、二人はとても残念そうな顔をしていた。『ああ……』なんても言っていますし。寧ろ私が溜息付きたいですよ。

「何ですか、その目は……」

その言葉に二人は、自暴自棄になったのか……というか吹っ切れたのですね。

「もういいや寝よう？チノ」
「ほんとだね寝よう？ルティ」

ですがいつの間にか私の服の袖を掴まれていて。言っている事が逆じゃないですか。

「だったらこの手を離してください……」

《すう……すう……》

ですが寝つきが良い様で、二人はもう寝てしまいました。

「はぁ……《具現化・毛布》

はぁ……能力に恋愛感情を抱かせないって出来ませんかねえ。

はっ……それだと最低には変わりないですね。

もういやです……寝ましよう

.....

十四節 雪での妖との出会いですね（後書き）

編集完了七月十四日〜

十五節 わは〜です〜

「はい〜只今、何故か山頂が暖かい雪山の山頂です。」

「そうなの？」

ええそうです。目の前に居るのは、多分ですがルーミアです。ですが！あの有名な台詞を言ってくれないのですよ！

「只今ルーミア似の娘といます……いるんですよ！」

「そうなの」

こんな風にさっきから永遠と続いております。

「そこは『そ〜なのか〜』じゃないのですか？」

「知らないわよそんなこと」

ああ、なんかもういいや。

「はあ……」

「どうしたのよ。急に溜息付いて」

先程まで強気そうなるルーミア……名前は仮ですが、そのルーミアが私を心配そうに見てきた。

はう、この娘はきつと良い娘です。

そんな風にぼけぼけしているよ……

「無視するな」

本来、人の頭から出て良い筈の無い音、ゴンッ、という音が私から響いたと思ったら、次には激痛が頭に走ったです。

「いったぁ……!!」

「あなたが私を無視するからよ」

「別に無視してませんよ……」

ふと、私を何で叩いたか気になり手に持っている物を見たら……いえ、今の言い方では違いますね。私が創った十字の剣を持っていました。

いやいや、それは……

「流石にそれは痛いですよ!」

「自業自得よ」

いやいやいや……!その剣の恐ろしさを知らないからそんな事がいえるのですよ!……
というか……

「もう少し丁寧な扱ってくださいよ……」

「別に良いじゃない。もう私の物なんだから」

「酷いですよ。その剣は頑張って創ったのに」

その言葉にルーミアは言葉を詰まらせましたが、言い訳のように
反論……

「私の為になんて……そんな大層頑張っていないでしょうに」

「いえいえ。その剣を創った所為で力を使い果たして、三日も寝込んで、あの過保護な二人に殺されかけたんですが」

能力が全く使えない時に、ルティとレスチノに二日氷付けにされました。

ある意味その所為で三日なのですが……

「だれよ、その過保護って奴」

私の言葉にルーミアは急にむっとした顔に。

……お願いですからかつこいい姿を崩さないで。

「なによ、その目」

その言葉の後、先程と同じ音と、激痛が……

「いったあ……!」

もう嫌です、こうなったらスルーしてやるですよ。何故か心が痛いですが……

「で？この剣どろがすごいのか？」

「良い天気ですね……」

私の反応が気に入らなかったのか、ルーミアは私を睨み……

「さっさと話す」

ええ、先程から言うように……

「いったぁ……!」

もう痛すぎて涙が出てきそうですよ……

「敗者は勝者の言うこと聞くものでしょう」

その言葉に私は言葉を詰まらせる。そうなのですよね……

最初はルーミアでしょうか?と違って近づいたら、いきなり吹っ飛ばされて……

私に剣を創りなさいと、妖力で創られた小刀を首に付きつかれて脅されまして……

今思うと理不尽な気が……

「私が貴方の噂を聞いていなければ良かったのだけれどね」

「一体どんな噂ですか?いきなり吹っ飛ばされると思ってませんでしたよ?その位悪い噂なのですか、私は」

私の言葉の何かが気に入らなかったのか、ルーミアは先程の睨みに殺気を含まして……

ですが一応答えてくれるようですな。

「何でも神と鬼を何千何万と殺し、神を統べ、鬼を統べているとか。一部では破壊神なんて言われているらしいよ。私が気になったのは、どんなものでも斬る、破壊することが出来て、全と無の存在の概念さえ捻じ曲げる事の出来る剣を創れる。それね」

「鬼は殺していないし統べていませんよ」

「まだ、なんででしょう？」

「私は戦闘が苦手ですよ。自分からやろうなんて一切思いません」

私の言葉に偽りはありませんが、ルーミアは疑問に思ったのか首を傾げ……

「でも貴方……目が澱んでるわよ。その目はあらゆるものを殺し壊した。そういう目をしているわ」

一瞬私は、ルーミアに何を言われているか理解できなかった。私が殺し？壊す？そんな事は日常茶飯事であったから。だけど殺すなんて甘い。壊すなんて甘い。それが私の考えだからこそ

「私はとつくの昔に……数億年前には、既に穢れ。私自身は既に壊れていますから」

「そう……私情を聞いて悪かったわ」

その事に責任でも感じたのか、ルーミアは暗い顔に。

全く、貴方にはその顔は似合いませんよ。もっと無邪気……いえ、大人っぽくでいませんと。

「ほら、貴方は笑顔でいないと……ね？」

私のほうが若干背が小さいので、背伸びをして頭を撫でる。

ルーミアの髪は長く金色で、手入れをしているのかさらさらとしていて、枝毛なんてものは一切無かった。

ふと、服が掴まれている感覚があったので、ルーミアの顔を覗き見ると、目を閉じ気持ち良さそうにしていた。もう良いでしょうね。そう思い撫でるのを止めたらルーミアは不満そうな目を。

「そんな目で見ないでくださいです……」

「まあ良いわ。で、この剣については？」

一応機嫌を直してくれたのか、子供ではなく、大人な感じでルーミアは聞いてきたので、しっかりと話しておきましょうか。危ないですし。

「えつとですね、この剣は自らの能力、身体能力を10倍出来て、相手を斬りつけるとそこから力を奪えるとか、能力を弱めるとか、そんなことが可能です」

「三日も寝込んでそれだけ？」

ルーミアは素で聞いてきたので、私は真面目に……

「怒っても良いですか？」

「冗談よ」

素なのは気のせいだったようで、ルーミアはふふっと笑ったです。

やっぱりそうでないのです。

「まあそれだけではないのですが……」

「貴方つていい実験台になりそうね？」

真面目にルーミアは切れたのか、私に十字の剣を掲げ

「言いますから！その剣掲げないでください。私でもその剣だと死んじゃいます！」

「どういふこと？」

私の削った剣で死ぬなんて洒落になりませんよ……

「その剣の効果で、全種万別平等つて言つのですよ……」

「なにそれ？」

「この剣で何よりも恐ろしいのが……」

「まあ簡単に言つてしまえば、神でも不死でも、致死ダメージを与えることができます」

「……そんなの削つて大丈夫なの？」

私の言葉にルーミアは不安に思ったのか、剣を私から離してくれました。

「まあ、良いんじゃないですか？」

「はあ……第一これ、私に渡してよかったの？」

脅したのを忘れましたか……まあ別にルーミアなら……ね。

「良いですよ」

「そんな自信、一体何処から来るのよ……」

そんな事一つしか無いでしょう？

「ルーミアの事を信用していますからね！」

「つつ……！？」

私の発言にルーミアは一瞬で顔を染め……名前ルーミアに聞いていないのに言ったから？

違う……私はまた、何馬鹿な台詞を言っているのですか！
ああもつ……鈍感の振りです。

「どうしました？」

「貴方に、その二人が懐いてる意味が分かったわ……」

「どういう意味ですかそれ……？」

「自分で考えなさい」

「むう……」

「じゃあ用もつ無いから、私はもう行くわ」

私にあの台詞を言わせておいて逃げる？そんなことはさせません。

「へ？ご飯食べていけないのですか？」

「行かな　っ!？」

私は思いつきり寂しそうな顔をして引き止める事に。
まあ本音ですから良いでしょう。

「ご飯食べてきませんか？」

「いくわよ……行くからその顔よしなさい」

「じゃあいきましようか？」

私は次に手をルーミア差し出した。女性をエスコート。これが普通の私の日常茶飯事。

うん。私、本当にとんでもないですね。

「なによその手は……？」

「手を繋いだら暖かいでしょう?。」

「あう……」

ですがいつまで経っても繋いで来ないので、寂しそうな顔についてなってしまう……

「手……」

「わっ、分かった。分かったからそんな顔しないでよ」

私の寂しい表情が嫌なのでしょう。顔を真っ赤に染めて手を繋いでくれる事に。

やっぱりルーミアの手は暖かいです。

「じゃあいきましょうか」

「騙されたっ？」

私の表情の変化にそんなことを言われましたが気にしない。

「何を作りましょうか」

「うっ／＼／」

私と手を繋ぐのがそんなに恥ずかしいのか、顔をさらに真っ赤にしています。

そう言えば……

「名前を言ってますませんでしたね。私は伯柳弧徹です」

「……ルーミア。ルーミア・エイリスよ」

やっぱりルーミア……だけ違いますね。

今夜は……ハンバーグにしましょうか？

.....

ちなみにルーミアを連れて帰ったら、二人に殺されかけましたです。

ル・ミアまで参加しやがったですよ。

十五節 わはゞですゝ（後書き）

七月十六日編集

十六節 氷に宵に雪に・・・足りない・・・？

「本当・・・あなたの料理って無駄に美味しいわよね」

そうかな？《ちくちくちく・・・》

「いいわよね弧徹・・・こんなにおいしく作れて・・・」

さすがに爆破はしない程度にはね？《ちくちくちく・・・》

「恩返しに私も作ろうかな？」

ん？・・・《ちくちくちく・・・》

・・・？ってだめですよ！？

「じゃあおしえてよ？」

その犠牲が多すぎますから・・・《ちくちくちく・・・》

「・・・あなたさっきから何やってんのよ・・・返事も曖昧だし」

ん？《ちくちくちくちく・・・》

「きいてないね？」

そうだな？《ちくちくちく・・・》

「この剣の切れ味ってどんななの？ルーミア？」

ああ〜?《ちくちくちく・・・》

「.....」

《ちくちくちく・・・》

《ジャキンツ!》

なんですか、冷たい.....え?

「しんでみようよ、弧徹」

まっまってレスチノはそんなキャラじゃー---

「えへへへへへへへへへへへへ」

ヤンデレ!?

「弧徹がいけないんだよ.....こてつが.....」

のらないで.....しゃれにならないよ!?

「で?いったいなにしてんのよ?」

少し待つてくださいお願いしますから(土下座)

「しかたないな〜」

《ちくちくちく・・・》

「……………《ブチッ》」

できた！

っってお願いですからその剣を下ろしてくださいレスチノ様——！

「……………まあいいや」

「……………でなにができたの？」

ほいつ《ぱせつ》…《》

「え？」

ルティには帽子とマフラーね

でレスチノは…

「ふえ？」《きゅっきゅ…》

レスチノは青のリボンとポンチョな…

でルーミアは…

「うん？」《すっ…》

ルーミアは赤のリボンと手袋だね…

《あう／＼／》

にはは〜これであったかいでしょう？

それにとつてもかわいいよ〜

《……／＼／》

で……大にはー……？……？……？……？

……あーそうかいなのか……

「？あれ〜？大ちゃんのこと弧徹に紹介したっけ？」

……うん？レスチノそいつの事知ってるの？

「知ってるも何も友達だもん」

ふ〜ん……

「それ大ちゃんに作ったならもってかないの〜？」

……レスチノ代わりに持ってきてくれない？

「なら大丈夫だよ〜」

……？なんで？

「だって今日遊ぶ約束してるからここにくるよ〜？」

……まずくね？今初対面じゃないみたいなこと言っちゃたじゃ
ん……

「チノ遊びに来たよー」

タイミング悪いな!?

「あゝ大ちゃんひどいよ」

「え?なにが?何か私したっけ?」

「・・・何故肩を掴むのですかルーミア」

「べつにーおもしろそうだからねえ」

逃げ場なしか?

「だって一度も弧徹と会ったなんか言っただけなのに」

「え?しつしら無いよそんな人」

「嘘ってきらいだよ」

「・・・何か大さんの肩をぎりぎりと言を立てるぐらいにつかんでるなあ・・・」

「なんで?」

「ああ・・・大さん涙目・・・」

「あっ離れた・・・」

「・・・こゝてゝつゝ?」

「ごめんなさいっ!謝るからその剣降ろしてください!」

「全く・・・」

うう・・・

「あつあの大丈夫ですか？」

ええ大丈夫です・・・というか貴方のほうが大丈夫ですか？

「ああこのぐらいなら別に大丈夫です」

本当ですか？

「ええというか過保護すぎですよ」

・・・すみませんでした

「え？あれ？何で謝るんですか？」

ああ・・・私って・・・

「そつそんなに堪えることでしたか？」

「過保護って言葉こいつに使わないほうがいいよ」

ああ・・・

「そつそつですね」

もう私なんか・・・

「大丈夫だよあんたは過保護じゃないよ」

まじで!?

「・・・」

え?何で黙るの?

「ほらそこの妖精になんかわたすんだらう?」

ああそうでした

はいどうぞ《しゅっしゅ・・・》

えっとリボンとマフラーと手袋です

「あっありがとうございます・・・」

いえいえ

「なんかお礼・・・」

別にいいですどうぞせなら本名教えてくれるのと敬語直してくれると
ありがたいですね

「名前在るの知ってたんですか?」

何かありそうな気がしましたから

「変わった方ですね普通妖精に名前があるなんて考えませんよ?」

まあまあ・・・でお名前は？

「フエリス・レイラです」

・・・何か神秘的な名前ですね・・・

「そうですか？」

まあ素敵な名前だと思います

「あっありがとうございます／＼／＼」

にしても大分人数増えたな

「本当にね（このたらしめ）随分弧徹のおかげで」

・・・なんかいま本音混じってなかった？

「気のせいよ気のせい」

・・・まあいいですが

というか四人とも気に入ってくれましたかそれ？

「そうそう今思ったけど・・・」

「これってさあ」

「あなたの能力で」

「元から出せたんじゃないんですか？」

あのねえこういうのは手作りだからこそ意味があるの！
手作りだからこそ気持ち^が籠^るんだよ！

《こいつ最早たらしとしか言いようが無い》

四人が心を一つにしてそう思ったときだった・・

十六節 氷に宵に雪に・・・足りない・・・？（後書き）

今のままでとルティとルーミアの口調が被るなあ・・・

十七節 死んだ〜です〜．．．あれ？何故？

ハイどうも今「貴方は異性に好かれていと自覚しているのなら．．．」

まあ四季映姫様に怒られています．．．

．．．というか小町さんぐっすり寝てるし．．．

「小町は何寝ているのですか！」

《ゴソツ！》

「きゃんっ！」

．．．いたそうだなあ．．．

「小町もです！何生者連れてきているんですか！」

．．．ああまた叩かれていますそして恨めしそうにこっちむいてます
うん？何でそんな目で見られてるか？

．．．小町さんとあつた時確かに死んでたけど．．．
何か映姫様の所来たら生き返つたらしく．．．

けどこっちにきちゃったから戻れないらしく．．．
まあここまでにいるまで．．．というか小町さんに会う所まで思い
出しましょう

．．．
．．．
．．．
．．．

・・・ここどこですかねえ・・・

「おや・・・新しくきた霊かい？」

え？何？私死にしました？

「ここにいるんなら死んでるね」

・・・ところでそこら辺にいっぱい霊がいますよ？

「だからなんだい？」

・・・死神ならその船で向こうまで運ばなくてもいいのですか？

「今は休業中・それにそこらの霊はまだ現世に未練を持っているから運べないんだよ」

・・・単純にサボりと・・・

「後半聞いてなかったのかい？」

・・・あの紫の桜・・・きれいで気味が悪いですね・・・

「ここでの発言でなかったら意味不明な発言だね」

とりあえず私の死因ってなんですか？

「急に話が変わったね？」

人見知りで話続かないと兎のように死んでしまいます

「・・・よく意味が分からないんだけど」

で？死因は？

「・・・それは四季様に会わないと分からないね」

じゃあ連れてってください

「別にいいんだけどさ・・・銭はあるのかい？」

・・・見せてくれたらいくらでも創れますよ

「いやそれじゃ意味が・・・って腰についてるそれじゃないのかい？」

・・・なんか今の服に不釣り合いなやけにぼろぼろな巾着袋があった

「その中にはいつてる銭全部で連れて行けるけど？」

・・・食費が・・・

「あんたの場合いらないだろうに」

そうですねじゃあこれ……

……何かむちゃくちゃ見た目に反しておもいんですけどこれ！

「銭は霊の業に応じて多くなるから嵩張らないようにそれにいくらでも入るようになってるんだよ」

内容量の重さも軽くしてよ！

「そればっかは無理」

……といかなんで身に着けてる時は軽くて持つと重いんだし

「さあ？」

小町さんこれ持て

「何で命令形かしら……!?」

重いんですけどそれ何とかして

「むっむり……」

《ズシューーン!》

何落としてるんですか

「こんなに重いなんて思わないよ普通……」

といつかなんかジャラジャラ銭が留めなく出てるんですが・・・

「少しは軽くなるだろうこれで」

・・・この量ってどうなんでしょうか・・・

「もう分かんないよ」

で？これで逝けるんですよね？

「ああ・・・といつかこの量なら最早目の前でいいよ・・・船いらないよ」

寧ろここに四季様来て欲しいですね

「まあ愚痴っても仕方ないし逝くよ」

一緒に来るんですか？

「ああ面白そうだからね」

どうなのそれって・・・

「いいんだよこれなら暇つぶし以上だろうしね」

(それで怒られちゃ世話ない気がするけど)

.....

そして今に至ると

何かこっちに来た時目眩がしたのは生き返ったからなんですね！

「全く貴方は死神としての自覚以前の問題で……」

四季様

「何ですか私が話している時に」

私の死因って結局なんですか？

「爆死でしょうね」

……は？

「まあ今の状態は体が現世に在りますが魂がこちらに在る状態でしょうね」

というか爆死って

「そのまんまの意味ですか？」

あの二人に説教決定……待てよ……寧ろ……

「何を考えこんでいるのですか」

あの四季様私つてもう現世に戻れないのでしょうか・

「今回こちらの不手際なので一つ黙認することがあります」
「なんですか？」

「能力を使うことで可能なら戻るといふことです」

・・・ああその手があったか

「私から上へといっておきますから貴方できますか？」

はい・・・あの四季様

「なんですか？」

現世で四季様にお説教して欲しい奴がいるんですが

「端からいくつもりです」

ですよね〜

「まあ今後このようなことが無いようにしっかり小町に説教してか
らですが」

じゃあ気長に茶と菓子を用意して待ってますね

「おや？何かと弁えているのですね？」

映姫様は偉いって何か記憶にありまして

「まあ早めにいきますので」

ええ美味しい和菓子を用意しておきます

「では楽しみにしてますね」

はい

.....

その後かなり戻った後かなり四人に泣かれた

怒られるかと思っていた二人が恐ろしく私が優しくしたことで挙動不振な時に

映姫様に来てもらった

取りあえず心の中で(ざまあ)と思っておく

そして小町にご冥福を祈っておく

十七節 死んだ〜です〜・・・あれ？何故？（後書き）

・・・ぐだぐだだ〜（苦笑）

次辺りしっかり戦闘しよう

十八節 …… 戦闘・常に出会いと別れはつき物です（前書き）

東方アレンジ『明治十七年の上海アリス』でも
聞きながらどうぞ

十八節 …… 戦闘・常に出会いと別れはつき物です

「くらいなさい！」

《冬符・フラワーウィザラウェイ》

誰が食らうかよ…

《ががががががががっ！》

全て伯刀で防ぎ避ける

「ルティばっか見てていいの〜？」

っ！？

《電符・ヘイルストーム》

……とにかく防ぐため伯刀で弾く…

「ほら！こっちもだ！」

《闇符・デイマーケイション》

「私もです！」

《水軟符・ウォーターランサーズ》

やばいっ…

とにかく攻撃しないように避けていたがこれ以上はまずいので応戦することにした

《初源符・斬想夢想》

・・・何でこうなっちゃうのかなぁ・・・

「弧徹の馬鹿ー！」

・・・それならeasyできてるお前らのほうが・・・だ！

《無符・無慚切》

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

「今・・・なんて・・・いったの・・・？」

私はここから出て行きます

「いつ意味わかんないよここにずっといるんじゃないの？」

私は元々放浪人なんです・・・それに私はこの世界を全て見て回りたいのです

「何ですよ？別にここにいつまでもいたっていいじゃない？」

「それともなにさ？私らと一緒に居たくなくなったのさ？」

違うよ・・・まだ私はこの世界に知りたいことが沢山あるから

「・・・もついいよ」

「そうだね・・・じゃあ弧徹が教えてくれたルールでけりつけようよ」

「へ？」

《氷符・アイシクルマシンガン》

《火硬符・エクスプロード》
なっ!？

《具現化+行使・》伯刀!

《禅符・全刀禅》

「へえ・・・じゃあ私ら四人でやらせてもらおうか」

「そうね・・・じゃあ私らが勝ったら弧徹にはここにずっといてもらおうかしら」

「はあ!？」

《地軟符・ロックバインド》

「足が・・・」

「そうですね・・・いい考えです」

「・・・私が勝ったら・・・?」

「偶に会いに来るって条件でどっかいつていいよ」

「まあないだらけどさ」

「はっ! だったらなおさらー!」

「・・・」

「なんだい? そんな暗そうな顔してもやらせてもらおうか」

「だったらさっさと来たらどう?」

《言われなくたって!》

.....

「いい加減まけたらどう!？」

ざけんなっ!

「.....どうして「」についてくれないの?」

だからー!ー!

「.....私達は弧徹のことが好きだよ?」

.....そう.....

「それでも.....どうしても.....どうしてもくくの?」

.....私は.....

「……何にも言えないんだね……」

私は……！

「……もういいよ……」

レスチノ……

「だから弧徹は優しすぎるんだよ」

「でもそれはいま私らにとって残酷で」

「苦しくてでもそれ以上に悔しい……」

……私は貴女達の気持ちに今答える事はできません

……それは貴女達への最大の侮辱だから……

……だから勝手かもしれないけど……待っていてください

また……会える時まで……

「やっぱり弧徹だね……」

「優しさがあって」

「けどその優しさに甘さをもって」

「同時に残酷な厳しさを持つ」

.....

「謝らないんだね・・・」

今の私には全ての言葉が貴方たちへの侮辱ですから・・

けど・・・一つだけ・・・最後に・・

「なに・・・？」

また何時か・・・運命が許したとき会いましょう・・・？

《またね・・・》

.....
はい.....

.....

十八節 . . . 戦闘・常に出会いと別れはつき物です(後書き)

. . . . 優しさって常に残酷 . . . それが私の今迄の経験談 . . .

そして戦闘といえないくただくださ . . .

戦闘描写の文才が欲しい . . .

またその内編集するけどね!

十八…節 日記…少年

十二歳?ヶ月目

今日でこの中学…違いました、高校に来てから ヶ月です。
妹の方には友達も出来て親友も出来て…男の奴らはロリコンが
多い様ですから、弱みを握って警告させていただきましたが。

全く、中には彼女がいる男もいて、男と言う生物に私が該当する
事が恥ずかしいですね。

ですが空夜…私の友人ですが、空夜は信用できる男です…
というか日記に書く事でもありませんが、空夜…周りの女性の
気持ちに気づきなさいよ。

何故か妬んで私に被害が及ぶのですから…

.....

十二歳?ヶ月目

空夜……貴方がいい加減にしなさい。

というか日記が愚痴になっていきますね……

ですがここと暴力でしか鬱憤が晴らせません。

妹は幸い、空夜に惚れていませんが……はあ。

妹が何か私の事を言っているらしく、今度は男共が金属バットや

らメリケンサックやらetc……

私は何かこの学園に喧嘩でも売りましたか!ええ!?

もう勘弁してください……何故女と男を敵に……私って嫌われて

いますか?

はあ、空夜の件では特定の女子に慰められて。妹の件では特定の男子に慰められて。

しかも下駄箱に今度の学園祭で血統を挑むと書いた封書が……せめて決闘とお書きください。

私……不登校になっても宜しいでしょうか?

.....

十三歳?ヶ月目

もつやだ。

日記で書く事でない事から最近始めすぎです。私……
というか神谷さん。心が広いのは良い事です。尊敬します。
ですが

- 廃校になった三校の生徒を我が校で引き取ります。

なんてやめてください。

私がこの私立学校の書類系統を何割扱っていると思っているのですか!?

もう勘弁してください。この年で過労死してしまいますよ。

お小遣いと言う名目の給料、増加させていただきますよ？

ああああああああああああ……

明日は休ませて頂きましょう……

メリーと蓮子には申し訳ないですがサークルも休ませてもらいましょう……

はぁ……つづつづつづつづつづつ……

そういえば最近妹のストーカーが居ましたね……そいつで鬱憤を晴らしましょうか……

どうせならそこら辺の、今時無いと思っていたある組織の事務所を私が破壊しましょうか？

はぁ……やめときましょう、余計過労死に近づきます……

.....

十三歳?ヶ月目

空夜……もう、勘弁してください……

この学校の生徒ならまだしも、何百キロも離れた学園の女性まで落とさないで下さい。

というか今日変な事を空夜に言われましたね。お前が言うなあああ！でしたっけ？

全く何を寝ぼけているのですか？私は私で解決してますし。

……ええ、しています、きつと、うん、はい、多分……

そういえば妹のファンクラブが私に対しての戦力を増やしてきましたね。

全く、ガスガンは対処し辛いですね。中には実弾まで 私って

……

昔が懐かしいです。木製バットの闇討ちから今は拳銃の闇討ちですもの。

……ここって日本ではありませんでしたか？

.....

十四歳？ヶ月目

……空夜の馬鹿。

私にあれだけ妹には興味ないと言っておきながら……

妹の事が好きだあ？

はあ……別に妹が空夜の事が好きならそれでいいのですがね。

まあ空夜なら、文武両断ですし……妹を守ってくれるかな。

懐かしいですね……空夜と親友になったのが

《俺は善者にはなれない。俺の大切な人を苦しめる奴が居たらそいつを苦しめるから。》

俺は悪者にはなれない。俺の大切な人を苦しめるなんて絶対に出来ないから。

俺は結構人に慕われていると自覚してる。けど完璧じゃない。

もし大切な人五人と、顔見知り千人の命、どちらか一方しか救えないのなら、俺は大切な人を選ぶから。俺は自分はエゴだと自覚する。

俺は善者にも悪者にもなれないから、偽善者だろう。だから俺は自分の選んだのを正しいと思わずに、最低だと思って生きるだけだ》

……この言葉を鮮明に思い出せるけどさ、

あの時こそ引かれたけどさ、

これって今思うと支離滅裂で、言葉繋がっていないよね。

空夜は結局私に何を言いたかったんだろう？

というかさ、なんで空夜はこの台詞を言う事になったんでしたっけ？

うむ、謎です。今日は謎の一日と思い出だった。

.....

.....

ははっ……

私が……うんにゃ

俺が間違いだっただよ空夜。

何で俺はお前を信用したんだろうな？

不思議だな人間って。

簡単に人を信用してしまう。

そついえばさ、お前があの時言った事。

意味分からなかったからさ。

勝手に解釈しておくよ。

ようはさ。

自分が正しいと思えばそれは間違い。

相手が自分を正しいと思えば間違い。

そつ理解しておくよ。

あともふたつね。

最低だよお前。

最悪だよお前。

もう、二度と私にかかわるな。

まあ、もう無理だろうけど。

最後に。

俺がお前にどう見えてるなんて関係ないんだよ。

俺がそう思えばそうなんだからな。

十九節 龍神様ですか・・・そうですね・・・

「おぬし弱いの」

「またそこから!？」

「またとはなんじゃまたとは」

「神様との開口一番がほとんどそれだからだよ!」

「おぬしやはり我との戦いに手を抜いておるな？」

「嫌です神様との戦いに本気になりたくない」

「この今戦っているのはもう少しで都だ!と思ったら殺気向けられたからだし」

「ほう?あの墮神には本気になったというのか?」

「何で知っているのです・・・」

「言ったじゃろう?我は龍神じゃと」

「ロリ龍神ですね」

「真面目に聞く気は無いのかのう?」

「どござ」

「そのおぬしが殺した墮神の育て親なのじゃ」

「ブチクロス！」

「まあまたんか」

「……………」

「墮神……そやつはの……ある神に洗脳された者の一部」

「どういづことですか？」

「それは……我に勝つたら教えてやってもいいかのう！」
そういつてから一瞬の速さで目の前に現れた

「がはっ！」

そしてありえない勢いで何発も認知できない速さで殴られた

「やはりおぬし我の力読み間違えておらぬか？」

「……墮神と同じくらいだと思ってるけど？
破壊と創造を操る龍神様？」

「おぬしにはがっかりじゃ……」

「どういう事ですか……」

「私の能力は《全を使う程度の能力》じゃ！」

「ぐっ！」

今度は伯刀を出現させ耐えた……

「我はの・・・おぬしの持っている体・能力の元持ち主じゃ」

「・・・」

見たら伯刀が今にも碎けそうな位の輝が入っていた

「さあ殺り逢おうではないか？」

「ルールは？」

「おぬしが決めたというスペルカードルールとやらでやるつもりではないか」

「・・・何で知ってる？」

「我にとっておぬしは興味深い存在であったから・・・の」

「後悔しないでいただきたいですね！」

「おぬしのほうがじゃ！」

.....

「とつととやられたらどうですか!」

《全無符・全と無の交差》

「おぬしがの!」

《全夢符・夢の名残》

とりあえず全てを避けながら龍神に向かう
グレイズしながら・・

「おぬしにはほとんど呆れるの!」

《全神符・八百万を統べし神》

「うつさいですよ」

《無幻符・幻の空間》

やっぱり弾幕戦は総当てが向いてないな
つてさすがに不規則に向かって来るのは苦手だな

「これでお終いかの!」

《全符・全の消失》

「誰が終わりですか!」

《伯符・名の刀の導》

.....

「おぬし強いのお・・・」

「手抜いてe a s yで来た奴に言われたくねえ」

「どつちがじゃ・・・」

「まだe a s yしか作れないんだよ」

「まあいいじゃろっ」

「なにがいのやら」

「で神の事なのじゃが」

「・・・」

「いずれ会うときが来るじゃろっしその時はこのルールではなくし
つかりと戦うんじゃぞ」

「他人任せって・・・」

「我ではあやつに勝てん」

「どんだけ強いんですか」

「まあ我で力になれることがあつたら会いに来るがよい」

「へいへいへい……一回お世話になりますよ」

「なんじゃ?」

「ちあ?」

「おぬしのう」

「じゃあ私は都行きますので」

「じゃあの〜」

.....

そろそろ年が始まるころか?

十九節 龍神様ですか・・・そうですか・・・（後書き）

技表を見ながらのほうが戦闘がどんなか分かると思われます
といいますが弾幕戦は情景が書けません・・・

普通戦闘ならまあまあ書けるようになったはずなのに
東方だと致命的だ！

二十節 神様方との出会い・信仰の交渉です（前書き）

とりあえず神様と出会っておきます（話し合わせ）

二十節 神様方との出会い・信仰の交渉です

はい〜弧徹です〜

周りは鬱蒼とした森です〜

因みに雪が降ってるよ〜紅葉も降ってるよ〜桜も降ってるよ〜

・・・さていいたいことは山ほど在るけど！とりあえず今はビシッとする・・・

まあ身長はどうにもならないけど・・・（現145cm）

畜生・・・龍神ロリにeasyのスペカって言ったけど思いつきりI u

naticで来てたから力使ってここまで縮んだ・・・

はあ・・・

とりあえず長めの石段を登り社があるところまで来た

社には何も書かれていない・・・

単調に言うところは幻想郷ができた時博霊神社になる場所

紫に前逢った時一応興味は持ってくれていた様だけどどうしても不安なためここまで来た

余り原作内容は分からないけど確か紫は・・・

どうしたんだっけ・・・と言っていいぐらい憶えていないけど確か場所の面では境界を弄って外の世界から隔離して結界を・・・はったんだっけ？

んでシステムは最初は否定されていたけど・・・えっと・・・外の世界で妖怪が力が弱まった途端来る・・・だっけ？

で・・・確か博霊神社が唯一ではないけど現実世界と繋がせられる・・・みたいな感じだったはず

う〜ん・・・まだあった気がした様な・・・やっぱり今度本気で紫と話し合って協力してもらおうかな

まあとりあえずこの神様と話を付けて置くかな

確か博霊神社には固定の神様自体が居なかったはずなのに人間とか話せる妖怪の話だと

ここに何か固定の神様がいて・・・こちらへんの季節がおかしくなっているのはそのせいらしい

そんなもって神様の名が・

「零季よ」

参拜つもりで現代新五百円入れたら出てきちゃった

「それで？君は何の用で来たのかな？こんなオモチャを賽銭箱に入れる奴初めてなんだけど？」

まあまあ・・・（オモチャじゃないのに・・・）

「じゃあてめえは何しに来たのかな？」

何か下がった？

「人でも神でも半人の何かでも妖怪でも幽霊でもない君が何か様？」

・・・協力して欲しいんです

「また？」

また？

「ああ君じゃなくて・・・えつと紫・・・そう八雲紫って女が尋ねてきてね君と同じ事を言ったんだよ」

紫が！？

「うん・・・まあ無理だろうって言ってあげたけど」

？何で無理なんですか？

「君等がして欲しいのはこの一体の土地の要求に妖怪がここにこられるようにするシステムに協力
それと人間がそれに納得してもらうこと主に言うとそれだね」

・・・？それなら紫の能力で何とかできるんじゃない？

「要するに人間と妖怪は対なる存在って君が教えたんでしょ？」

まあ・・・

「じゃあ言うけど人間が妖怪に行き成り（私達に協力してくださいー
成功すれば貴方方は妖怪に殺される危険は減りまーす）って言われて納得する？」

・・・あ

「今更気がついたので・・・？」

失点だった・・・

「まあ私達にして欲しいことは人間の信仰を……」

……まさか……

「そつ……唯一一番私が信仰を集めているから何体もの神を犠牲にしなくても良いからね？」

じゃあ……

「私の人間の信仰を全て下さって頭さげたのよ」

……でもさ……紫なら……言っちゃ悪いけど力づくで奪えたんじや……？

「そうだねえ……でももし私を消したりなんかしたらたくさん神様から狙われちゃうよ？」

それで存在ごと抹消されちゃうね」

じゃあ紫は？

「それでも頭下げてきたから……さすがにまだ若い娘殺すのは気が引けたから……」

そしてくいつと指を神社のほうに……

え……？

「そこで一ヶ月寝てるわ……あ因みに今日でその一ヶ月目だよ」

何したんですか……？

「時間止めて三日間一秒につき5億回殴り蹴りを繰り返したのよ．．
おかげで肌ツヤツヤ〜」

．．．へえ．．．？

「．．．．．うめん．．．．．嘘．．．．．ほんと．．．．．うめん．．．
」

．．．．．(ニッコリ)

「．．．．．三割．．．」

．．．．．(ニッコリ)

「七割です！御免なさい！！」

．．．．．はあ．．．

「ううう．．．」

じゃあさ〜他になんかいい案無い？

「ううん．．．あ

なに？

「君が行けばいい話しじゃない？」

．．．．．あ〜

「全く」

どの口がいうのかなあ〜

「……あのさ……」

何？

「君じゃなくてえ〜」

うん？

「そこ！」

いきなり小さいナイフの様な物を社の上に投げた

え……？

「お前は誰かな？」

そこにはいきなり白いマントの様な……

「よく気づきましたね？」

「私を舐めないで欲しいかな？」

マントかと思ったらそれは白い……翼？

「じゃあ消えて……っていいたい所だけど……」

「その前に名前乗ったら？」

「あなたに名乗るのは無いけど・・・」

そういうところちに一瞬で来て・・・

「私はセリアって言うの憶えて置いてね弧徹くん」

ふえ？

「それとね？私神様やってて・・・」

それを聞いた途端すぐに刀を出そうとしたが

「墮神を生み出したの」

出せなかった・・・

「君は結構気に入ってるから」

「弧徹！」

久しぶりに女性になり刀を出すか

「もう少しこの世界でがんばってね？」

っ・・・！

物見ごとに空を切った

「じゃあね〜弧徹くんまたね〜」

・・・何もいえなかった・・・

「・・・君の知り合い？あれ」

さすがに人を選ぶね

「ならいいけど・・・」

・・・これから大変だなあ・・・

「零季さん！」

いきなり大声でいう人が来た・・・

その人は・・・

「毎回いうんだけどね？様つけてよ」

「大変なんです！」

「だから・・・で？何が大変なの？」

見た目はかなり霊夢に似ていた

「あ・・・貴方が弧徹様ですね？私博霊・柚木っていいいます」

はあ・・・

「何で様つけるの？」

「それよりも！弧徹様が零季さんを殺したって噂が広域に流れてる

んです！」

「はあ!？」

私？

「しかも経った数分でです！」

「まさかさっきのセリアって奴が？」

「……でも何で零季を殺したって噂を？」

「私が誰かに殺されたらってさっきいったはずだよ」

「……まさか……」

「この辺なら何とかなるけどさすがにここらじゃなくなると厳しいかな……」

「とりあえず私は少しでも減るように神様に話していきます!」

「なら私も言った方が」

いや……零季が行くのはやめた方がいい

「はい……恐らくセリカの狙いもそこに入っていると思いますから」

「だけどそれだと……」

私もいく

「な!?!」

私が一緒に言った方が早そうだし

「……まあ弧徹様ならば大丈夫でしょうし……」

「なにを言ってるんだ弧徹!余計ややこしくなるぞ!」

私は結構顔が広いし私が直接行けば余計な混乱は免れるだろうしね

「だけど……!」

「私が一緒にいくから大丈夫ですよ零季さん」

「……だけど……」

ほら私の力噂で伝わってるでしょう?

「……ならせめてこれを」

これは……?

それは諏訪子達から貰った腕輪にある穴にちょうど入れられるび
玉見たいな物だった

「それをはめれば私の信仰……つまり神力と私の能力を使える
てもの」

ありがとう……けどこんなものいいの?

「帰ってきたらしっかりと返してもらおうから」

ですよね

「だから・・・」

無事帰ります

「ん・・・」

「いきますよ弧徹様」

了解

.....

二十節 神様方との出会い・信仰の交渉です（後書き）

閑話みたいなもの神様また諏訪子に神奈子がでてくるよ？

二十一節 神様方との出会い・春の神様です

さて、今回は桜・桜・桜・桜・桜です

・・・西行寺じゃないですよ

「西行寺ってなんですか？」

・・・何か最近思ったんだけどさ・・・

「なんです？」

私が心に思ったことが洩れてる気がするんだ

「全部じゃありませんけど口に出してますよ？」

・・・今度から意識していこう

因みにここの神様は何て名なの？

「色々と在るのですが・・・一番呼ばれているのは・・・」

「桜癒だと思っわ」

へ・・・？

「弧徹様！？」

《伯刀！》

《ガキンツ!!》

「始めまして・・・神殺し君？」

殺してないって・・・

「嘘は私・・・嫌い」

《桜符・癒絶》

つつ!?

・・・まだ私が教えたスペルカードのルールは幻想郷で制定された物と違い・・・

決闘はそのままであっているが非殺傷ではなく・・・

《季符・四季は儚く脆い》

「うあっ!?!」

事実当たっただけでも血がでる位の物に加減してもなるぐらいなのです

さっさと非殺傷のに変えなきゃな

「いつたいな」

「いきなり攻撃してくるのが悪いですよ」

柚木・・・ナイス正論!

「妙に嬉しくありません」

でしようね

「うう・・・私はどうなるの？」

「・・・私が慰めてあげましょうか？」

「敵に慰められても嫌だよ！」

敵って・・・？

「・・・もしかして私も一緒にいるからそんな噂が流れてるので
ようか？」

「何言ってるのよ！柚木が零季を裏切ってこいつについてったんで
しよう！」

セリカって奴恐ろしく暇人なんでしょうね？

「私もそう思います・・・」

因みにここまで来るのに零季の所から30分

「・・・？何か私勘違いしてる？」

「はい・・・いつそのこと死んでみたらどうですか？」

「え？そこまで？」

「弧徹様を疑うのは死んで……いえ……いつそ消えてしまいましたよ
う」

柚木？

「そうです弧徹様に来る女どもは消えてしまった方が」

柚木と会ったのは経った40分前なんだが？

「体の関係を持ってしまえば関係ありませんよ？」

……ヤンデレ……か

「ふふ……さあ桜癒さん早く消えて弧徹様にした事を償いませう
？」

「え……？やだ……？」

「そんな悪い神様なんていりま

あう！」

少し反省ついでにおねんねしましょうか？

「はあい……すう……すう……」

……ふう〜

「えつと……あの……」

あ……大丈夫ですか桜癒さん？さっき一応血が出たところ直しまし

たけど・・・

「え？あ本当だ」

・・・所で私が零季さんを殺したって嘘ですからね？

「うん？そんなこと分かってるよ？」

はい？じゃあ何でさっき？

「・・・ああ・・・何か今のやり取りで違っつて分かった」

そんな物なんですか？

「神様なんてそんなものだよ？」

ん〜じゃあ聞きたいことが

「セリカって娘なら・・・大体そこらじゅうウロウロしているんじゃない？」

・・・何か知ってます？

「昔は結構ねえ〜まあ生まれた頃の話だけだね」

・・・生まれた・・・ね

「あ！そうそう君に頼みごとがあるんだけど？」

・・・さっきまで殺気だってた方が？

「これがなかったら普通に頼んでたよ？」

じゃあなんですか？

「実は私の力をかなり吸収しちゃった桜がさあ・・・消えちゃったんだよねえ」

吸収って・・・

「偶にあることだからいいんだけどね・・・そう言う桜って人を狂わす力を持つちゃうんだよ」

・・・それで？

「見つけたらでいいから封印して欲しいんだ」

それだけ？

「でももしその桜の力を持つちゃった人間がいたらその人間を使わないと封印できないから気をつけてね？」

・・・あれ？それって・・・

「じゃあよろしくね？」

・・・まあできるだけ善処します・・・

「じゃあ次の神様の所行くならこれ持ってっていいよ？」

また今度は紅のびー球のような物で腕輪に嵌められた・

「それも零季から貰ったのと一緒に物だから・・・」

返しに來ますよ？

「じゃあね〜」

お〜・・・

・・・何か神様って仲良くなると口調が砕けるな〜

二十二節 神様方との出会い・夏の神様……？（前書き）

ふう……PVとか見て分かったけど皆様こちら見てないね（苦笑）
駄菓子菓子！絶対完成させてやるです！

二十二節 神様方との出会い・夏の神様……？

さて～周りは向日葵・向日葵・向日葵……
……太陽畑じゃないよ～幽香いないよ～

「私が幽華ですが……？」

こんな現実……！ありなのか……！？

口調違うのに髪以外一緒なんて認めない！（薄い緑）

「弧徹様……最近男言葉使うようになってきましたね？」

気のせい……気のせい……？

「自信を持ちましょうよ？」

じゃあ本題に

「ええそうですね」

とりあえず～

「戦いましょうか？」

その口調の方がやっぱり……不正解ですね！

《桜符・生を得た花々》

「私は戦闘になると口調が変わるらしい……けどね！」

弾幕に当たっているように見えるがかなりギリギリでグレイズ・・・ね

「次は私よ!」

《幻想・花鳥風月、嘯風弄月》

・・・? やつぱり何かなあ

桜癒の時もだっただけど何故か異様に弾幕の密度が低い・・・

とりあえずこれで終了です!

《無季符・無の季節の花一輪》

「な!? 零季様と掛け合わせた技!」

ジ・エンドです〜

「あっ!」

.....

さてっと幽香さんに質問です

「幽華よ?」

幽香ですね?

「・・・幽華よ」

幽香でしよう？

「華よ！幽・・・華！」

・・・うん？

「弧徹様？かはどんな文字ですか？」

香りのか

「華ってかいて華ですよ？」

・・・みたら幽香・・・もとい幽華が少し半泣きだった・・・

「幽華だもん・・・」

わー！ごめんなさい！ケーキ食べる！？モンブラン食べる！？

「・・・食べる・・・」

ふっ・・・バツチリ文字が違ってたなんて・・・

とりあえずショートケーキね？

「おいしいですねっ」

・・・うん？

…って柚木がたべちゃ駄目だった！

「ケーキ……」

さらに半泣き……もとい本泣き？だった……

「ぐすつ……」

……こいつ！私の才能！アイデアこいつ！

……向日葵のケーキだ！難しいな！？

《時間ストップ！》

《少年（少女）ケーキ作製＋作り中》

……

さて幽華！向日葵（立体）ケーキです！味も保障してやります！

「あ……向日葵……」

……幽華は黙々と崩れないように食べている……

……因みに時間止めた時幽華の泣き顔がそのまま残ったのは罪悪感があつたです〜

「……美味しい……」

どうやら幽華は親しくなると静かになるのかな？

「……ん……」

ふえ？

フォークをケーキが刺さったまま差し出された・

「はい……」

くれるのですか？

「……《こくり》」

とりあえず食べた……

「……美味しい？……」

とつても

「自意識過剰……」

……柚木行くよ！

「はあ……もういいんですか」

むきゃあああああああああ！

《とんとん……》

なにですか！

「はい」

今度は薄い緑色のびー玉の様な物だった

「またきてね？」

・・・分かりましたですよ・・・

「ん・・・」

はあ・・・

「行かないんですか弧徹様？」

・・・幽華・・・またケーキ作ってやるですからね？

「ほら！未練残さないでさっさといく」

はいはい・・・

・・・

二十三節 神様方との出会い・秋の神様で真実を

はい〜弧徹です〜周りは〜紅葉・紅葉・紅葉・紅葉・
．．．椀じゃないよ〜

「最近それが定着してきましたね？」

それぐらいあるからね〜

「まあ本当なら季節は一年で順々に来るのが良いんですけどね．．．」

．．．何かある訳？

「零季さんに桜癒様に幽華様それにここの亜樹様に最後に幸恵様．
皆様は本当に仲が良くて．．

でも私達を信仰する人間達は信仰する神以外を毛嫌いしてしまい．．

」

．．．それでこんな抽象的な場所になっちゃってるのですか．．

「神は人間の信仰なしでは存在さえ危うくなってしまいますから．．

」

．．．？．．．ねえ柚木？その事は何時知ったの？

「確かこれは零季さんが．．誰かに教えて貰ったことだと．．」

．．．その誰かって柚木分らない？

「えっと・・・確認はありませんが恐らく土着神である諏訪子様と神奈子様かと・・・」

・・・あの二人私が教えたことを少し履き違えていますね・・・

「弧徹様？」

あのですね柚木？神は確かに人間の信仰無しでは存在さえ危うくなってしまうのは本当ですが
しかしそれでは駄目なのです

「どういうことですか？」

私が思うに神と人間は対等でいなきゃいけないのです・・・
どちらが上で下とかじゃいけないのです

一方が付け上がれば結局どちらも生きることなんて不可能です
それが私があこの二人に言ったことなんですけど・・・

「じゃあこの理論って弧徹様が・・・？」

当たり前です・・・そのための神様方との関係を作るです
まあそれは建前で本当は会って見たいが八割なんですけどね・・・

「弧徹様は正直ですね？」

そうですね？

「でも肝心のあんたがその神殺しってことがね？」

へ・・・？

「がっかりよね・・・？」

《紅妖・落ち行く葉は生命を奪う》

うぐっ！？

放たれた弾幕は今までより神力が込められており密度が高く避けさせるようなスキマが無かった

「亜樹様！？何を！」

「簡単なことじゃない・・・こいつを消すだけ」

「亜樹様なら弧徹様がやっていないこと位お分かりになさるでしょう！？」

「そうなんだけどね・・・頭がさつきからうるさいのよ・・・こいつを殺せつてね」

・・・やばいな・・・血が全く止まんない・・・
というか相手が悪いな・・・弾幕だって避けるスキマが用意されてないし・・・

「何をおっしゃっているか分かりません！」

「私も判らないわね・・・でも邪魔するなら・・・柚木でも殺しちやうわよ？」

それは困りますね？

「弧徹様！？その傷で動かれたら・・・！」

はいはい・・・別に私は人間じゃ多分無いだろうし何リッター血が減っても死にはしない

「そういう問題じゃ・・・！」

まあまあ・・・男の子は誰だって女性を守りたい物なんですからね？

「・・・危なくなったら・・・何を言っても仲介に入りますからね」

了解・・・さて亜樹様？

「もう最後の話は終わったかしら？」

ええ・・・じゃあ・・・

「ルールは？」

スペカ・・・それを混ぜた肉弾戦で

「・・・神相手に挑むなんていい度胸してるじゃない？」

私を甘くみたらどうなるか教えてあげますよ？

「その言葉そっくりそのまま返してあげるわよ！」

そういった後・・・

「ほら何処見てるのかしら!？」
墮神にも劣らない速さで目の前に現れ・

《ガンツ!》

左からの回し蹴り

《ドガアアア!》

跳んでからの蹴り二発、殴りを十三発を瞬間で

くっ・・・!

「ほら!あなたも来なさいよ!」

・・・やっぱりさっきの弾幕・・・当たたせいか妙に力が入らない・・・

「来ないなら行くまでかしら!？」

《落葉符・秋の場景》

それも先ほどと同じように避けるスキマが存在していなかった

「弧徹様!？」

「これで終わりかしら?つまらな
」

誰が終わるか!

《無春夏・終わり来る季節の前兆》

「つつ!？」

私はスペルカードのルールはある程度の避けられる所があるように
つていったはずですがねえ！

《季符・終わり来る永遠の季節》

《全四季符・一の季の永遠》

「二枚同時!？」

そっちがルール破るならこっちは破らないで正当の二人分のスペカ
だ！

「明らかに矛盾してるじゃない！」

それが私です！

《全無季符・現の季節を変える花》

「きゃあっ!?!？」

終わり・・・エンドです〜

.....

・・・ふう

《ドサツ・・・!》

「弧徹様!」

おゝ柚木ゝ勝ったよゝ

「それよりも傷を・・・」

この位十日で直るってゝ

「桜癒様の能力を舐めないで下さい」

へ?

柚木がそういった瞬間傷が一気に無くなっていった・・・

「はぁ・・・少し疲れますね・・・」

・・・?今のつて?

「あれ?言ってますませんでしたっけ?私の能力?」

いや・・・知ってるけど・・・

「ですから・・・桜癒様の能力のコツを掴んだんです」

・・・その能力の応用の仕方あり？

「使えればいいんです」

そういうものかなあ？

「・・・うん・・・？」

「あ・・・亜樹様が起きられました？」

「・・・あ・・・柚木？どうしたのこんな所に？」

・・・？覚えてないんですか？

「・・・え？」

・・・？なんですか？

「・・・こ・・・弧徹さん？」

そうですが・・・

「ちよ亜樹様・・・」

いきなり亜樹様は柚木の後ろに隠れてこちらを伺っている・・・

選択肢は！

肩を叩く

一択しかなかった・

亜樹様《トントン》

「ひゃあ！」

・・・（ああ・・・なるほど・・・）何これ面白いね？

「私的には日常なので普通です」

少し亜樹様の方を見た・
真っ赤だった

「あつあの・弧徹様・！」

なんですか？

「おっ・・・お話したいことが」

・・・？どつぞです

「えっと・・・二つありまして」

「はいはい・・・その前に落ち着きましょっつ」

「・・・もう大丈夫です」

で？なんですか？

「一つはこれを・・・」

貰ったのは黄のびー玉みたいなものでこれも腕輪にはまり残り後二つ嵌りそうだった・・・

・・・ありがとう・・・？

「いえ・・・次は弧徹様にしっかり伝えておきたいことが・・・」

・・・なんでしょうか

「私達は生まれた存在なのはよろしいですよね？」

ええ・・・それで？

「実は・・・私達季を扱う神は・・・柚木も合わせセリカによって生まれたのです」

・・・へ？

「それって・・・どういふことですか亜樹様・・・」

「そのまま・・・でも現状私しか知らないことよ・・・」

？おかしくないですか亜樹様がしっていて零季が知らないって・・・

「私はさつき思い出したのよ・・・」

「さつき・・・ですか？」

「……私と戦ったから？」

「それなら桜癒様と幽華様も思い出していいはずじゃ」

「いや……あの二人私を消そうとしていた筈なのに手を抜いて戦っていたから……」

「それについては分からないけど私が理性を失ったのも関係あると思うんだけど……」

「やっぱり亜樹様はさきほど……」

「少しずつ意識がハッキリして来たからね……」

でもセリカってそんなこともできるの？

「それについてもよくわからないわ……ごめんなさい」

「……後は幸恵様ですか……」

「雪を扱うはずだったわね……」

雪……か

「どうかしましたか弧徹様？」

「いや……じゃあそろそろいきますか……ね」

「……弧徹様！」

・・・何ですか？

「またきてくださいね・・・？」

次は美味しい者を作ってあげますね？

「はい！」

じゃあまたね・・・

「弧徹様・・・私にもですよ？」

はいはい・・・

・・・

二十四節 神様方との出会い・冬の神様自分のした事と真実と

周りは雪・雪・雪山・・・

「弧徹様これ早くないですか!？」

・・・ああ・・・うん・・・

現在雪山では能力が何か分からない奴に制御されて空を飛んで移動できないため

フロートボードを使って雪山をどんどん進んでいます・・・

「・・・弧徹様?やっぱり雪山と聞いてから元気がありませんよ・・・」
「？」

・・・そんなことはないよ・・・

「嘘ですね?それにここ最近まで妖力の強い者達が居たと言われる雪山を通りすぎてから・・・悲しそうな顔していました・・・」

・・・

「凶星ですか?」

・・・それよりも今は幸恵様の所です・・・

「・・・私はそんなに頼りないでしょうか・・・?」

違うよ・・・これは私自身の問題だから・・・そんな私の事でなんか悩まないでいいのですよ?

「ですが・・・！」

お願い・・・今はこの問題だけはしっかり解決したいの・・・

「・・・はい」

この事は貴方達神の事だから・・・

「どうして・・・」

え？

「どうして弧徹様は他人のためにだけ必死になるのですか？」

私のためだよ？これを解決しないと私が殺されちゃうから

「嘘です・・・！」

「だって弧徹様は私達の事など簡単に退ける事などできるでしょう・・・？」

・・・どうだか？

「それぐらい私にだって分かります・・・」

・・・じゃあ柚木は私にどうして欲しいわけ？

「どござってって・・・」

私はね？そんな風に自分の事しか考えずにいてね・・・そして大切な

人を失ってしまったの

だから・自分の罪を償いたいかかもしれないけどね？私は二度とそんな事を起こさないための戒めのように行動を起こしているだけ・

「ですが・・・！」

・・・ほら・・・もう直ぐ着くよ・・・？

もう一つ山の向こう側には雪が積もっているが社が見えた

「・・・弧徹様・・・」

・・・さて？いい加減でてきたらどうでしょうか？幸恵様？

《紅葉・落ち行く花々》

「直ぐに女性に手を出すなんてどういう神経？」

《雪符・全てを流す雪》

どっちが！さつきから進んでる最中に雪崩やら吹雪を出しやがって！私ならともかく柚木なら死ぬレベルだぞ！

「別にその娘なんか居ても無意味に等しいからいいわよ・・・！」

「幸恵・・・さま・・・？」

「貴方はつきりいつてじやまなのよねえ・・・それに貴方と居るだけで何時も虫唾が走るのよ・・・！」

《冬解け・全てを無くす水》

・・・ざけんなよ

「よくいうわね？神を殺め心を弄ぶ少年？」

「少なくともてめえよりはマシだ……！」

「柚木！しばらくこいつの運転を！」

「……」

「弧徹様……」

「あら？私に言われたのがそこまで堪えたかしら？能無し？」

「……柚木は震えながらも泣いていた……」

「今まで慕ってきた神にまるで見透かされたように言われ……」

「今までではそんな事は言われなはずと仲が良かった神に……」

「家族同然の神に言われ……自分のどんな時でも居てくれた……そんな奴に言われたら……」

「柚木にとつてどれ位……たったこれだけのことなのかも知れないけど……」

「……」

「どれほど辛いのか……私には……それがどうしてか理解できず……」

「だから……」

「あら？攻撃してこないの？つまらないわねえ……」

《行使・この場にてスペルカードルールを封印》

《行使・現から私の権限によりこの場の制限を最大に……》

「あら？私に勝てないからってそれで抗ってるつもり？」

「……《及び全ての攻撃を死に至る物で在れば死を推奨》

《追加・この場にて二人以外の乱入は不可》

「随分自分の力を過信しているのね？それとも嘗めているのかしら？」

簡単なことだよ？

「なにがかしら？」

本当に神殺しになったって構わないっつってんだよ？

「私は神よ？貴方ごときにころされないわよ」

聞いてなかったかなあ？

「なにがよ？」

ここでは・・・能力制限が掛かっているだけじゃなくご丁寧に神を・・・存在意義そのものを下げるって設定されてるんですよ？

「え・・・？」

だからね？幸恵様は・・・神力さえここに居る時点で失っていきいずれ消えることもできますよ？

「じょっ冗談でしょ・・・？」

なんなら・・・後20分・・・試してみる？

「なっなら貴方を殺せばすむ話でしょう！？」

どうぞ？この場では赤ん坊に等しい攻撃になりますかね？

「いつ嫌・・・！消えたくない・・・！」

だったらさっさと私を殺せる物なら殺してみたらどうですか？

「お願い・・・！さっきのことは謝るから・・・！」

冗談

「え・・・？」

許すなんて言葉・・・軽々しく使わないで欲しいかな
そして少しずつ近づいていく

「嫌・・・！来ないで・・・！」

・・・死ね・・・

《バリント！》

・・・？

「さすがにやり過ぎかな？弧徹くん？」

「何で貴方なんかいるのよ・・・」

どごがやりすぎですか？セリカさん？

「本当は気づいているくせに」「

何がでしょうか？

「この娘達が操られているって事に・・・かな」

.....

二十四節 神様方との出会い・冬の神様自分のした事と真実と（後書き）

別に疲れてないですからね！

二十五節 神様方との出会い・神様で本当の約束を

「君なら・・・弧徹くんなら気づいているのにどうして?」

・・・私が嫌いなのは裏切りですから・・・ね?

「それじゃあ弧徹くんには私は裏切られたことになるよね?」

・・・何のことでしょうか?

「・・・はは・・・やっぱり弧徹くんは見込み違いだったかなあ?」

私は自分勝手ですから・・・ね?

「そっか・・・私の事がやっぱり嫌いかなあ?」

さあ?どうでしょうね?

「やっぱり私は弧徹くんが理解できないかなあ?」

私を理解できる奴など居りませんから

「弧徹くんはやっぱりいい子だよ」

もう子供じゃないですがね?

「私からしたら子供だよ?」

なら速く自立しないとイケませんね?

「貴様は我々にとって異端な存在であつたがな」

それはセリエが13・・・最後に生まれた神だからか？

「そつだ・・・何故最高神様がこやつを生み出したか分からないままだつたな・・・」

最も現は天心・・・今はセリカと名乗っているが天心が堕ちたことにより12と神の数は収まつたがな」

堕ちた・・・ねえ？

「私が堕ちたと言うならば貴方たちの方は腐っているわね」

「はつ戯言を・・・」

・・・セリカに同感だね」

「貴様までもが・・・」

私を神殺しに仕向けさせてよく言うね？

「やつぱ弧徹クン気づいてたんだ？」

零季と会つた時にセリカが来て言ったことは死んでも守りますから

「・・・これは入ってないけど？」

・・・『お願いがあります、この娘達をどうか守つてやってください
私を守り切るのもう限界なのです・・・貴方にしかもう頼めないの
です』

私にはもう何もできません・・・勝手かと思われませんが、どうかどうかお願い致します・・・！」

こんな事言われたら助けてあげるしか無いじゃないですか・・・

「だから私は・・・！」

セリカも入ってるに決まってるでしょう？

「え・・・？」

私は自分勝手ですから・・・自由に行動するまで・・・それが私です

「・・・やっぱり弧徹くんは馬鹿だよ・・・」

酷いですねえ？

「だから・・・私は・・・弧徹くんのことを・・・」

その先は

幕を下ろしてから・・・ね？

「それじゃあ私達が死んじゃうかもね？」

それ位にね？

「やっぱり弧徹くんは面白いねえ？」

・・・さあ？どうでしょう？

「じゃあ私も協力

《トンツ……》…え…?」

《行使・この戦いが終わるまでセリカは目覚めない》
これは私一人で…犠牲は十分です

「そんなこと…言わないでよ…弧徹…」

《トサツ……》

お休み…

「もう別れの言葉は済んだか？」

ええ…もう十分と…

「ならば…我は本気で行かせて貰おうか？」

どうぞ？私も…ふう…

…俺も本気でいかせて貰うからな

今まで誰にも干渉できない空間で時間という存在を消した空間で修
行した結果が

暴走状態…これはある意味誰かが傷つく以外出なく…大切
な人を無いと無理やり思うことのできる状態

「やはり貴様は異分子であったか…」

それは俺の言葉だな

「最早その事などどうでも良いがな」

あっそ

「今は貴様との殺し合いが重要だからな」

・・・とりあえず死に物狂いで生き抜いてみな

「こちらの台詞だ！」

.....

二十六節 神様方との出会い・苦しみの重さと別れ

《ズガアアアアアアアアアアアア！》

ノーヴァティスの剣技により雪山がえぐれて行く

「貴様は我に勝つというのに随分弱いな」

「うるせえ・・・こちとらハンデを与えてるんだよ」

俺がやっているハンデは二つが

《行使・一定の範囲にしか干涉不可》

そしてもう一つが

《行使・自分以外の者に干涉する事は不可》
最後に

《行使・体の抑制・自我を保つ》

これが無いと俺は後ろの二つを使いながら戦うなんて不可能だからな
事実これらを使っているだけで普通に苦しい

「貴様は本当に可笑しな奴だな」

「勝手に思っておけば？」

「そうしておこうか・・・」

そして一瞬で消えた・・・

《ズガガガガガガガガガガ！！》

一瞬ではなく時を止めた後に繰り返された体術だったが一応神といえど時を止めた間少ししか干涉できないよつで何とか防ぎ切った

「随分なやり方で来るな・・・」

「これが我にとって当たり前なのだがな？」

「あっそ」

「貴様には我等の事など分らないだろうがな」

「知ってるぜお前等十二神が屑だつて事ぐらい」

「ほう？やはり異分子である貴様は可笑しなことを言っつな？」

「異分子ねえ？」

「しかしお前は何も知らないのが事実だがな？」

「やっぱり訂正セリカ達以外の神だな」

「そのセリカが貴様のせいで苦行になっているとも知らずに」

「どういう意味だ？」

「それは我に勝つてからだな？」

《絶牙・神乃裁忌》

それは神々しいなんて物でなくまるであの時・・・爆破が起こったときのような情景だった

「アガアアアアアアアアアアアアアアア！！！！？」

「やはり貴様には我等に抗うなど到底無理な話だな」

「ゲホツ！……うるせえ……そんな事俺が決めるんだよノーヴァ
ティス……」

「それほどまで何故我を殺そうとするか我には理解できないな」

「てめえに何か理解されなくていいんだよ……ノーヴァ」

「ほう……我をその名で呼ぶとは……やはり異端な貴様のすること
は一つ違うな」

「何なら他の名で呼んでやろうか？ノーヴァ神様ヨオ」

「その必要は無いな」

「俺がてめえを消すからか？」

「貴様に我は消すなどできないな」

「やって見なきゃ分んねえだろうが！」

そして一気に走り時を止めるのでは無く極限まで遅い所にし
これにより干渉をでき攻撃できた……筈だったが

《ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！》
全てを弾く何処るではなく跳ね返され

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！？」

「やはり貴様は無能だな・・我を嘗めている」

「ゴハツ!・・」

手を当てたが見たらかなりの血が出ていた

「貴様はもう我等にとって要らないのだよ・・

セリ力をおびき出し尚且つ季神共の仲を旨く引き裂いてくれたから
な」

「ゲホツ・・冗談じゃない・・俺を利用するならまだいいがな
零季達を苦しめるなら絶対に許さねえ」

「生意気な・・だがもうこれで終わりにしてやるっ」

《絶壺・神乃裁忌》

それはどこか禍々しくも神々しい光を放ちながら此方へ向ってきた
最早それは大地を削る何処ろでは無くこの場の空間自体が歪んでいた
それに抵抗する力などもうなくてせめてこの場で収める様にするの
に必死で

一つの影が来ていたなんて気付かなくて

.....

「ゆ……ず……き……?」

不思議とその名を呼んでいたけど認めたくなくて……
でもその柚木だった者は動かなくて

「い……や……嘘でしょう……?」

お願いだから……返事してよ……柚木……」

だけどその人形のような……柚木だった者は何も……
呼んでも返事なんて来なくて……揺すっても起きなくて
況してや息も……鼓動さえ無かった

「嫌よ……こんなの認めない……お願いだから……冗談でしょう……?
?

起きてよ……お願いだから……目を開けてよ……もう一度名前を
呼んでよ……」

でも何度やっても同じで……

そのとき行き成り襟を掴まれて

《ドサツ!》

「痛っ……!」

投げ飛ばされた

「無駄だ我の攻撃を人間が喰らって生きていられるはずが無い」

「そんな事知らないわよ！そんな事私が決める！邪魔よ！」

「無駄だというのに何故貴様は人間のような事をする」

「私が人間だからよ！」

「では人間ならば我にその憎しみを何故ぶつけない？」

「……………そうね……. だったら私の苦しみをあんたが十分に味わいなさい！」

「《私より高位の存在など居ない・私に干涉する事は一切不可》

《私に干涉する者が居るならば精神を人間にして私の今迄の苦しみを味合う》」

「貴様何を……アガアアアアアアアアアアアアア！！！？」

「《私の大切な者の運命を狂わすものには私が出会った者の苦しみを上乘せ》

《これを罪として永遠の苦しみとして誰にも感知されない所へ消去》
「

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！！！！？」

そこには十二の今は屑の元神共がいた
そして十二神全員がもがき苦しんでいた

そして

「《消える・罪を犯したものよ・その苦しみを背負い永遠と苦しめ》」

私はようやくもう一つあった能力を見つけた

それが《死神の能力を決める程度の能力》

これはそのままの意味で死神の能力を自由に決められるもので
今やった事はどのようなものでも罪ある者にし裁くということだ
それよりも・・・!

「柚木・・・!」

やっぱり既に息絶えていて・・死んでいた・・

「・・・お前は私と居て幸せだったか?なあ柚木・・頼むから
・一度でいいから・・答えてくれないか・・?」

やっぱり返事なんて無くて・・

「一度なんて言わずにこれからもそうしようじゃない」

「え?」

「そうそう・・もう一回私をママ何て呼んでほしいからねえ」

「なんで・・」

「やっぱり柚木がいないとね」

「なんで……」

「柚木がいないと……いろいろ困る……」

「皆が……」

「というか幸恵が怖いからね……」

「……」

「さっき言った私の屑の言葉を訂正しないとね」

「居るんですか……」

「ここには零季・セリカ・桜癒・幽華・亜樹・幸恵が全員いた……」

「そんなの柚木を助けるために決まってるじゃない」

「それとね」

《パシンッ!》

「……」

セリカに思いつ切り頬を叩かれた

「言ったよね?全員助けて見せるって」

「ごめん……なさい」

「それ言うなら助けなきゃね?」

「でもどうやって・・・」

私の能力は極端に自分以外への干渉を許さないそれは助けるなんて物になると尚更

「私達は仮にも神よ?」

「だから・・・」

「私達がこの世界での了見は全て私達と言ってもいい位」

「それにね?」

「私達を生み出したセリカもいるんだよ」

「だから魂を呼び戻すなんて簡単」

「でもそれだとこの世界自体に・・・」

「その為の弧徹くんだよ」

「君が使う能力は

《全てを・視・具現化・行使・する程度の能力》

《全と無を扱う程度の能力》

《全てを・扱う・操る・統べる・超える程度の能力》

《死神の能力を決める程度の能力》

だからね」

「でもそれは全部使えなくて」

「言ったでしょう」

「私達は神だつて」

「ここで起きた事ぐらい黙認」

「・・・分つた・・・」

「じゃあお願いセリカ・弧徹・・・」

そして

「《神の許し》」

「《能力合成行使・全を行う事を可能とする》」

「《対象・柚木・》」

そして最後に

「《私を対価とし柚木を蘇生》！」

.....

「……弧徹……様……？」

「柚木……！」

「ふえ！？弧徹様！？」

「……ん……」

「あの？弧徹様……？セリカ様も合わせて皆様が見ておられるのですが……？」

「《ギユウウウウ……》」

「むう……嫉妬しちゃいますね弧徹クンに」

「本当に……弧徹に」

「私は柚木に」

「私も」

「私は両方に」

「何が何なんですか？」

「えへへ……」

「まあ弧徹様が笑顔なのでよろしいです・・・!？」

「どうかした？ 柚木？」

「弧徹様?? 体が透けておりますが・・・?」

「ああ・・・もう自分消えるから?」

「何大事な事を!？」

「大丈夫だって! また会える」

「本当ですか?」

「転生して」

「そのときは・・・」

「その先は次の時ね?」

「意地悪ですか?」

「さあ・・・ね」

「そのときは皆様の気持ちにも答えて下さいよ?」

「当り・・・まえ・・・です・・・」

「さよならでしょうか?」

「またね．．．だね」

「じゃあ．．．」

『また．．．！』

．．．．．

二十六節 神様方との出会い・苦しみの重さと別れ（後書き）

話が無茶苦茶かわったですね（泣き）

二十七節 もこたんINしたお！ってどついつ意味何だろつね？

はいっ！私は今都にいます！

何でそんなテンション高いのかつて？

やっと着いたからだよ・・・

・・・あつちなみに今「弧徹さん」ここが食べ物がある所ですよ

妹紅さんに案内してもらってます

「弧徹さん聞いてますか？」

聞いているよ

「全く・・・」

これじゃあどつちが年上なのか分かりませんです

「？ 同い年位じゃありませんか？」

・・・（現143cmです）（涙目）

（龍神と戦ってかなり力使ってここまで縮みました）

「あつ御免なさい！」

ふふ・・・いいですよ・・・

「でもっそれでも妖怪から庇ってくれた時すごいかったよかったです！」

．．．．微妙にフオローになってません．

「ふおろー？」

何でもありません．

（ちなみに庇ったというのは．．）

．．．．
．．．．
．．．．
．．．．

今森に居ます）

何でか？

都に近いかららしいー．．．

なんかそれで碌な目にあつたことがないような

駄菓子菓子私は行く！

「だれか助けてください！」

・・・逝くか・・・

とりあえず聞こえた方に時間無視で移動出来る様になったからそれでいってみた

(こういうのって瞬間移動って言うのかな？)

そして見たら喰われる一歩手前の黒髪少女さんがいた

(黒髪は当たり前ですね)

というかこの方法で来てよかった

でもこの状態だと狙いがぶれるからこれ一旦中止しなきゃな

とりあえず伯刀を突き刺して解除

《グオオオオオオオオオオオ！！？》

「ひっ！？」

大丈夫ですから・・・

「ふえ？」

とりあえず妖怪からかなりの血が吹き出ているので抱きしめて見えないようにした

・・・だけどそれが仇となった

《ズシャアアアア！》

ぐあ！

・・・まだ死んでおらず最後の力でかなり鋭い爪で引っ搔かれた

・・・やばいかも・・・

「・・・・・・・・！！！」

目を閉じる前に見たのは何故か泣いている黒髪の子だった・・・

.....

「さすがにあの時びっくりしたんですからね！」

ごめんごめん

「いきなり現れて助けてくれたかと思ったら妖怪倒したのはいいですけど
最後にやられちゃいますし・・・」

あう・・・

「でも助けてくれて感謝してます」

はいはい

「とつてもかっこよかったです」

くくくい・・・うにゃん？

「くすくす・・・」

・・・？

「ほらっ？弧徹さん！飯でもそろそろつくりますよ！っ」

お

・・・

二十八節 都の人たちって・・・ロリコン？まっさか・・・ねえ？

・・・どうも弧徹です・・・
？・・・テンションが低い？

ほっといってください・・・

「貴方には蓬萊の玉の枝を持ってきて貰います」
・・・今輝夜姫のところにいます・・・

「聞いておりますか？」

聞いてます・・・

「では私が持つてきなさいと言ったものは？」

蓬萊の玉の枝というのは穢れ無き月に存在します

「・・・はい？」

そして蓬萊の玉の枝は穢れが在れば・紅・橙・黄・緑・青・藍・紫
と虹色の玉の実を実らせ

というかここまで言ってしまうは分かる通り貴方は私と婚約するつ
もりは毛頭無いから
さっさと帰れということでしょう？

「え？あの？」

他にも（仏の御石の鉢）（火鼠の裘）（龍の首の珠）（燕の産んだ
子安具）

どれもこの穢れた世では手に入らないもの

「へ？あれ？」

つまり要約すれば（私は貴方方に興味なんてありませんのでさっさとお帰りください）
ということですね！

「え！？」

途端に貴族達^{デラ}が一斉にざわざわしだした

・・・というかどうかとして私がここに居るかということ・・・
妹紅の父不比等に代わりに行くってくれと頼まれたからだ・・・
どうしてか？
簡単説明すると・・・

（妹紅もう結婚している年）

（妹紅私の事が好き）

（不比等さすがに恩人でも年が・・・（身長的な意味で））

（妹紅反発）

（不比等シヨック）

（不比等最近噂の輝夜姫の事を聞く）

（不比等名案で私と輝夜姫結婚すれば妹紅諦めつく？）

（私と輝夜姫見合い的なことさせる） 今ここ！

・・・何で私と輝夜姫が釣り合うかと不比等が思ったのかようやく理解した・・・

身長少ししか変わらないからですね（涙目）（現140cm）・・・何があつた・・・

というか歴史じゃあ不比等がここに来るべきだろ・・・

・・・処で輝夜姫が涙目ですね・・・どうしましょうか？
・・・助け舟出しますか？

「あの・・・その・・・」

まあまあ皆様方落ち着きましょう？

「あなたのせいじゃ・・・」

無視して続ける・・・

貴方方が納得行かないのも理解でき・・・ます

「なに？今の間？」

ということ一人で一人が時間を決めて輝夜姫と話をして口説きましよう

「なにをいって・・・」

駄菓子菓子！輝夜姫に主導権有り！輝夜姫を口説いて嫌がられたら即終了！

「・・・もういいわ・・・」

ここまで言ったら最早こちらに主導権有り・・・つまり
皆様方賛成してくれましたとさ

ちなみに私は最後に行くことに

・・・何か皆様ガツカリした様子で帰って行くけど・・・

さて私の番ですね・・・

・・・

ここ輝夜姫の部屋の前まで翁さんに連れてきて貰った・・・
・・・何かこの老夫婦・・・欲の匂いが・・・気のせいかな？

さて襖を開けたらそこには・・・

「いらっしやい」

妙に怒気を含ませて喋り掛けてきた輝夜姫が・・・

・・・気のせいならいいのだけど・・・さつきよりも綺麗な・・・着物？
を着てるね・・・

ナンデダロウナ〜ワカラナイナ〜ドウシテカナ〜

・・・さて怒気に混ぜられた好意を無視して・・・と

(他人からの好意に鋭感ですがそれはどうでもいい・・・どうだっていいんだ!)

「貴方名前は？」

・・・人に名前を尋ねるなら自分からって・・・

「あら？どの口が・・・」永琳から習わなかった？

「やっぱりあなたが永琳の言っていた馬鹿ね・・・でも身長がやけに小さいけど？」

・・・そうです私が伯柳・弧徹です

「後半無視かしら？」

永琳は元気にしてますか？

「・・・はあ・・・元気・・・といったら嘘になるでしょうね」

・・・そうか・・・

「ねえ？」

なんです？

「私が今どんなこと思ってるとおもっ？」

・・・さあ？

「ふふ・・・どうしてかしらね？貴方に・・・永琳に怒られそうだけど興味は沸いたわ」

・・・

「私月に帰りたくないのよね」

だから？

「協力してくれない？」

はあ・・・じゃあ条件尽きで

「なに？」

今度会って欲しい子がいるんですけど

「そのぐらい別にいいわよ」

じゃあ少しは仲良くしてくださいね？

「私は器が広いわよ」

じゃあ明日連れてくるので〜

「早く来なさいよ、あと明日泊まりにでもきなさい」

へ〜い

・・・・・・・・・・・・・・・・

帰ったら妹紅に怒られ（武術なんか教えなきゃよかった・・）

不平等に怒られる？泣かれる？みたいな事があった

- ・妹紅と輝世姫
- ・仲良くしますように
- ・と最高神にでも祈る
- ・最高神って龍神だったけ？

二十八節 都の人たちって・・・ロリコン？まっさか・・・ねえ？（後書き）

そろそろ修学旅行そして中間テスト・・・か

だるいなあ行くぐらいなら家で小説更新したいなあ・・・

三日間パソコンに触れないで生きてられるかなあ（苦笑）

幽々子編が思い浮かんでしかたがないです・・・

二十九節 あれ？こいつらこんなに仲良かったですか？（前書き）

とりあえず日常編

二十九節 あれ？こいつらこんなに仲良かったですか？

・・・はい〜今輝夜の家です〜

妹紅と一緒に泊りです〜

不平等に泣かれながらも来たぜ・
ちなみに「弧徹ご飯まだなの〜？」

今できるから待って「遅いわよ」

《カンカンカン・・・》

行儀悪いから茶碗を箸で叩くな・

《お〜そ〜い〜》

・・・はあ・・・デザート作ってやるから黙ってくれ・・・

《・・・》

現金だな・・・

「あつちなみに私はぱふえで〜」

輝夜はパフエな・・・

「私はじえらーとで」

妹紅はジェラート・・・葡萄・桃・林檎・何がいい？

「じゃあ林檎で」

へい

「ぱふえにサクサクなのつけてね」

・・・さくさく・・・ワッフルだけ・・・作り方憶えてるけど呼び方
忘れた・・・
・・・というか先に「ご飯食え・・・」

《ちっ・・・》

てめえら息ぴったりだなあ・・・
というか美味しいはずだから食べてよ・・・

「っ・・・悪かったわよ食べるからそんな切なさそうな顔やめなさい」

「ほんとよ・・・その顔だと・・・」

「ええ・・・その顔だと・・・」

何です二人して・・・

《洒落にならないほど現実的》

・・・もうヒットポイントは零です・・・

「にしても美味しいわこれ・・・お酒欲しくなるわ」

「本当に・・・塩が少し効いてるから欲しくなるわね」

子供が飲むものではない！

《弧徹に言われたくないわ》

デザートもう無し！

「現実を受け止めないなんて・・・」

「弧徹にとって現実は厳しすぎたのよ・・・」

私の服離しませんか？・・・

「デザ」

「じゃあ？」

「・・・何この二人の息ピッタリさ・・・」

といつか創るから離しなさい・・・

「作ってくれるのよね」

創ってあげます

「作ってくれるのね？」

創ってあげます

・・・

分かったから・・・作るからそんな捨てられた子犬のような目を二人してしないで・・・

「ちよろいわ」

「甘いわね」

《ちよろ甘ね》

・・・はぁ・・・何で意味不明な所でそろっの・・・？

《デザート》

・・・何時の間に完食したんだ・・・

《デザート》

・・・分かったから・・・作るから待つてよ・・・

《はやく》

・・・はぁ・・・

少年？（少女）溜息&調理中・・・

ほら・・・パフェ（因みに普通パフェの五倍）
「・・・え？」

美味しさは保障する

輝夜は酷く絶望的な顔になった・・・

・・・別にざまあなんて思わない・・・と信じとく

で・・・妹紅にはジェラート（バケツ二杯分）

・・・とりあえず言うが能力で溶けない様に二つともしてある・・・

「・・・うそ・・・」

妹紅はちよつと嬉しそうな顔をした・・・と私が勝手に思っておく

《・・・弧徹・・・？》

残しちや・・・やだよ？

《嫌あああああああ！》

まあ丸一日かけて食った様でしたけどね？
(鬼畜)

二十九節 あれ？こいつらこんなに仲良かったですか？（後書き）

あそこのカフェのパフェって美味しいですよ〜（知って・・・ます？）

私太らない体質なのでいいですが（少しよくない）

その翌日一緒に食べた友達が酷く絶望してました〜

・・・毎日走ってれば一ヶ月でかなり痩せれるけど（私が）

三十節 山（富士山）のぼりです（前書き）

次で永琳出そうかな・・・
でも後一話ぐらい・・・

三十節 山（富士山）のぼりです

はいはい・・・現在どっかで見たことのある山登りです
なに？輝夜と妹紅もいるよ？

ちなみに何故山登りかと言つと

「弧徹・・・まだ・・・着かないの・・・？」

「私・・・もう無理かも・・・」

がんばれるつよ・・・ダイエットでしょう？

「さすがに・・・ここまできついなんて・・・」

「きいていないわよ・・・」

まあ現在そういうことです・・・

簡易説明く・・・

.....

《体重計？》

そうです〜

「なによそれ？」

まあまああまあま

「なにがまあまああまあまなのかききたいんだけど？」

二人ともどうぞこれにお乗りください〜

「まあいいけど」

えっと・・・40・・・48・・・？

・・・次輝夜・・・

「一体何よこれ」

・・・40・・・49・・・???

・・・故障か・・・

「どづしたのよ弧徹？」

「とういかこれ本当に一体何なのよ？」

・・・故障じゃ・・・無いのか・・・（涙）

「ってどうしてないてるのよ!？」

「何か辛いことでもあったの!？」

・・・二人とも・・・よくききなさい・・・

「なによ？改まったりなんかして？」

・・・やせようか？

《死ねっ!》

ぐはあっ!？

（妹紅に0 / 1の速さで三十発腹殴られ）

（輝夜に0 / 01の速さで千発蹴られた）

《ドゴオオオオオ!》

壁を吹っ飛ばして露天市場まで吹っ飛んだ・・・

「あらやだ・・・また痴話喧嘩かしら？」（そこらの主婦A）

「ある意味恐ろしいなお前より・・・」（そこらの夫A）

・・・痴話って・・・どういう意味・・・だっけか・・・？

(意識シャットアウト)

.....

その後に起きてもしばらく無視+私って太った人嫌いなの(独り言)

+暴力振るう人嫌い(ry)

が堪えたらしく・・・(まあ私が太った原因なんですけど)

泣かれたので優しく・・・痩せよう?と言ってあげた

まあ外見特に変わってなかったけど・・・

痩せよう?と言った瞬間首が取れるんじゃない?と言うぐらい縦に二人とも振っていた・・・

・・・別に好意なんか利用していないよ?(鬼畜)

という事で現在・・・

夜です

二人とも疲れたのかぐっすり私が隣にいらなくても寝ております・
(何時も隣で添い寝しないと寝てくれないのです・・・)

・・・何ですかその目は・・別に幼女なんか襲いませんよ

とういか山登りの理由って二つなのですよね
一つがダイエツトと

・・・二つが・・「久しぶりね？弧徹？」

咲耶姫に会いに来ることなのですよね
確か妹紅が不老不死になる原因の一端に関わってるみたいだからな
最終的にやっぱなるかならないかどんな意思でも自分で選ぶべきだ
とおもっからね

「私を無視するなんていい度胸じゃない？」

久しぶりですな〜咲耶姫？

「相変わらず姫って言うのが抜けてないのね？」

それが呼称みたいな物でしょう？

あと姉の石長姫と仲良くしてますか？

「私の前でその話するなんていい度胸じゃない？」

？少なくとも貴方よりも長生きですが？

「まあいいけど？で？何のよう？」

約束して欲しい事がありました」

「何？」

この子に間接的にでも運命を狂わす事をしないでほしいのです

「……まるで私がその子の運命を狂わそうとしてるみたいな言い方ね？」

お願いできますか？

「……はあ……別にあなたの頼みだし構わないわ」

ありがとう

「……ねえ？弧徹？」

なんです？

「あいつ……石長姫に何かされた？」

「……？どういうことですか……」

「あなたの死の概念がおかしい気がするのよ」

……確か石長姫は《不死と不変を扱う程度の能力》だったけ？

「弧徹の場合不老は自分で操ったみたいね？」

「うん・不老で体内の時間を留めてかなりの場合以外死なないって感じかな？」

「じゃあどうして不老不死ではないの？」

それはできなくて・

「貴方の能力なら不老不死どころか存在さえ永遠にできるのに？」

・・・？

「つまりあの姉が関係しているかもしれないってことよ」

・・・でも何で？

「そんなことあの姉しか分からないでしょ？」

だよねえ・・・

「にしてもその子変わってるわね？」

妹紅のこと？

「その子妖力があるわよ？」

嘘！？

・・・そういえば炎を・・・

「私は火を鎮める神だからね・・・その子多分火を扱えると思うよ？」

・・・でも何で妖力何か・・・？

「・・・まさか弧徹気づいてないの？」

・・・へ？

「弧徹かなり力が感じ取れないけどかなりの量がもれてるよ」

？普通洩れてるなら感じられるんじゃないの？

「その所はよく分からないけど多分その子達のようにこのまま弧徹に好意を抱いたなら・・・」

・・・どういうこと？

「多分好意を抱いてると影響が現れると思う」

・・・マジですか・・・

「その子・・・妹紅の妖力も多分それね」

・・・制御できてると思ったのに・・・

「弧徹の場合経験が浅いのよ」

・・・今度時間留めて訓練しなきゃな・・・

「ならこれ以上無い様に早めにしなさい・・・できることなら三日以

内

「なんでですか？」

「恐らくこれ以上となると均衡が崩れていくわよ」

・・・

「一応まだ妹紅じゃないほうの子・・・あら？」

「どうしたのです？」

「いえ・・・」

「まあその子が貴方に好意を本当に抱くと本格的にまずいから」

「わかった・・・」

「私から言えるのはそのぐらいね」

「ありがとう」

「お礼言つのならまた会いにきなさい」

「わかった」

「まっとりあえずその起きてる二人を下山させなさい？」

「は？」

「その二人起きてるわよ？」

・・・輝夜・・・妹紅・・・

《あはははは・・・》

帰るまで走ろうか？

《嫌あああああ！？》

はあゝ

そろそろかなあ

月からの迎えは？

三十節 山（富士山）のぼりです（後書き）

石長姫に木花咲耶姫って口調適当で良かったんだ・

さて次は永琳く・・・か鬼く

・・・P V一万超えたくわくいい・・・さて次は土曜・・・かな？

日曜から修学旅行だからしばらく更新できない・

三日間だから・・・19日かな？その後中間テストく

はあ・・・疲れすぎて体重がげしげし減って行く・

いい加減40台行かなきゃまじめに死んでしまう気が・・・はあく

三十一節 月人との因縁と愛しき人との再会（前編）

私は今大勢の軍隊と共に居ます・・・

今日は十六夜・満月の日・・・つまり輝夜の迎え・それを阻止するためにいます・・・

「弧徹大丈夫なの・・・？妹紅を連れてきて？」

私が何が在ろうとも絶対守ってみせます・・・それに妹紅も最早月人と渡り合える位ですから

「私は寧ろ輝夜と弧徹を守ってみせるわよ？」

「あら？頼もしいわね？」

・・・輝夜はやっぱり暗い顔をしている・・・恐らく月人の勢力が分かっているんだろうな・・・妹紅でも況してや私でも・・・

・・・輝夜？

「え？なに？」

私が絶対守ってやるですよ

「・・・月人は死なないのにとっやっやっやるのよっ？」

輝夜は自重的に笑った・・・

・私が何とかして見せるから・な？

「・・・ばか・・・」

さて・・・妹紅？

「分かってるわ」

・・・月人は死なない・・・そんな事は既に知ってる・・・
だからこそ妹紅に頼んだことがある・・・

それは最優先で輝夜・・・そして来るはずの永琳を逃がすということ
輝夜の話ではどうやら永琳は私の事を忘れていているらしい・・・
まるで地球に住んでいた時の記憶が全て抜け落ちたように・・・

だから永琳は輝夜を保護に掛かるはず・・・
だが恐らく私が居たとしても月人の兵器は想像以上に強く負ける
だからこそ私が少しでも月人を邪魔し時間稼ぎをする

そして妹紅が二人を連れて逃げる
ここまでが輝夜に聞かせてなく妹紅に聞かせた内容
けれどこの先からが二人に話せない内容

はつきり言っただけで諦めるなんて億が一に思っ
ていない

あの三人を逃がし私の能力によつての被害が及ばないようにする
私は自分について大体把握してきた

それは少年時と女性時で判別して攻撃ができるか無差別か
そして一番の心配がこれ以外にあるらしい状態

仮にでも女性時にあの三人に危機があるようなことがあつたりでも
したら出てくる

それだけだがかなり危険と分かる状態これを危惧し逃げてもらう
これだけ

さて・・・そろそろかなあ

そう思ったらいきなり夜の空から眩しい光を出しながら来る飛行船が
周りを見たらどうやら兵士は動けないようだ・・・
面倒なので全員を遠い森へと転送させた

「来たわね・・・」

・・・妹紅・・・？

「・・・分かってるわよ・・・」

・・・そして飛行船から誰かが出てきた・・・

「姫！ご無事ですか！」

・・・

「ええ・・・大丈夫よ永琳・・・それよりも・・・」

「大丈夫です抜かりはありません」

？・・・突如飛行船の中から爆発の音がした・・・

・・・妹紅！

「わかってるわよ！」

妹紅には予め身体能力が上がるブレスレッドを渡してあり・・・
二人を抱えて行ってもらう・・・はずだった・・・

だが首をだらんとしたまま動かない……

もこ……う？

名前を呼んでも動かない……

いや……いやあああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！

．．．．．なんで？

なんで？なんで？なんで？

なんで妹紅は？

どうして？

どうして死んでしまったの？

．．．．．私のせい．．．？

このぐらい危険だって分かってたのにどうしてここにさせたの．．．
．．．？

別に私だけでもよかった．．．．．？

私は．．．．．妹紅を．．．殺した．．．．．？

私が・・・！

ああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

どうすねばいいの？

私は・・・・・・・・死ぬ？

そっか・・・・・・・・死ねばいいんだ・・・

どうやればいいのか？

・・・もこうを殺した奴等を殺せばころしてくれるかな？

あれ？でも私が殺したのにどうしてあいつ等が殺したの？

まあいいや・・・殺して行けば死ねるんだ・・・

どうやって死ぬんだろう？

あいつ等が殺してくれるんだっけ？

・・・もつどうだっていいや・・・

どうやって殺そうかな？

裂く？壊す？干切る？・・・

全部やればいいや

いや寧ろ悪運というべきか・

・・・呼吸がすっかりと正常になり戻ってきた

でも魂自体が傷つきかなりまだ危ない状態だろう

これだと永琳の薬も効き目がかなり薄く効果が無い

やっぱりこれだと弧徹が必要になるが今の状態だと逆効果だろうか

ら元に戻るまでどうしようもない

・・・どうやって止めればいいのか私には分からない・・・

・・・もう一度思い直してみる・・・

確か弧徹は妹紅が傷つくまで正常だったはず・・・

・・・やっぱり一つしか方法は無い・・・

確立は五分五分だろうけどこれしかない

私は思いつきり弧徹に向かって叫んだ

・・・

・・・何をやってるかな・・・私は・・・

結局こんなことして逃げてるだけ・・・

でももうどうすればいいかなんて分からない・・・

そのとき声が聞こえた気がした・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

この声は・・・輝夜？

でもなんていつてるのか分からない・・・

「子・・・・・・・・・・き・・・・・・・・・・！！？」

・・・・・・・・

「弧徹聞こえているなら出てきなさい！

貴方がこのまま出てこないと妹紅が死ぬのよ！

いい加減にしなさいよ！このままだと・・・・・・・・！！

妹紅が・・・・・・・・！死んじゃうのよ・・・・・・・・！！

お願いだから・・・・・・・・！！私の・・・・・・・・！！

初めての・・・・・・・・！！友達なんだから・・・・・・・・！！

殺さないでよ・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

・・・・・・私は本当に何やってんのかなあ？

輝夜泣かして・・・・・・・・

いい加減抵抗することにした・・・

何時までも逃げてるのは私の生に合わないしな

三十一節 月人との因縁と愛しき人との再会（前編）（後書き）

・・・なんかおかしい気が・・・というか妹紅がああああ！？

三十二節 月人との因縁と愛しき人との再会（中篇）（前書き）

帰還し体重また減った（笑）

さて・・主人公の台詞いいかげん「やろうかな」

というかももう主人公の過去明かしたい（忘れそうです・・）

「最初から戦つつもりじゃない？」

貴方もそのつもりでしょう？

「当たり前よ！」

《全斬無斬！》

二人が同時に同じ技を出し空間が抉れていく

「さつさと消えなさい！」

体・思考が同じだったから大体の技は防ぎきれぬがやはり女性の方が格段と強い……！

《ガガガガガ！》

高速で何度も刀の一番脆い所を的確に狙ってくるため刀にもう輝が入ってくるそれを能力で直して行きながらも攻撃をして行く

・ ・ ・ やっぱり刀は剣より切れ味が在るけどどうしても強度がない・
元々刀は威力自体を受け流すものだしね・

「貴方は結局誰かを傷つけているのよ？」

・・・んなこととづくに分かつてる

お互いに戦いながらも話す・・・

「だったら何で？貴方は・・・私は死にたい・・・消えたい・・・そう願ったのに！」

・・・私はもう・・・そんな自分勝手な理由で誰かを失ったりしてしまうのは嫌なんだよ！

「それだって貴方の勝手でしょう！？」

そうだよ！結局私は・・・！自分は誰かの為になんじやない！自分のエゴだ！

「だったら・・・！」

だからこそ自分は自分の決めたところをいくんだよ！

善意が正道なら私はならない！

悪意が外道なら私はやらない！

だから私は邪道の偽善者を選んでやるよ！

それが自分の決めた道だ！

「うぐっ！？」

そして相手・・・私が揺らいだ所を思いつきり刀を突き刺した・・・

さつきから弧徹の動きが止まったままだった・
いや・寧ろ全ての時間が止まっているようだった・
まるで不気味で風が吹かなく・生命さえ止まっているようだった・

そこで妙に永琳がおかしいことに気がついた
まるで何か見えないものに恐怖をいだくような・

「……？永琳？どうかしたの？妹紅に何かあったかしら？」

「……姫様……」

「永琳？」

やはりどこかおかしい・

「……私はどこかで・あの者を見たことがあるような気がします・
……」

「え!？」

もしかして思い出したのかしら？

元々永琳は私と最初に会った頃は弧徹を覚えていた・
だけど時が経つにつれまるでその記憶が抜け落ちて行くように弧
徹を忘れて行った

そして最後にはまるで話しに出てこなくなりさらには弧徹が写った

写真

もはや名前さえ聞いただけでも拒絶反応が起きるという状態だった
そして今弧徹が目の前にいる

恐らく現かなり危ない状況だろう。いつ永琳が拒絶反応を起こす
か分からない

「私は……どうしてでしょうか？あの方をみてみると……」

「……永琳……」

永琳は弧徹の事を憶えていてとき毎日それが日常のように何か神に
祈っていた

神を封印紛いの事をした月人としてはおかしいかもしれないがそれ
でも祈っていた

恐らく弧徹が生きているそんな事を願っていたのだろう……

それは弧徹を殺した……。いや寧ろ殺すために作られたものを自ら
が関与した事への罪滅ぼし

軽いかもしれないが永琳はあらゆる優遇を拒否し人並みの生活さえ
最初は拒んだ位らしい

それぐらいしかできない永琳はひたすら自分を恨んだ

ここまでになればそれは好きと言う感情だけではなく愛までいくだ
ろう

けれど永琳は弧徹を愛することさえも拒みそして弧徹の事を忘却の彼
方まで消し去った

その位永琳は弧徹のことが好きと言う感情を抱いていた

「姫様……私は……！」

……多分私は……永琳の話していたことが羨ましかったんだと思
う……

月にいた時全てがつまらなかったそんな時永琳の話聞き地上とい

うのを知ってみたくなった

本当のところは弧徹という人物に会いたいその一心だったんだと思う
そして地上に来れたとき・弧徹に会えた時はじめて退屈なんて思
わなかった

地上で拾ってくれた翁夫婦は私に欲の目でしか見ていなかった

私は愛なんて存在しないと思った

私に求婚に来る人は体しか見ていなかった

私はこの地上がどうして月人の監獄と呼ばれているのか理解した

だけど弧徹に会えたそれだけに退屈なんて感じなくて

弧徹が連れてきてくれた妹紅とライバルのような関係になったがそ
れでも楽しいと感じた

・だから永琳が少し恨めしかったんだと思う・

「姫様・・・私は弧徹を」

「言わないで」

「・・・」

「今は妹紅の看病を弧徹が帰って来るまでやるわよ」

「・・・はい」

三十二節 月人との因縁と愛しき人との再会（中篇）（後書き）

なんかだからなら書いてたら大分変更してた・

しかも三部構成って・・・あれ？

永琳と感動の再開果たして終わるつもりが・・・

あれえ？

三十三節 月人との因縁と愛しき人との再会（下編）（前書き）

・何？何で（下編）なのか？いや、妹紅の方も書こう
かな、なんて

（下編+）みたいな？あはははは
それではどぞ（逃げ）

三十三節 月人との因縁と愛しき人との再会（下編）

.....

.....どうしてか三人のどこに行きたくないと思ったのは逃げかな

•

輝夜！妹紅は！？

「・・・取りあえず外傷はもう無いけど魂自体が傷ついているわ・・・そのせいで永琳の薬が効きずらいのよ・・・弧徹の能力で何とかできないかしら・・・？」

分かった・・・やってみる

とりあえず《視》で魂自体がどれほど傷ついているか・・・次に《具現化》でドキュメントを出し・・・

・・・やっぱり妖力が追加されてる・・・

やっぱり・・・私の傍にいる奴は皆・・・不幸になるのかな・・・

・
・
- - - - -
《ドキュメント操作》

・
・
・
・
・
《魂・・・補強》

・
・
・
《完了》

………《思い………好意………弧徹》

………《………消去しますか？》

………はあ………やっぱり自分勝手だし卑怯だよなあこんなことして相
手の気持ちから逃げるなんて

《NO・CLS》

《ドキュメント操作………終了》

「ぐっ!?!?………げほっげほっ!?!?」

「妹紅………しばらく安静にしてなさい」

「か・・・輝夜・・・？」

「永琳・・・薬を頂戴」

「はい・・・」

「ほらこれ吞んで」

「うん・・・ありがとう」

「・・・おやすみ」

「へ？・・・」

《ドサツ・・・》

！？輝夜何を・・・？

《ドンッ・・・》

そういつた途端地面に思いっきり叩きつけられた

輝夜・・・？

「何をばっつちの台詞よー！」

えっ・・・？

「今・・・妹紅に何しようとしたのよ・・・！？」

何って・・・

「私達をなめないで・・・もう何万と生きている私達を騙せるとでも思った!？」

だから何が・・・!

「妹紅に・・・!貴方に向けられてる好意を消そうとしたでしょう!？」

なっ・・・!?

「弧徹にしか分からない物だとも思っていたのかしら・・・!？」

・・・

「ふざけないでよ!弧徹の過去に何が逢ったかなんて知らないわよ・

でも・・・!それでもそんなことをする奴なの!?!あんたは!」

消してはいないって・・・

「でも消そうとしたんでしょ!?!」

・・・

「あなたにとって好意はそんなに迷惑!?!私達がそんなに邪魔!?!」

ちがっ・・・!

「じゃあ何！？少なくとも私達は貴方の外見とかそんなものをすきになつたんじゃない！」

永琳だつて貴方をずっと好きだつたそれさえ愛しているくらい！
それなのに気づかない振り！？相手が意思を伝えたら好意を消す！？
ふざけないでよ！私達は貴方に本気で好きになつたのにどうして！」

輝夜………

「私達はそんな弧徹を好きになつたんじゃない！わたしは……わたしは……！」

……私は………どうしてこんなことをしてしまうのかな……？
この世界に来て……皆……好意を向けてくれた娘にすっかり気持ち
を返さないでうやむやにして
まるで気持ちをもてあそぶようにしていた……

自分の事を本気で好きでいてくれたのにそれに気付いていたのに……
……私はほんと馬鹿ですね……
相手の好意に恐れて……それじゃあ何時まで経つても私は変われ
ないじゃないですか……
もうあの時の私じゃない……

………輝夜は泣いていた……

………ああもう………！

「へ………？」

思いつきり輝夜を抱きしめた

悪い……輝夜……

次に永琳の所へいき・・・

輝夜と同じように抱きしめ・・・

次に会う時はまたご飯を作ってくださいね

「弧徹・・・？」

そして離れた・・・

今の私にはこれがせめてです・・・

だから少し時間をください

絶対に会う時には気持ちに答えて見せるから

ごめん・・・

そういつてから妹紅を持ち上げ転移した

.....

三十三節 月人との因縁と愛しき人との再会（下編）（後書き）

く永琳の発言が明らかに少ないく

く話に出さないはずだった話を書くくくく

それでも不思議と後悔できないく

次はく妹紅との旅く（二話）

そして再開く

三十四節 旅々でなく食事々（前書き）

この話の前に少し4話程度付けた事です
もこたんいんしたお！の前に着きますのでしばらくそこに話が繋が
ってないかになります〜ご承知を

三十四節 旅でなく食事

へいゝ弧徹ですゝ

「はい弧徹今日は焼き鳥よ」

・・・うん・・・美味しそうだね・・・

「何よ？焼き鳥嫌いじゃないでしょ？」

・・・そりゃあ嫌いじゃないよ？

「ならいいじゃない」

・・・一年間同じじゃ無かったらねえ！？

「じゃあ次は兎肉でも食べる？」

兎の数え方言えたら良いですよ・・・

「一羽・二羽」

・・・焼き鳥美味しいね！

「まさか弧徹・・・兎食べたこと無いの？」

私は人間だ！

「貴族なら誰でも食べるわよ？」

貴族が兎何か食ってんじゃねえ!?

「何かとは何よ?」

兎は食い物じゃない!

「高級!食材よ?」

・・・妖怪兎って美味しいのかな・・・?

「美味しいって言葉に目が無いわね弧徹」

唯一の娯楽ですから

「じゃあ・・・」

そう言った途端に

「山火事でも起こそうかしら?」

右手に炎を・・・

って駄目だよ!?

「今までだってそうして来たわよ?」

ここ一年の小火はお前のせいか!

「山が燃えなかったのは弧徹のお陰だったんだ?」

はぁ・・・

因みにどうして妹紅といるかと言うと・・・
力が私と同じく制御ができていないので・・・私が妹紅の好意を消
そうとしたことを隠して修行してます・・・だけど制御が完璧になっ
て妖怪に引けを取らなくなって自立できるようになったらすっかり
私の記憶を消さずに私がやろうとしたこと・・・そして私の過去を話
して・・・許してもらおうとかじゃなくてしっかり全てを受け止め
て貰いそして・・・後は妹紅がどうするか判断するだけです・・・
それなのにまた自分は最低で・・・
そんな時が来ないで欲しいなんて思っちゃってるんですけどね・・・
・・・

「弧徹？」

何ですか？

「いや・・・なんか暗い顔してたから・・・」

・・・気のせい気のせい！

「ならいいんだけど・・・」

ほら兎か鳥の狩りにでも行きましょっ？

「そっね」

三十四節 旅くでなく食事く（後書き）

・・・視寺家絵名く尾居く

さて・・と次は由梨かてゐになる兎かミステリアになる梟かそれと
も妹紅との日常と修行になる戦闘くの選択肢く

三十五節 再開と嫉妬・・・止めてください・・・真面目に（前書き）

さあ神編終了です！そして由梨との再会！話はどツかに追加！

三十五節 再開と嫉妬・・・止めてください・・・真面目に

「妹紅よりも私の方が弧徹の役に立ちますし」

「何千年も会ってない由梨よりは私のほうが弧徹にとって役に立つから」

《ギリギリギリ・・・》

はい、弧徹です、現在懐かしの由梨と再会・・・そんなでもって妹紅との争い

・・・私のせいですね！はい！

「こうなったら・・・」

「そうね？こうなったら」

・・・こっち視んな

「《弧徹に決めてもらいましょう！》」

・・・どちらも私にとって大切です！

・・・そこ！頼染めない！

「弧徹は更に誑しになってきたね」

「やっぱり昔からなんだ」

妹紅・・・やっぱりって何ですか

「《そのままの意味でしょう?》」

・・・二人で声を揃えて言わなくたって良いじゃないですか!

「だって・・・」

「ねえ?」

あう〜・・・

「取り敢えずご飯でも作りましょうか?夜中ですし」

「それならもう蓄えが無いわよ?」

じゃあ鼻に兎でも狩りに行きますか?

「兎はまだしも鼻って食べれましたっけ?」

「一応いつも焼き鳥として食べてるから大丈夫でしょ?」

・・・焼き鳥って本当なら鶏とかじゃ無かったけ?

「細かい事は気にしない」

「細かい事なのかな?」

大雑把に生きましょう

「まあいざと成ったら妖怪でも食べればいい話ですよね」

「妖怪って食べれるの？」

「形が分らなくなるほど刻んで鍋とかにしてしまえば美味しいよ？」

「・・・形が分らなくなるほどって・・・？」

要するに見た目が 《ゴスツ！》がはっ！？

「弧徹もその位刻んじやえば食べれるかな？」

「寧ろそのままの方が？」

はいそこ自粛しろ！

「《冗談冗談》」

目がマジです！

「まあこれでもね？」

「はいこれ」

二人の手には生きた梟と兎が・
何時の間か？

「《何時かの間に》」

・・・所でやけに小さいねその梟と兎・
大体手の平に乗っかる位・・・

「《やっぱり?》」

思ったのなら連れて来るなです

「《可變くて…つい?》」

さっきから息ピッタリですね?

「《気のせい気のせい》」

…さてこの…一羽と一羽?どっちですか?
これだと鍋にもなりませんよ?

「《じーーーーー…》」

…なんです二人して

「《じーーーーー…》」

じーーーーを声に出すなです

「………」

…飼う?

「《ハイ!》」

じゃあ名前は?

「てゐる!」「ミステリア!」

……由来は?

「……」

適当ですか?

「……えー……」

「……ん……」

……まあ良いんじゃないですか?

「《ですよね!》」

ちゃんと世話しなさいよ?

「《……はい》」

……まあいいですけど……

とりあえず兎と梟・もといてるとミステリアが何故かこちらを見
続けているのでお腹が空いたと判断してご飯を取りに行きましょう
か?

……

三十六節 妖怪化とアクセサリ・首輪じゃないですよ？(前書き)

さて・・・東方キャラクターに出すか

三十六節 妖怪化とアクセスリ・首輪じゃないですよ？

《ユサユサ・・・》

むじゅう・・・すすじゅう・・・

《バサバサ・・・》

じゅうじゅう・・・すすじゅう・・・

《ピョンッ・・・》 《バサバサッ・・・》

・・・ん？

《ズゲシッ！》

グハッ！？

「早く起きるウサ」

「お腹空きました」

・・・ザンネンワタシノボウケンハオワツテシマッタ！

《ピョンッ》 《バサバサッ》

《ズゲシッ！》

グハア！？

永遠ル〜プ

.....

「弧徹早くご飯作るウサ」

ウサウサ煩い・・・

「お腹空きました〜」

梟って食えるらしいぞ？

「そんな事したら主人が黙ってない筈ウサよ？」

別に妹紅と由梨は怖くない！というか何で二人？共擬人化？してる
ですか・・・

「？弧徹が妖力駄々漏れにしてるからだね」

「お陰で妖怪になっちゃった」

.....妖力が駄々漏れ・・・？

(確かてゐは兎で大体千年位生きて妖怪化・ミステリアは・・・梟として生き残ったから妖怪化？
見たいな感じだったはず・・・)

「まあ能力は微妙な所だけどね」

てゐ急にウサウサ言わなくなったね？

「弧徹が嫌なら適当に言っさ」

・・・別に良いよウサウサ言っただて・・・

「ならそうするウサ」

「それよりもその妖力いい加減仕舞わないとこころ辺一体が妖怪化しちゃうよ？」

・・・あ・・・今やる

・・・《行使・外界への力が付く物を静止》

・・・完了

「まあもう遅いウサね」

「妖力所か霊力・神力・辺りが完璧に洩れてたから・・・」

・・・何でそんなに？というかさっきから気になったんですが妹紅と由梨は？

「そこらの裂け目に入っちゃったウサ」

「あれは結局何処に通じてるか分らないけど」

裂け目？というか止めてよ

「その時は妖怪になんてなっていなかったウサ」

「というか裂け目に吸い込まれたって感じかな」

吸い込まれた？

「裂け目が消えた後に弧徹からあらゆる力が駄々洩れになったウサ」

「数秒で私達が妖怪化したね」

「・・・それでお腹空いたって気楽だな？」

「それは置いといて二人を助けなくて良いウサ？」

裂け目って目がたくさん在ったなら別に良し

「真っ赤だったよ血のように」

「・・・二人とも留守番よろしく」

「大丈夫ウサ？」

「私達も行きましようか？」

何とか成るでしょ・・・後これ
てゐには幸運のペンダントね？

「幸運ってどうなんだか」

ミスティアは・・・帽子ね

「羽が付いた帽子って」

まあまあ

「とりあえず待ってるウサ・・・だから」

「早めに戻って来て下さいよ」

善処しますよ

《行使・この場にて次元操作》

「逝ってらっしゃいウサ」

「気をつけてくださいね」

気楽だなあつと

.....

三十六節 妖怪化とアクセサリ・首輪じゃないですよ？（後書き）

血のように真つ赤く教会く赤い満月く

ハイそこ！短い言わない！話が分らない言わない！

自覚してるからく・・・

三十七節 フリド・シエシヨ?とりあえず色々相談(前書き)

はふう・・・さうさと終わらして幽々子の処まで・・・十話位で行けると良いな

三十七節 ブラド・ツェペシュ?とりあえず色々相談

さてつと・次元の裂け目に落ちた訳なのですが・・・周りが真っ赤なんですよね

そんなでもって羽を生やした子供がたくさん

・・・紅霧異変・・・?・・・でも目の前に十字架が無い教会?が在るし・・・

・・・確かレミアアとフランは・・・逆算して五百年ほど前に生まれた・・・はず

・・・でも今思うとフランって495年部屋に幽閉されたらしいけどそれって495年以上生きていて・・・

つまり時系列的に五百年以上前だけど・・・千年前は無いはずだから・・・

タイムスリップ・・・かな?

・・・これは流石に不味いな・・・さっさと二人を連れ戻さなきゃここからの未来が狂うだろうし

取り敢えず情報収集かな?

・・・それよりも重要な奴・・・発見かな?

.....

「貴方見ない顔ね?」

・・・運命ってどう思いますか?

「私にとっては見通せるものよ」

「……そうかい」

「で？さっさと答えなさい 人間」

《ジャキツ……！》

人と話すときは対等であれって知らないの？

「残念だけど……私は吸血鬼だから関係ないわ」

「……私の運命って何でしょうね？レミリア？」

「私に殺されずに生き残る……ね……名前教えたかしら？」

私は何だっ て 視る事ができますからね

「そう……で？ここに何の用かしら？ここは吸血鬼のみがいる教会よ？」

吸血鬼が教会ってどうなんだ？

「妖怪であれ吸血鬼であれ弱点がないと人間共も困るでしょう？」

皮肉だねえ

「ここではハンターなんてのも居るわよ」

それが手を抜かれて相手されてるなんてねえ？

「人間は常に何かの上に居たい者なのよ」

幼いながらも達してるね？

「私の親はそのハンターに殺されてしまったのよ」

？不意打ちか？

「真つ向勝負よ」

おかしい事もあるな？

「人間が異端な物に手を触れてしまったからよ」

異端？

「神との契約をね」

神ねえ？

「それよりも貴方の憑人は教会に居るわよ」

そーかい

「興味無さげだねえ？」

それよりもフランドールに興味があるかな？

「あの娘はそこ等で遊んでいるわよ?」

能力を知っててか?

「まだ無いから大丈夫よ」

達観してるねえ

「貴方もでしょう?」

《フフツ》 《ハハツ》

「それで? 貴方と会ってから一時間かしら? 貴方は此れから如何するの?」

運命を操れる御方が何を言うのやら?

「そうね? 愚問だったわ」

処で年いくつ?

「20よ」

若いねえ?

「そういえば名前聞いてなかったわね」

伯柳弧徹ですよ

「そう・・・じゃあこれから人間が来るまでの5年間をよろしくね」

いやいや六年でしょう？フランも合わせて

「貴方はつくづく人が良いわね」

人じゃありませんから

「悲しい事をいうのね？あの二人が聞いたら悲しむわよ」

それは運命？

「これだけは揺ぎ無い運命よ」

残念

「取り敢えずあの二人は五日で分ったけど料理が出来ないから協力
してくれる？」

その位なら楽勝

「ならいいわ」

大変だねえここを纏める方は

「そうね？」

じゃあ暫く世話になりますね？レミリア

「この娘等を傷付けない限りは安心していいわよ」

怖いねえ

「貴方には言われなくなさそうな台詞ね」

同感

《フッフツ》 《ハハハツ》

.....

三十七節 フリド・ツェペシュ?とりあえず色々相談(後書き)

はふう・・・何か話がおかしい・・・何故でしょうね？

本来書こうとしていた話と変わってしまいました

気分で書くところになってしまつのですね・・・はふう・・・首痛い

三十八節 お世話と吸血鬼で無邪気さを（前書き）

・・・昨日は更新不可能申し訳ございません

・・・まあまあ睨まないで下さいですよ

・・・取り敢えずここは五話位で終了して聖連船メンバーを五話位で幽々子へ！

・・・聖連船の話が全く思い浮かばないですけどね！

・・・どうしよっか？

三十八節 お世話と吸血鬼で無邪気さを

「あはは！お兄さん顔が変〜」

ほれはふらんあほほおふはってるはらはよ〜

（それはフランが頬を引つ張っているからだよ〜）

「うう・・・弧徹がフランに取られてる」

「あう・・・フランちゃんが妬ましいです」

「たった15歳に嫉妬してどうするのよ・・・」

ほら〜ほんなほといっへないへひっはりひょうひふる

（ほら〜そんな事言っていないでしっかり料理する）

「別に料理位いいでしょ」

「そうよ！女が料理なんて古いわ！」

それは育児放棄理論か？というかそれ言うなら他でしっかり働け・・・
今の所全部私が家事をやってるんですからね？

「だって・・・」

「ねえ？」

だっても何も無いです！そんなだと・・・

「弧徹？」

「どろしたの急に黙って?」

・・・私家事が出来る女の方って憧れちゃうな〜素敵ですよ〜好きになっちゃうそうですよ〜

(棒読み)

「掃除してくる!」

「私は洗濯して来る!」

行ってらっしゃい〜

「貴方って・・・」

「お兄さんって鬼畜?鬼畜?」

ヒモかな?

「自分で言わないでよ・・・というかヒモはあの娘達な気が」

さてっと今日の晚餐はニンニク炒めの納豆入り!

「何で晚餐!?」

「お姉様?寧ろメニュー気にしようよ」

冗談はさて置き晩御飯はブリッドキャベツにブリッドスープにブリッドパンです?

「野菜炒めにコーンスープにパンね？どうせだからワインも開けようかしら？」

フラン「最近レミリアが苛めます」

「いいいいい」

「このやり取りが何回目だと思ってるのよ・・・」

「というかワイン駄目！紅茶入れてあげるから！」

「あの二人は焼酎飲んでたわよ？」

後でユツクリ話し合わなきゃな

「焼酎は舌がピリピリした」

「フラン？それは多分シャンパンよ」

二人ともで出来なさい！少し彼岸まで渡りましょう！映姫様に怒られにね

「それって俗に言う死じゃないかしら？」

娘のためなら已む無し

「どこがよ！不老不死じゃないでしょう？」

不老だから逝けるでしょう

「逝っちゃ駄目でしょう・・・ってフランも止めなさい！」

「そうだよ！私弧徹の娘じゃないよ」

「そうそうって違うわ！」

へ？マジで自分の娘だったのかフラン？

「そうじゃないわよ」

まあいい加減作るか

「ぜえぜえ・・・」

「お姉様大丈夫？」

ほらレミリアご飯になったら呼んであげるから休んだら？

「そうするわ・・・」

「お休みお姉様」

.....

さてっど今日は？

「お姉さまの誕生日！」

ということでしたいつも以上に呆けて見ました

「お姉様グツタリ」

「弧徹？今レミリアが疲れた様に部屋に入ってたけど？」

・・・妹紅？レミリアの部屋掃除してたの？

「そうだけど？」

・・・嫌な予感が・・・しない訳でもない

「ちよつと弧徹？私がやらないのは面倒なだけだからね？」

はいはい

「弧徹、掃除終わったよ・・・」

どうしたの？何か疲れ切ってるけど

「なんか吸血鬼の娘達に弧徹の事を聞かれて・・・」

それで？

「逃げたら揉みくちやにされて・・・」

はあ・・・

「一人が生き残って」

・・・嫌待て？その間に何が有った？

「まあ今度ね？」

「お兄様？早く準備準備」

ああそうそう・・・レミリアって20で良いんですよ

「？お姉さまは今日で20だよ？」

・・・危ないなあ蝋燭の本数間違いそうだったじゃないですか

「お兄様？私達って何をすればいいの？」

じゃあ皆集合させて飾りつけをよろしくね？私はケーキと料理・・・
ワインも開けて上げるかな

「シャンパンも〜」

はいはい・・・子供用の作って上げるから

「私達は何すればいいの？」

由梨達は・・・飾り付けを手伝ってやって

「分ったわ」

「じゃあ行きましょつか」

それじゃあバスステーパーティーまであと二時間！さっさとやりま
すか！

《オーーーーー！》

.....

三十八節 お世話と吸血鬼で無邪気さを（後書き）

さてさてっと・・・後何話これに使おうか？（矛盾？何それ？おいしいの？）

・・・次にオリ吸血鬼でも
やっぱ7話位・・・ね？

三十九節 楽しさと狂った運命で

さてつと・・・この教会にいる吸血鬼全員分の料理完了！

・・・だけど何かやけに静かなあ・・・まだ一時間有るから良いけど

「弧徹もついい？」

まだ一時間あるよ由梨？

「お兄様お腹すいた・・・」

・・・まあ別にいいか・・・今日の昼は料理が少なめだったし

「じゃあ私皆呼んでくるわ」

じゃあ妹紅お願いね〜

・・・

・・・遅い・・・

「うう・・・お兄様お腹すいた・・・」

もう少し待ってねフラン

「でももう妹紅が行ってから三十分も掛かってるよ？」

・・・見に行った方が良いかな？

「お姉様が居る処に？」

そりゃあね

「どっち道ここに戻ってくるし三人で行こうか」

だね

「お肉・・・」

はいはい・・・戻ってきたらたくさん食べさせてあげるから

「お兄様が？」

まあ別にいいよ

「私も！」

はいはい

「じゃあ早くいじ〜」

そんなに急ぐと転ぶよ

「大丈夫だって 《ピタンッ!》」

ちよっ! フラン大丈夫か!

「痛い・・・」

「そんなに急ぐからよ・・・」

「たたく・・・立てる?」

「痛くて立てない・・・」

挫いたか・・・しゃあなし・・・

《ヒョイッ》

「へ?」

ほらちゃんと腕組まないと落ちるよ?

「あゝずるいな〜フランちゃんだけおんぶなんて〜」

はいはい

「えへへ・・・お兄様の体あったかいね」

あんまり力入れすぎて首絞めるなよ？

「はい」

「むっ・・・」

今度挫いたらね？

「はい・・・」

じゃあさっさと行きますかね？

.....

《コンコンッ》

レミリアく妹紅く居ない？

「返事が無いね？」

「鍵はお姉様掛けないから入っちゃえば？」

そうしますか？」

《ガチャツ・・・》

「真っ暗だね。」

「何も見えない・・・」

・・・《具現化・行使・供給の要らないライト》

《パンツ！パンツ！パパンツ！》

『フラン！ハッピーバースデー！』

「へ？」

・・・はい？

「全く・・・フランったら何時まで待たせる気よ？お陰でお腹が空きすぎて疲れたわよ」

「へ？あれ？お姉様？」

・・・まさかね・・・？

「何よその反応は？」

「え？だって今日……お姉様の誕生日だよ？」

「……貴方も誕生日よ……？」

「……姉妹揃って自分の誕生日を忘れて同じ日にやるうとした為それぞれ人数が違ったと……」

「妹紅？何で貴方もそっちにいるのよ」

「いや……こっちに来たらそれを教えられて……行くにいけない」

『はあ……』

「……どうやら他の娘達は知っていたらしい……」

「まあ……せっかくだしこの部屋で二人分やっちゃんおつか？」

だね？

「じゃああつちにある料理とか全部弧徹持ってきて〜」

お〜《行使・机と料理を転移》つと

じゃあレミリアにフランおめでとう〜

「じゃあワイン頂戴？」

別にいいよ？赤ワインね〜

「私も〜」

フランはシャンパンで勘弁〜

「私も何か頂戴？」

・ 処で妹紅にクラッカーの作り方なんか教えたっけ？

「前に計画書に書いてあったわよ？」

・ 火の調整とかよくできたね

「それは由梨と協力してね」

がんばったね？

「じゃあ褒めて〜」

はいはい・・・《ぽんぽんっ・・・》えらいえらい

「あ〜今度は妹紅にもずるい」

はいはいって・・・うん？レミリア？

レミリアはどうしてかガーデンにいた

・・・行きますか・・・ね

「あれ？お兄様どこに行くの？」

少し酔ったから夜風に当たってくるよ

「わかった」

.....

.....

「え・・・！？何時の間に？」

何時かに間に〜

「・・・貴方って本当に変わってるわね？」

そうかな？

「だって今まで運命が見えない者は見たことあつたけど・・・
それが見えても三通りだけなんて見たこと無いもの」

三通りね・・・？じゃあ現在の私の運命は？

「今から3時間後に死ぬか・・・元に戻るか・・・ね」

・・・後一つは？

「・・・その位自分で視たらどう？」

遠慮しておこうか

「じゃあ取り敢えずこの今から起こる狂った運命はどうすればいい
のかしら？」

そうだねえ？じゃあ変えてしまいたいでしょうか？

「もう少しいたら？」

じゃあ・・・壊してしまいたいでしょうか

「そうね？それが貴方らしいと思うわね」

じゃあ私の運命は？

「存在しない運命ね」

だったら存在させてしまいませんか

テラスから見える先の方には人間の軍らしき物が向かってきている

「そう答えると思ってたわ」

じゃあ・・・一緒に来ますか？

「それも想定済み」

ならとつとと終わらしてパーティーの続きですね？

「ええ・・・まだ飲み足りないわね」

じゃあいきますか！

.....

三十九節 楽しさと狂った運命で（後書き）

えっと、後四話で終了させようかなあ

四十節 記憶と殺しと決意の血で

「殺せ！吸血鬼共に味方する者を殺せ！異端者を死に晒せ！」

煩いんだよ

《霧生刀》

一気に殺すため刀身3mという刀といえるか分らない物で粒子レベルに刻んでいく

「ぎゃああああああ！？」

・・・こいつら人間止めてるよ・・・

だって幾ら粒子レベルで刻んでも体の破片を集め三秒程度で一気に戻る・・・

「弧徹・・・幾らなんでもきりが無いわ・・・」

・・・レミア・・・やばくなったら私を盾にしても・・・囧にしても逃げてあいつ等を守って・・・

「冗談じゃないわね」

・・・本気ですがね・・・

「弧徹が死んだらフランがずっと泣いて能力以前の引きこもりになるわよ」

そりゃあ困る

「だったらこいつ等を再生しないような考え無い訳？」

難しい《氷霧・垂桜》

「だったら死ぬかしら？《スピア・ザ・グングニル》」

じゃあ一気に粒子レベルで駄目なら素粒子か原子レベルの破壊でもする？

それやったら私達も死ぬかもだけど

「それも良いかも知れないわね」

でも若い娘は巻き添えにしちゃね

「私も爺に巻き添え食らうのもね」

酷いですね《風雪・水刹》

「事実よ《レッドマジック》」

・・・さつきから大技ばっかりなのに減らないな人間しぶといな

「貴方も元は人間でしょうに」

ふふっ そんな事は私の壁でさえ在りません

「・・・じゃあその人間が私達の中に入り込んでいたら・・・どうなるのかしらね？」

何それ？冗談にしては面白く

《グチユリ・・・》・・・へ・・・

・？

「冗談ではなく本当だったら　面白かったかしら？」

そこには・・・レミリアでは無く・・・女の人間が立っていた
そして銀色のナイフを私の心臓へと背中に差し込んでいた
普通のナイフなら届かなかったがそれは少し長めで・・・十分に私
の心臓を突き抜けていた

ゲホツ・・・誰・・・ですか・・・貴方・・・は・・・

「貴方に何か名乗る名前は無いわよ」

・・・何時の・・・間に・・・レミリアと・・・代わって・・・い
た・・・？

「私はね？そこらの下っ端のゾンビの人間と違って能力もちなのよ」

・・・《代獲る程度の能力》・・・ね・・・

「・・・貴方に最後にいいことを教えてあげるわ」

・・・なに・・・です・・・か・・・

「私以外にも教会に潜入している人間がいてね・・・貴方が来る一年
前より前からいるのよ

だから吸血鬼の本当の弱点なんてお見通し・・・貴方の大好きな・・・
レミリアちゃんにフランちゃんに妹紅ちゃんに由梨ちゃんの弱点を・・・
ね」

・・・あいつら・・・には・・・弱点・・・なんか・・・

「貴方が死んだら一体どうなるのかしらね？」

・・・あ・・・？

「もしかして貴方鈍感？残念ね？あの娘達ね？貴方が死んだらきつと自分からこつちに突っ込んで来るわよ？それも殺意むき出しね？能力をまだ完全に扱えていない娘達が死ぬなんて当たり前じゃない」

・・・当たり・・・前・・・ね・・・そう・・・です・・・ね

あの・・・娘達は・・・私の所へ・・・来てしまう・・・でしょう・・・
ね

死ぬ・・・なんて・・・恐れないで・・・ただ・・・ただ・・・私のところ
へと・・・

「何が言いたい訳？」

・・・わたしは・・・自分が・・・利用されるのなら・・・構いません・・・
けど・・・けど

私の・・・大切な・・・娘達の・・・気持ちを・・・弄ぶのは・・・
利用するのは・・・

絶対に・・・許せねえんだよ・・・！！

「そんなボロボロの体で何しようというのかしら・・・？」

・・・さあ・・・ねえ

「・・・貴方・・・何故私に心臓を刺されたのにまだ生きているのかしら・・・？」

・・・私は・・・娘たちを守るためなら・・・何だってやってやる・・・だから・・・ね？《死神・・・発動》

《ブシャアアアアア・・・》

「・・・え・・・？」

貴方の罪は私の大切な者を間接的にでも傷つけたことだからその魂・・・永遠と同等の苦しみを味わいなさい

《ドサツ・・・！》

・・・人殺しは・・・もう自分の意思でしないうって決めたはずなのに・・・何をやっているのですか・・・自分は・・・

・・・今はそんな事どうだっていい・・・あいつ等を助けに・・・
・・・あいつ等は助けてもらう事を望んでいるのか・・・？
・・・私が・・・勝手にそう思ってるだけで・・・

教会に来て・・・どうしてだろうね・・・？

どうして・・・レミリアは・・・血だらけになって・・・倒れてい
るの・・・？

・・・ねえ・・・どうして・・・フランは・・・血の涙を流しながら
私を睨んでいるの？

「お兄様・・・どうして・・・どうしてお姉さまを殺したの・・・!？」

・・・私は・・・また間違った選択をしてしまったの・・・？

「お兄様・・・答えて・・・!」

・・・

「お兄様・・・どうして黙っているの!？」

・・・私が・・・また大切な者を守りきれなかったの・・・？

「お兄様・・・お願いだから・・・答えて!」

・・・そうだよ・・・私が・・・レミリアを・・・殺したんだよ

「うそ・・・でしょ・・・?」

・・・本当だよ・・・私が・・・お前の姉を殺したんだ

「ちがう・・・ちがう・・・うそ・・・うそ・・・お兄様は・・・」

私が殺したんだ・・・フラン

「いや・・・いや・・・お兄様は・・・いやあああああああ
！」

・・・

「オマエハオニイサマジヤナイ・・・」

・・・逃げるのか・・・？

「ワタシハ・・・ワタシハ・・・！」

・・・フラン・・・

「コワシテヤル・・・ゼンブ・・・！ゼンブ・・・！」

・・・来なさい・・・私を殺しに

・・・

四十一節 嘘に真実に優しさに誤り・・・です

《レーヴァテイン》

炎を纏った剣のようで杖の形をした物が向かってくる

《ズシャアアアアッ》

それを抵抗せずに受け止めようとする

「オニイサマナンテダイツキライ！」

・・・そう・・・か・・・

「モウダレモイラナイ・・・！ゼンブ・・・ゼンブナクナツチャエバイ
インダ・・・！」

《フォーオブアカインド》

フランの体が四つに分かれ殺傷のある弾幕を只管放ってくる
それを避けようともせず只動かさず当るのを待っていた

・・・だがそれは目の前に来て当る前に掻き消えてしまう

フランを見るとどうしてか赤い血を・・・血の涙を流していた

「オニイサマナンカ・・・キライ・・・キライ・・・シンジャエバ・・・イ
インダ・・・」

・・・やっぱり最低だと自分に自覚する・・・気持ちを弄んでいるのは結局自分

こうやって弾幕にワザと当るうとしてフランに気持ちを落ち着かせようとしているが・・・

そんな事はフラン自身望んでいなくて・・・それにレミリアを傷つけたのは私でないことなんて心で分っているのにどうしようもなくフランは私が憎くて仕方ないという状態だろう・・・

なのに攻撃してくるのは・・・私がレミリアを殺したと言ったからまだまだフランは幼すぎるため・・・それだけでなく私への好意があるため私の殺したという言葉さえ信じきっている・・・そして私がレミリアを殺した所を視たのは想定内だったんだろう・・・人間に

私の姿をとりレミリアを殺す一歩手前までに追いやりそこをフランに見せる・・・それだけでフランの能力が出てここの吸血鬼が滅びるとでも思ったのだろうか

「オニイサマナンカ・・・オニイサマナンカ・・・！」

そして私がフランの相手をしているのは狂気以上の狂喜にこれからならないよう能力の制御をさせるためと・・・フランに自分を殺させる一歩手前までにし暴走を止める・・・

・・・だけど本当はこんな物全部建前で・・・私は罪滅ぼしをしたいだけ・・・フランを使って・・・

それだけのためにフランの好意を自分の良い様に利用している・・・

「オニイサマ・・・ナンカ・・・！オニイサマ・・・ナンテ・・・！」

・・・ずっとフランは血の涙を流し続けている・・・それはもう目を瞑り震えていた・・・

.....

弾は何時までも来なく・・・跡形も無く掻き消えてしまった・・・

「お兄様・・・!!」

《ドサツ!》

フランが思いつきり私に飛びついてきて勢いの余り受け止められず倒れた

フラン・・・

「おにいさまあああああ・・・」

もうフランは血の涙ではなく蒼く透き通った涙を流していた

・・・フラン・・・ごめん・・・

「おにいさま・・・」

.....

「その位で良いかしら・・・」

レミリア・・・

「お姉様・・・？」

「貴方たちの戦いで現れた霊珠で人間共は消え去ったわ」

・・・そう・・・

「貴方に化けた人間もあの娘等が片付けたわ」

「お兄様に・・・化けた・・・」

「取り敢えず貴方には感謝はするけどフランにした事は許さないわ」

・・・そうか・・・

「だから約束の後五年フランのためにここにいなさい」

・・・え・・・？

「それ位構わないでしょう？」

はい！

四十一節 嘘に真実に優しさに誤り・・・です(後書き)

次はメイリン)

四十二節 妖質とまた戦い・素は疲れるよ・

・・・さてつとこれから如何しましょうか？

「一つしかないでしょう？」

・・・その一つがこいつ等の所為でねえ！

《グリグリグリ》

『ごめんなさいー！ー！』

私の姿を取ってレミリアを殺しかけた奴を捕まえたのは良いけど・

「情報を余り聞かないまま殺すのはねえ・・・」

「だって・・・」

だってって・・・

「弧徹の姿を取ったのが許せなかったし・・・」

「弧徹の姿で最低な事をするのはもつと嫌だったんだもの！」

・・・由梨と妹紅の気持ちは嬉しいんだけどなあ・・・

『じじじ・・・』

「まあその位にして・・・今は知ってる限りの事で対策を練るわよ」

・・・だけどその情報がなあ・・・
一つが人間が妖怪をここに襲わせに来るらしい
二つ目がその妖怪の目的はフランを攫う事らしい
三つ目が・・・これがどうも信用がなあ・・・

「でも弧徹の姿を取ってた奴が最後に言ったんだよ？」

だからこそ信用性が五分五分なんですよ

「・・・その妖怪は妹がいて妖質？に捕られて已む終えなく来る・・・
ねえ？」

今回の人間がレミアアの《運命を操る程度の能力》でさえ見ること
の出来なかったやり方で来たですからねえ・・・その所為で現在ま
とにも戦えるのが私しかいませんし・・・

「私達も流石に弧徹の皮をかぶった奴に力を使いすぎちゃったし」

・・・まあ戦ってる内に見極めればいいか

「負けたら只じゃ置かないわよ？」

・・・善処しますよ

「弧徹が死んじゃったりしたらフランちゃんがまた泣き止まないん
だから」

・・・出来る限り・・・ね

じゃあ行きますかっ・・・

よつと・・・

取り敢えずまだ真つ赤な夜の平原へ・・・

・・・情報はやっぱ伊達じゃないな

「貴方が弧徹さん・・・ですね・・・？」

そこには・・・赤い髪に緑のチャイナドレスを着た・・・

「私は紅・美鈴って言うんですけど・・・」

妹情報は本気にした方がいいのかなあ・・・？

「行き成りですみませんが死んでください」

冗談願います！

美鈴さん・・・美鈴は一瞬で間合いを詰め殴りの連打を飛ばしてきたので・・・刀を今回出せない為全てを受け流すようにして体を曲げていく

「・・・何でカタナと言う物を使わないのですか？」

・・・《気を使う程度の能力》を貴方が持っているなら必ず体を使った攻撃か弾幕を放ってくるでしょう？だったらそれに等しい形で抵抗しないと・・・ね？

「・・・私を甘く見ていると受け取っても？」

・・・それは少々困りますね〜

「だったら本気を出させていただいても？」

それはもっと困ります〜

「・・・何だか調子が狂いますね・・・」

そのままお帰り頂けると大変私が喜びます

「それは無理な相談ですね！」

今まで間直で話していたため美鈴は回し蹴り・私も逆から回し蹴り

思考が何か同じですね・・・

「・・・」

凶星ならとても助かります

今度は一気に跳び上がり単純な風圧の技を美鈴に打とうとする

それに美鈴は分っている様に力を籠め

《風華・彩り》！

「彩翔《飛花落葉》！」

《ズガガガガガガ！》

それらの弾幕はやはり全て同じ様に相殺し合い消えてしまう

ね
・・・普通に全部が全部同じ軌道で行くって有り得ないんですけど

「・・・偶には有る事なんじゃないのですか・・・？」

・・・スペカのルールを分っている方が何を言うのやら・・・

事実私が刀を使わないのは半スペルカードルールに持ち込むため
半が付いてるのは単純にまだルールがあやふやに伝わっているため
・・・だけど美鈴のように正々堂々と相手に合わせて戦って来るなら
こちらの使うルールに合わせて来るだろうと思ったから刀を止して
スペカ戦までに来させた

そしてスペカを何故使わせようとしたかというところ・・・
スペルカードを作るときの私をバツサリと伝えてしまい・・・
スペルカードを作るときは自分の気持ち・想い・考え・力を入れて・・・
と・・・

そして案の定美鈴のスペカの弾幕と私のスペカの弾幕が全て被った
つまり考えている等々が全く同じだということ
出来るなら相手を傷つけない・私は守りたい者が居る
そんな事がこのスペカで被った・・・

「貴方に時間を使っている暇は私には無いんです」

・・・だから？

「この一枚で終わりにしてくれませんか？」

・・・後一枚で終わりにしろって事ね

「ええ」

「……いいですよ……まあ立っていられたら良いですね？」

「その言葉そっくりそのままお返しします」

《巡符・紅き永遠の花》

「《華符・彩光蓮華掌》！」

《ズガガガガガガガガアアアアアアアアアア！！》

「……流石に何発も一瞬で来るって……きちいですよ……」

「手刀で体を全部痺れさせる方が……何を言うんですか……？」

まあ・・・私の勝ちって・・・事で

「負けたら・・・意味が無いんですけど・・・ね」

意味なら・・・大いにありますよ

「それって・・・?」

さあ・・・ねえ

そこで二人は気絶した

.....

四十二節 妖質とまた戦い・素は疲れるよ・・（後書き）

後・・・二話・・・です・・・！

聖連船・・・やめようかな・・

・・・話が思い浮かばないです・・・！

四十三節 妹・・・思い出と逃げ

・・・周りを見たら私が使っていたベッドの周囲を囲むようにして
皆が眠っていた

どうしてか悲痛な顔をして・・・

「う・・・ん・・・弧徹？」

そうだよ・・・おはようかな？妹紅

「うっうん・・・おはよう・・・」

どうかした？

「うっうん・・・何でもないわ」

ならいいんですけど・・・涙拭いたらどう？

「え！？あ・・・うん」

・・・何か怖い夢でも見た？

「別に何でもないから気にしないで！それよりももう怪我大丈夫なの？」

相手側・・・そこにいる美鈴も手を抜いてくれたから大丈夫ですよ

「・・・この娘の為にって理由だったんだっけ」

そういつとずっと妹紅の背中に引っ付いてる娘を私のベッドに降ろした

まあ守りたい者が在るなら普通手を抜かないんだけどね

「でも私はそういうの好きだよ？」

「私も好きだよお兄様」

・・・何時の間に起きたんですか由梨にフラン

『今だけど?』

・・・じゃあ由梨もフランも涙拭いたら?

『はえ?・・・あわ!?!』

二人とも本当に大丈夫?

「大丈夫だよ・・・」

「そんなに心配しなくて悪夢ぐらい・・・ね?」

まあいいですけど・・・それでこの娘はどうしましょうか?

「それは姉が決める事でしょう?」

だから何時の間に起きるんですかレミリア・・・そして涙を拭いてください

「女を泣かせるんじゃないわよ弧徹」

女の子だから関係なしだ〜

「う・・・うん・・・？」

「あら？お目覚めかしら」

「おっお前は！」

しがない吸血鬼？

「しがないって何よ？」

・・・貧乏？

『絶対違うから』

残念ですね意味はとるにたらないつまらない〜貧しい〜

「喧嘩売ってるのかしら？」

冗談は止しとして美鈴さん？

「なんですか・・・」

涙拭いたら？

「なっ！？これは・・・」

・・・何故全員泣くんでしょうかねえ？

「・・・それよりも美鈴といたかしら？」

「・・・なんですか」

「私達の付き人にならないかしら」

レミリアの発想は吹っ飛んでるね

「お姉様はそういう吸血鬼だもん」

「黙りなさい・・・それでどうかしら？」

「隙を突いて殺すかもしれませんよ？それと私にはまだやる事がある」

「そのベッドを見なさい」

そこは私のベッド・・・の上の娘

「・・・なっ！？何で美穿が！」

因みに私のいたベッドに降ろした娘は美穿ちゃんですね

「人間の居た所から助け出すの大変だったんだから」

「私が囿になっただけけど？」

二人とも良くがんばりました

『えへへ〜』

「ずるい・・・」

フランも何かいいことしたらね？

「むじむじ」

まあまあ・・・そんなに唸ってないで

「だって・・・」

今夜添い寝してあげますから・・・ね？

「うん！」

『ずるい！』

じゃあフランは自分の部屋に行きなさい
「はい」

さてつと美鈴？貴女はどうしますか？因みにここにいれば妹の保障
は絶対させて頂きます

『話を逸らすな！』

そんな声出してる・・・

「あ・・・う・・・？」

起きちゃったじゃないですか

「おにいさん・・・誰？」

しがない妖怪でもなく幽霊でもなく獣でもなく神でもなく吸血鬼でもなく人間でもない全てに当てはまって当てはまらない種族です

「よく分からない・・・」

じゃあ取り敢えずその一筋の涙を拭いたらいかがでしょうか？

「おにいさん・・・さっきの夢の人？」

・・・それはどういう事？

「たくさん傷ついて・・・たくさん傷つかされて・・・たくさん傷つけた」

それは・・・個々での夢？

「皆が視ていた・・・夢」

『!?!?』

そう・・・じゃあ美穿ちゃんの能力は・・・

「『視を理解し解る程度の能力』」かな？

「・・・そう」

じゃあ・・・夢を視ていた娘達は・・・誰？

「……涙を流したお姉さん……皆」

そっか……じゃあ……それを視てどう思った？

「最低」

だろう……ね……

そして全員が俯いている後ろを見た

「弧徹……」

……私に何か言いたい事は？

「……どうして？どうして私の好意を消そうとしたの……？」

妹紅……それと由梨……生きてきて違和感を感じた事がある？

「……姿が十年以上経ってるのに変わらない事……？」

「私は……今まで無かった能力が急に出了ることと不老になった事」

それね？私が近くにいたからなんだよ……そして私が……私さえいなければ苦しい事も無かったし少なくとも今よりもマシな日常を送れてたんだよ……それを私が壊してしまった……だからね？私との関係が無かったら……そう思ったから……だから

「ふざけないで！」

・・・

「私の事が嫌いなら別にそれでもいい・・・！けど！弧徹と会って毎日がイヤになった時なんて無い！」

「私だつて弧徹と別れてから辛いなんて思ったこともあつた！けどそれでも弧徹とまた会えた事が・・・それだけで嬉しかった・・・！」

・・・そう・・・じゃあ・・・貴方たちに私の苦しみ分かるって言つての？

「そんなの当たり前だよ・・・！」

じゃあこの罪を分かち合えるとでも？

「そんなの簡単だよ・・・！」

・・・傲慢ね

「え・・・？」

私の罪は軽い物じゃない私の苦しみそんな簡単な物じゃないのよ
貴女達はもう・・・いいわ

「弧徹・・・？」

消えなさい私の前から・・・そして私の事なんて思い出さなくなつて良いんです

《行使・次元強制転送・記憶作用》

「貴方を!？」

・・・じゃあね

・・・

・・・二人とももう元のところに戻ったかな・・・

「・・・せめて涙を流さないでああいう台詞をいいなさい」

やっぱ私には突き放すなんて事・・・出来ません

「・・・もう貴方も行くんでしょう?？」

はい

「最後に二つ聞いていいかしら？」

なんでしょうか・・・？

「貴方は・・・殺した事を後悔してるのかしら？」

さあねえ？私にとってはもう何億年前か憶えてませんから

「・・・まあいいわ・・・もう一つは・・・貴方が好意を返さないのは・・・罪滅ぼし？」

・・・それだけは絶対にありません

「なら構わないわ・・・もし妹を傷つけるようなら殺してあげたけど」

最後まで冗談が好きなことで

「・・・もう行きなさい」

はいはい・・・じゃあいずれまた・・・ね？

「何百年後かしらね？」

待ってこそ恋でしょう？

「そういう物かしら」

そういうものでしょう

「じゃあそし細って行きななとら」

また・・・

・・・

四十四節 幻想郷創製？・・・強い方は嫌いです

《全斬無斬》！

それは全てを斬り無と言う概念さえ切り伏せる・・・
自分の創った空間さえ斬り伏せるほど

・・・これは今迄普通に使って来たけど少しは制御できるようには
ないと・・・

次は・・・

《珀龍刀》！

これは存在をしているだけで空間を歪ませる・・・

・・・もう女性型にならなくても制御が出来るけど自身の名じゃ無
いから威力が落ちるね・・・

さてつと次に・・・

《死神・音波》

刀が本当なら致死性になり形態が鎌？になる能力だけど・・・
制御完了・・・かな

そんでもって波紋を歪にして・・・

《死の波長・・・死染の蝶》

・・・流石に幽々子の様に蝶は出せないか・・・
形状が不安定だけど当たったら死ぬねえ・・・幽々子の蝶って当た
ら死ぬのかな？

まあいいや次々・・・はあ

《行使・・・スキマの所有権を自己へ》

「きゃあー！」

・・・《空間制御終了》

周りはさっきまで真っ白な所だったが次第に元の雪が積もったの平原に

どっち道真っ白ですねえ・・・

「ちよつと！いきなり何するのよ！」

うるさいです・・・幻想郷を創るのを私に任せっぱなしじゃ無いですか

「・・・別に私はそんなの創る気は無いわよ？」

・・・いま紫が考えてる全てを視てあげましょうか？

「遠慮するわ」

残念・・・本当に・・・

「少しは幻想郷創りはしようとしてるわよ・・・けど」

けど？

「土地が決まって人間の信仰も少しは集まったけど妖怪達をどうやって集めれば良いか分からないのよ・・・」

・・・嘘は私好きじゃありませんね

「じゃあ協力してくれるのかしら？」

・・・者による

「・・・6対4」

・・・4対6です

「・・・5対5でどうかしら」

一回で済まないから4対6です

「私のスキマでも敵わない相手だっているのよ7対3ね」

私は刀無しで戦うと弱いんです・・・もう5対5でいいですよ

「特訓あるのみでしょうか？交渉成立でいいわ」

その特訓を邪魔したのは誰ですか？時間を止めてある空間なのに・・・

「時間は止めるより遅くする方が効率が良いんじゃないかしら？」

まあ一つ以外は制御できるようになったので良いですよ

「・・・所で貴方は何時になったら偽敬語が抜けるのかしら？」

これを使う相手には親しみと敬意を示しているのですよ

「私は親しみだけを願うわ」

・・・友達いるでしょう？

「・・・貴方には気持ちを決める能力でもあるのかしら？」

・・・私達は友達です！

「・・・本当？」

私は一度言ったら曲げない主義です

「じゃあさっきのをを7対3に・・・」

さっさといきますよ？

「あー！こら待ちなさい！」

.....

さてと・・・趣味の悪いスキマの中に強制的に入れられたわけですが

「悪かったわね」

まあまあ・・・さて・・・何故最初が妖怪の山なのか教えて貰いましょうか？

「天狗と鬼をいっぺんに懐柔・・・もとい説得できるじゃない」

・・・紫も戦うよね？

「鬼って一対一を好むらしいわよ？天狗は侵入者を許さないらしいわよ？」

・・・どうしろってですか？

「鬼神母神と天魔を一片に相手をしたらどうかしら？」

紫って私の事嫌いですよね

「とういか・・・それでもう話を通してあるのよ」

・・・死にたくないっ・・・！

「あ！それと萃香って娘と勇義って娘も戦いたいらしいわ」

人殺し！

「貴方に言われたくない台詞ベストワンね」

ちきしょうです〜〜！

「ほら・・・覚悟を決めて逝って来なさい」

字が違う気がしますよ〜〜！

紫覚えてなさいです！

「いつてらっしや〜い」

うわーーーん！

少年？妖怪の山突入中・・・

四十五節 妖怪の山にて天狗？白狼天狗？鬼？勘弁

「まてやおらあああああ！」

誰が・・・待つか・・・

そして急ストップする

そして・・・

「ぎゃああああああ・・・」

崖の下に落ちてゆく・・・慣性つて重要だね

「誰が逃がしましょうか？」

さらばなのです

「逃がしませんか？」

来ないで～～！私は犬アレルギー・・・ではないですが来ないで！

「誰が犬でしょうか？」

いやあああああああ！

「うるさいですね？」

紫力モンです！

「何よ？」

この白狼天狗をどこかに！

「……ごめんなさい……それは無理なのよ」

何故ですか！

「スキマで移動はして良いけど天狗や鬼に干渉したら話は無しにするって言われているのよ」

ならせめて助言を……！

「あ……忘れていたけどフランって娘から預かり者」

何で今！？

「七色に変化する六角形の石に手紙ね」

これって翼についてた奴と……

「じゃあ後は頑張りなさい」

内容は……『お兄様の馬鹿！』
が書き殴られていた

「さっきから何を一人でごちゃごちゃ言っておられるのでしょうか？」

うるさいですよ！

取り敢えず六角形の石を媒体として……《行使・レーヴァテイン

》！

「変わった力ですが私には効きは致しません《排除》」

そして炎は消え失せて・・・吸い込まれた

何で私が知らない奴等は皆が皆強すぎる能力を持っているのですか！？

「能力という物は自身の全てが引用され自身のもう一つの姿であると言う事でしょうか？」

だったら私がこんな能力を持つてるのも納得かな？《絶・空間能力
圧縮》

自分の持つてる全ての能力を応用して能力が使えるけど使えなくさせるという矛盾を発生させる物

「残念ですね・・・私は能力が二つあるので」

・・・なんで私が喋ってないことをまるで判っているように話すのが不思議ですね

「白狼天狗ですから 《成立》」

・・・《自分の発言を成立させる程度の能力》ねえ

「私は白狼天狗を統べる者であり同時に天狗を天魔王の代理として統べておりますので」

・・・戦わなきゃ駄目でしょうか？

「私としてはお通しして差し上げたいのですが・・・貴方に興味が沸いてしまってます・・・ね」

お通しできません・・・と

「はい」

だったら・・・そこにいる鬼も一緒に来なさい

「ありやあ？何時の間にはれてたあ？」

・・・萃香と勇義かとおもったけど・・・それ以上に・・・鬼神母神の一個下・・・？

・・・鬼とまだ10体としか会ってないから分からないですね・・・応頂から力が伝わってきますが

「あら？よくお分かりになりましたね？」

はい？

「確かに私も鬼神母神様の代理として鬼と妖怪の山を統べているよお？でも良く気づいたねえ？私は対象者に気づかれない能力も持っているのに」

・・・やっぱりどっちか一人で

二人はニツコリ笑って

『二人だと人だから関係なし』

・・・いいですよもう
お二人とも・・・名前は？

「私は白狼天狗・俊離赤羽と申します」

「私はあ鬼の・沿穿由酒だあ」

私は白柳弧徹・・・所持能力は五つ・・・

幻最強の自分という自由な存在です　これから貴方たちを気絶させる存在です

四十六節 戦い？不利です無理です私に死ねと！？（前書き）

私からみて少々長めに・・・ね？

四十六節 戦い？不利です無理です私に死ねと！？

「しねえええええ」

誰が死ぬか！？

《行使・身体強化》

自分の拳と由酒の拳がぶつかり・・・

いだあああああ！？

流石に鬼神母神の代理者だけあって身体強化を限界までしても痛い！

「いいぞー！もつとやれー！」

うっせえですよ外野！

「もう少し心を広くしたら如何でしょうか？」

そんな心は私には・・・え？

周りを見ても赤羽の姿は無く・・・

「もう少し視野を広げたらどうでしょうかという意味ですが！」

上を見たら短剣を振りかざされていた

《具現化・メリケンサック》

うらあああああ！

互いの威力が相殺されるが周りに衝撃波が生まれ外野の鬼やら天狗やらを吹き飛ばしていく

「私が付けたルールでよくそこまでやりますね？」

私を殺したい様にしか見えませんがねえ！？

ルールと言うのは・・・

弾幕使うな・刀使うな・能力一つまで・範囲は自分自身等には良いが相手に干渉しない程度に
ですが・・・私のみしか適用されてない気が・・・

「まあまあ・・・戦えれば私はいいんだあ」

私としてはさっさと終わらすつもりだったのですが

「私達を倒そう何てまだまだですね」

貴方たちよりも長生きしておりますがね？

「それは実力を見せ付けてから言っただけ欲しいやあ」

由酒が一気に目の前に来て・・・
拳が何故か光っていた

「うりゃあああああああ！」

これは流石に不味いかも・・・！

《行使……》

しかし間に合わずそのまま顔面へ直撃した

そのまま吹っ飛び木を何十本も折りようやく止まる……

「今のは結構手応えがあつたかなあ？」

「流石に今ので死んでいないよね？」

げほっ……勝手に殺さないで……欲しいですね……

「へえ！やっぱりお二方に挑もうとするだけあるなあ」

「少々甘く見ていたようですね」

だったら……もう本気でいきますから……せめて二十分で終わらせて見せようか

「能力は一つまでですか？」

「俊離……違うよあれは」

私は一人で二人……その逆もまた然りですからね？

「それならルール違反では確かにありませんね」

「じゃあ女性な君の名前はあ？」

私は……珀鈴零絶……かしら？

「じゃあその実力をしっかりみせてよお！」

先ほどよりも明らかに速く目の前に由酒は移動し黒光りする拳を思いつき突き立てて来た

それをまた顔面に当たったはずだったが・・・

貴方の力はその程度かしら？鬼神母神の代理っていつでも代理は代理かしら？

直前で由酒の拳をギリギリと音が鳴る位に掴んでいた

「つつ！？」

逃がさないわよ？

あくまで由酒では無く空間の概念を止め・・・

この山の頂までで止まったらラッキーとでも思っておきなさい

思いつきり腹に回し蹴りをした

「がっ・・・はっ・・・！？」

そしてそのまま山の頂まで吹っ飛んでいった

「由酒！？」

大丈夫よ・・・せめて高みの見物をしている二匹の所までだから

「ほぞけっ……！」

今度は赤羽が来たが先ほどと違い焦っていて隙がかなりあった

少しは冷静になって来なさい

先ほどと同じように空間を止め……

「くっ……！」

回し蹴りをしたがギリギリで盾を出され木を数本折った程度で止まった

……貴女由酒って娘より強いんじゃないかしら？

「さあ？どうでしょうかね？」

まあ私にとってはおなじだけどね

「……私貴女の事嫌いですね」

あら？どうしてかしら？

「少し御幣があつたので訂正しますが……女性の貴女が見ているだけで嫌気がさします」

酷い事言つわね？

「事実ですが……！」

そう言っつて赤羽は一瞬で消える・・・

貴女は学習したらどうかしら？

そして上を見て空間を止め

「そちらこそ学習したら如何でしょうか！」

っっ！？

上から来る攻撃かと思ったが全くの見当違いで・・・

「はあああああああ！」

ぐあ！？

地面から・・・真下から一気に出て来て斬撃を繰り出してきた

「あんまり・・・甘く見ないで欲しい物ですね」

私としたことが・・・貴女達を甘く見ていたわね

「達・・・？」

「俊離い私を忘れないでよお」

「いじめんいじめん」

「全く・・・それじゃあ」

「一緒に頑張つてこの女を倒そうか」

「だねえ」

酷いわねえ・・・まるで私が悪者みたいじゃない

「さっきの男の子を出しなさい」

「私としたらこっちの方が力出せるけど戦う気が失せるんだよねえ」
言ったでしょう？私は一人で二人だって

「その逆も然りですね」

「だからあ」

『《女の君は失せる》』

つつ!?!?・・・ならいいわよ・・・その発言・・・後悔しないで貰
いたいわね

「負け惜しみでしょうか？」

「嫉妬は女からは要らないよお？」

・・・もういいわよ

・・・それじゃあ今から本当の真剣勝負・・・始めましょうか？

「そうですねっ！」

「じゃあ今度は二人掛りで行かせてもらおうよ！」

そして・・・俊離は短剣・由酒は拳を・・・左右から一気に二人は来た

それを向かえ打つため二刀を出し・・・

『らあああああああああ！』

二人の攻撃が後四歩という所で何もかもを越える速さにより自身を二つ生み出し・・・

『おわりだあああああああ！』

二人の腹を刃が無い方で打ち・・・

「うあ・・・」

「あ・・・りゃあ・・・」

気絶させた所を受け止め地面に下ろした・・・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

これで終わり・・・じゃないかあ

腰を下ろそうかと思ったが目の前には・・・

「随分派手にやってくれたねえ？」

「まああいつ等も暫くこれで満足してくれただろ」

流石に連戦は嫌なのですが・・・？

「ああ・・・それなら大丈夫だよ」

「元から俺等は戦うつつもりはないから安心しろ」

「どういうことですか？天魔王様に鬼神母神様？」

「そのままの意味だよ・・・それと私は鬼神母神だがそれが名前な訳じゃない」

「この二人に代わって貰ったんだよ・・・俺も天魔王だがそれが名前じゃない」

何と無く意味が解りました・・・つまり貴方はこの二人と私を戦わせたかったのですね？

後名前・・・そう言うなら教えてください・・・因みに私は伯柳弧徹です

「もう私達は飽きたんだよ・・・名は鬼駕悠遠ね」

「だから実力を確かめたんだよ・・・名は天露概駕だ」

・・・鬼と天狗が一緒に・・・本心では仲がいいのはお二方がいるからですか？

「そうだね・・・この座を継げるのは天狗と鬼・・・二人が仲が良
い者だけでね」

「そして実力も兼ね備えていないといけないからな」

実力って・・・お二方の能力が強力すぎですよ・・・

悠遠様が《存在しているありとあらゆる者を凌駕する程度の能力》

概駕様が《天を露とし存在の概念を凌駕する程度の能力》って……

「まあ昔はこの能力で私達は忌み嫌われていた者なんだけどね」

「その境遇はあの二人も同じだろう」

……所で協力の話は……？

「別に構わないよ……っていいんだけどね」

「また来てくれないか？近いうちに」

何ですか？

「唯一納得していない奴が……ね」

「まあ近いうちにまた来て戦ってくれたら構わないから……な？」

……萃香と勇義？

「まあ今はまだやる事があるだろう？だから今度で」

「協力の話は許可するから……な？」

まあいいですよ……お二方と戦わなくて済みますし

「じゃあ三日後あたりに来てくれ」

「そついでに頼むわね」

じゃあまた〜

「下山は気をつけるよ」

「鬼と天狗が襲ってくるかもしれないしね」

瞬間移動します・・・

帰り際に爆笑されたとき〜

・・・・・・

四十七節 向日葵に巫女の想いと季神の信仰

紫

「全く貴方も子供ねえ？」

そついつて紫が腕を広げ私を抱きしめようとした所で・・・

うらあああ！

「あう！？」

頭にこつんつと拳骨を

「・・・痛いわ」

涙目になっているが気にしないです

とつか私死に掛けましたからね？

「別にいいじゃない・・・許可も貰えたわけだし」

じゃあ次は紫で

「いつ嫌よ・・・」

へー私をこんだけ扱き使って嫌だ？

「分ったわよ・・・戦うわよ」

よろしい・・・ちなみに相手は太陽のような黄色い花を咲かせている畑の主人ね？

「・・・冗談でしょう?」

知らねえですよ

「まだ死にたくないわよ!？」

まあまあ・・・私が妖力分けて上げますから

「死前提じゃないかしらそれ!？」

じゃあ逝ってみよ

「発音が!違うわよ!？」

.....

•
そして見た目が前よりはマシになったスキマから来たわけですが・

「何がいけないのよ！」

はっきりいって目が閉じていても怖いです

「どつすねばいいのよおおおお」

せめてかっこよくか可愛くに限定しましょうよ・・・目を無くして

「暫く無理なのよ・・・あの背景変えるにも妖力すごい使うし・・・

」

私が妖力上げますから・・・ね？

「本当・・・？」

この戦いで勝ったら

「絶対勝つてやるわ！」

がんばって〜

「任せなさい！」

そして目の前にいます

「え？」

そこには季神の一体の幽華・・・ではなく

「あら？貴方たちね？この向日葵畑を荒らしに来たのは」

残念ですが私達は荒らしに来たのではありません・・・
それにしてもよくここまで立派な向日葵を育てられましたね？尊敬
します

「あら嬉しい事言ってくれるじゃない？人間にしては上出来ね」

「残念だけど弧徹は人間じゃないわよ？だから奴隷にしようなんて
考えない事ね」

「残念ね・・・でもそれは私が決める事よ」

嫌々・・・決められても困るのですが

「そうよ・・・弧徹は私のよ」

いやだからそうじゃなくって

「だったら戦って決めたほうがいいわね」

話し聞けおい

「そうね・・・貴方を跪かせて上げるわ」

もういいや

「上等よ・・・来なさい加齢臭妖怪！」

「貴方には言われたく無いわよ！」

・・・どこかいこう・・・

《行使・対象者を時空間へ・・・殺戮は不可・決着が着くように》

《行使・移動》

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

さてつと到着・・・どこに？

周りは森？で社には・・・ハ
イ神社？
黒ずんで見えなかった

どうしようかな

そんなどうでもよく悩んでた時・・・

「弧徹・・・様？」

へ・・・？

いきなり後ろからどこかで聞いた事があって・・・そして忘れられるはずの無い声が・・・

「弧徹様・・・！」

そして想いつきり背中に抱きつかれた

それは紛れも無い・・・忘れる事の無かった暖かさ・・・声・・・

だけどそれはどこか大人びた声だった

柚木？と言う筈だったのに・・・

その言葉は・・・どうしても出せなかった

それはこの先に待つ何かを受け止めなきゃいけないような気がしたから・・・

久しぶり・・・そして始めましてかな？博霊？

「はい・・・今の名は・・・阿須奈です」

その声はどこか寂しそうな・・・嬉しそうな声だった

そっか・・・阿須奈か・・・いい名ですね？名を付けた方は？

「零季様達に新たに付けて頂きました」

零季達に・・・ね

「私は私であり私ではない存在・・・だからこそ断ち切るために必要なんです・・・」

流石に皆様との思い出は断ち切れませんでしたけどね」

私は別にそれでいいと思うよ？生と死が永遠と連鎖して時に辛く悲しいかもしれないけど・・・

でもそれ以上にまだまだ遣り残している事を無くし尽せるんだからまあ奇麗事ですけどね？

「確かに後ろ向きに考えるよりも前向きの方が楽しいですもんね」

そうそう・・・処でこの神社・・・前来た時は季節が色々おかしかったけど直ったんだね？

「はい・・・人間全員が話し合い全員が納得できた四季ですよ」

・・・零季たちは？

「まだ皆様それぞれの神社におられますよ？」

まだ・・・？

「・・・人間って本当に勝手ですよね・・・信仰を忘れ意味も忘れ自分たちにとつて要らない存在になつたらその存在を見えなく忘れようとする・・・私は・・・自分が人間である事が・・・何よりも悔しいんです・・・」

その意味が分つてしまつから？

「違つんです・・・何よりも悔しいのが零季様達に本当の意味で力になることが出来ないのが悔しいんです・・・いつそのこと私も零季様達の様に消える事が出来たらつて・・・」

それは逃げでしかないよ・・・阿須奈

「分つています！・・・けど・・・けど・・・私はその事が分つていないつて自分の事を分つてしまつんですだから・・・！だから・・・！」

・・・私は何も言わずそつと阿須奈を抱きしめた・・・

「こつつまあああ・・・」

私は少し息を吸つて吐いた・・・

阿須奈・・・そんな迷える貴方へと最後のチャンスです

「弧徹様・・・？」

貴女は零季・・・桜癒に幽華に亜樹に幸恵が嫌いですか？

「そんな事在りません・・・！私は皆様が・・・大好きです」

その声弱々しくも強い気持ちを持った声だった

なら・・・皆を呼んでくれるかな？後セリカも連れてきて欲しいかな

「何をするつもりですか・・・？」

さあねえ・・・それは六人が揃ってから・・・ね？

.....

四十八節 決断と死と変化の意味の意味（前書き）

七人で話すとか無理です・・・という事で若干台本読みになるので悪く思うなです・・・そして次は・・・地獄です！

何々聖蓮船何時か？知らないよ？幽々子？私だって書きたいよ！

さて絶対後十話で・・・二十話で幽々子に！

おっ見捨てないでくださいよっ

四十八節 決断と死と変化の意味の意味

「弧徹さん久しぶりかな？」

ええ桜癒も久しぶりです

「元気だった……？」

ええ……幽華も……ね？

「来るなら腕輪で連絡しなさいよ」

すっかり忘れてたんですよ亜樹

「次この娘を傷つけたら殺すわ」

幸恵もですよ？

「ほんと〜にいきなり来るね〜君は」

危機なら何時だって駆けつけますよ？零季

「だったらもう少し速くきてって……」

わりいですセリカ……

「……弧徹様の案って一体なんですか……？」

それは・・・貴方達にとって大切な事です・・・だから私は強要は
しません

「じゃあそれは君が本当の意味で望んでいる事なんだね？」

さあどうでしょうねえ？選ぶのはあくまでも阿須奈ですから

「私・・・ですか？」

そうだよ・・・でもこれを聞いたなら阿須奈は選ばなくてはいけま
せん

それは貴女にとって辛い選択です・・・それでも聞きますか？

「弧徹さん何を言ってるんですか？」

桜癒？

「何故そんなに阿須奈に選択を強要させようとする・・・？」

・・・そう聞こえましたか？

「ねえ弧徹？貴方に聞きたい事が私達はあるんだよ」

亜樹だけでなく皆？

「阿須奈に強要させようとするのも苛々するけど 何を怖がっ
ているの？」

「・・・怖がっているって・・・何かの気のせいじゃないですか？」

「じゃあ弧徹くんはどうして私達じゃなく阿須奈に強要させているの？」

それは

「それは？」

.

「弧徹様 ?」

っ!

「君はいつでも危機になったら来てくれるっていったよね？」

.

「あなたは どうして自らの恐怖に恐れているの？」

わたしっは !

「貴方は死が怖くなった ?」

ちがっつ !

「君は人間に死が在ると言う事に恐怖を抱いた？」

ちがっつ !

「じゃあ弧徹さんは 誰かが消え変わる事を恐れているんだね」

ちがつ・・・！

「もう否定はいらないよ」

幸恵・・・

「弧徹様は何時からそんなに弱くなられたのですか？」

私は・・・

「今まで誰も君の周りから死ぬ者が居なかったから？」

そうじゃないんです・・・

私は・・・私の周りから死ぬなんて日常茶飯事だった・・・けど・・・私から離れていって・・・

何よりも辛かったのが私の知っていた奴じゃなくなる事・・・それが何よりも辛くて・・・私はおそれているんです

そして現ここにもう一度来て誰も皆代わっていないかった・・・それが私の行いによって変わってしまう

当たり前だったはずのことが・・・私という一つの存在によって変化してしまうのが怖い・・・！

「だから・・・阿須奈に選択を強要させるの？」

・・・

「最低・・・！」

そつだよ・・・私は最低だよ・・・

「君は変わったよ……」

……私は変わっていないよ……結局誰も私の本当の事を理解していないだけ……

「そうじゃない!」

え……?

「あんた全部分っているくせにそこから目を背けているだけよ!」

私は何一つ判っていないよ……誰の気持ちさえも

「だからそれが違うって言っているんです!」

違くなんか……!

「弧徹さんは誰かを傷つけないからその行動をしているんですよ!自分なんか消えてしまったって構わないって位」

そんなのは結局はただの奇麗事だっていつてるんですよ!

傷つけない?結局はその過程で絶対に傷つく奴は存在しているんですよ!

「それは君が生半可な気持ちで相手の気持ちに答えようとしているからでしょう!」

そうだよ!結局はそんな気持ちでしか返せないんですよ!私はいつも誰からも好意を抱かれています!その辛さに誰一人だって分つてく

れる奴なんて存在しない！だからこそ私は周りに誰が居ようとも何人居ようとも結局は一人の存在だった！それを理解してくれる奴なんていなかったから……！

今回だつて皆が傷つくことなんだよ！皆が消えてしまうから！けどこんな選択しかできないんだよ！それは結局全部私のエゴではないから……！だから……！……！……！

そんな事を本気で言っている内にどうしてか涙が止まらなくなって声が出せなくなった

そこに阿須奈が来て……

「言えたじゃないですか……全部……全部……」

私が悪い方なのにどうしてか……

まるで強く抱きしめたら壊れてしまうかのようにそれでもって離さないかのように抱きしめてくれた

「君がやるしかない選択は二つ……私達全員が阿須奈の身体へ入り存在を引き伸ばす事

それかこのまま全員存在が消去されるかだね？」

「これは私でもないし零季に桜癒に幽華に亜樹に幸恵にましてや阿須奈が決める事じゃないよ

私達は弧徹に一回助けられているんだから……だから……ね？」

わたしは……！誰も居なくなつて欲しくなんか無い……！

「弧徹様……お願いします……選んでください」

「私達はどうなるうとも他でもないあんたに選んで欲しいのよ」

「それが私達の願い・・・」

「弧徹さんが選択しても結局は弧徹さんの心に居続けるから関係ないんですよ」

「だから選びなさいよ・・・他でもないあなたが」

「弧徹クンに選んでもらってこそ意味があるんだから」

「君が選択したなら私達はどちらも後悔しないよ」

私は・・・！！

『弧徹（さん）様（）・・・』

私は・・・

《全無の行使》

《博霊のあらゆる信仰と博霊の巫女を媒体とし・・・権原を腕輪へ・
・所有を巫女と共有・・・》

そして阿須奈のみが残り七色の宝石が嵌められた腕輪が淡く光っていた

「弧徹様・・・これは？」

阿須奈・・・腕輪に全員と会いたいつて祈ってみてください・・・

「え・・・？」

そして淡く光っていた宝石が少し強く光だし・・・

『阿須奈・・・弧徹？』

セリカに零季に桜癒に幽華に亜樹に幸恵が・・・少し神力が弱まっているが現化した

「弧徹様これって・・・！？」

私の力全てと二つほど能力を使える権限をゼロにして博霊の信仰を半分使って

腕輪を媒体として皆を神力が半分になるけど現化出来るようにした・・・

阿須奈・・・博霊の巫女が会いたいと祈れば自由に可能・・・です

「弧徹さん幾らなんでもやりすぎです！」

「体が危険すぎる・・・」

「それにあんた消えかけてるじゃない！」

「また・・・私達を置いていく気？」

「君はもう少し加減しないと存在が消えるよ・・・」

「弧徹くんは自分を気遣うべきだよ」

「弧徹様・・・」

後・・・全員はもう純粋な神じゃ無くて・・・巫女と融合している
感じだから・・・

神力は私が削ったので減らないから消えないから安心して・・・

「弧徹様はどうしていつも・・・！」

あはは・・・やっぱり・・・好意を抱いてくれる奴には・・・い
いとこを見せるべきでしょう？

だから・・・また・・・絶対・・・会いに着てやりますよ・・・！

『馬鹿・・・』

一斉にゆくなです

じゃあまたねです・・・

・・・頭痛い・・・

やっぱり力を削りすぎたかな・・・

さっさと紫の所に・・・

だけでもうそんな力も残って居らず・・・

ああ・・・目の前がぼやけてしか見えないですね・・・

もう・・・疲れました・・・

そのまま弧徹は倒れ付し息絶えた・・・

四十八節 決断と死と変化の意味の意味（後書き）

シリアス？違います

次は本当の意味で地獄逝き・・・

能力は何を消そうか

四十九節 判決どちら？……殺すなですよ

周りには紫の桜の花が咲き乱れている……

「私はまた、ここに来たのか……」

自分の今までにもう一度後悔は無かったか歩きだそうと

「待つてくださいよ弧徹様！」

聞き覚えある声だけど、言われる筋合いの無い呼び方で止められる。そして振り返った先には、前であった時よりも、貧相な服装を着た死神、小町が。

「小町さんに様付けされたくありません」

「仕方ないんですよ、立場上弧徹様が上になられましたから」

私の《死神の能力を決める程度の能力》の所為で小町に様付けされるのなら、この能力を捨てたいなんて失礼な事を考えながら、話を進める事にする。

「じゃあ、私の命令で敬う言葉禁止ね」

「わかったけど、どうしてここに弧徹がいるんだい？」

多分小町ってサボらなければ有能なんだなあ、と考えても仕方ない事を思いながら訳を話す事にした。

「力を使い果たして死んでしまったのですよ。だから本当の死亡ですよ」

「いや……そんな事を軽く言われても困るんだけど」

仕方ないといしかいいようが無いじゃないですか、と小町にっても分らないでしょう。

「でしょう?」

「いや、だからなにが、でしょうなんだい?」

というかデジヤヴ感じるから速く映季様の所へ連れて行って貰いたいのですが。

「という事で映季様の所へ連れて行ってください」

「無理だよ」

私としては、小町は簡単に許可してくれるかと思っていたので、どうしてかと聞きたくなってしまいが、瞬時に理解する。つまり小町の服装、それにこの前以上に幽霊が増えている所、そしてこの前来たときは死神が何名もいたのに、小町しか存在しなく、尚且つ死神の船が一つしかない所を見ると…… 恐らく、原作よりも明らかに早い財政難だと理解する。

「むづ……じゃあどうやって映季様の所へ行きましょうか」

「あんたのすぐ理解してくれる所結構好きだよ」

そんな告白紛いは、ほおっておいて、真面目に思考をフル回転させるが思いつかない。

「どうでしょうか……」

逆にどうしてこんなに必死になって映季様の所へ行こうとしているのか、自分に理解できなくなってしまうが、そんな事は置いておく。

「別にそんなに困らなくてもいいんだけど」

「なんでですか」

つい思考をシャットアウトされたので素っ気無い反応になってしまったです、気をつけなくちゃですね。

「弧徹は今や映季様に並ぶここの最高権力者だから普通に三途の川程度、二丁三分で渡れるよ」

「それを早く行って欲しかったですね」

それよりも気になることはあるが、それは置いておきましょうか。

「じゃあ行きますのでこれは選別です」

そういつて前より明らかに重くなり、前の私なら持つ事が不可能だったであろう巾着袋を小町へと投げる。それに反応して小町は受け取るうと

しなかった。

そして銭が入った巾着袋は空を切り、そのまま地面へ落ちた。その後起こったことは、そこから辺り一面が陥没し、三途の川の一部となった。

「いやゝさすが弧徹だね」

「小町……目が笑ってません」

「だつてだつてえ」

そんな事をいいながら小町は半泣きで腕を上下に振ってていた。不意に何この可愛い生物……と思ったのは秘密です。

「ああ……あれだけあれば財政難じゃ無くなったのに……」

「まあ私の様な方がまた現れるのを待ちましょう」

「そんな奴これから絶対現れないって断言してやるわ」

「がんばって生きてよ」

そう言いながら、居た堪れなくなった私はさっさとここから去る事にした。

後ろから不幸者と聞こえたのは気のせいだと、切実に願って置きましょう。

.....

さて、また閻魔様、通称映季様の住む場所まで来た訳ですが……

「ここで会ってましたよね？」

前は豪邸だったのに対し、今や損傷が激しい神社の様な所だった。そして中へ入っていくと……今の発言が誤記だった。

まるで幽霊が米粒のように居て入る事が不可能だったため断念した。

大事な所は、困難では無く、不可能ということっです。

事実先ほどは見たらなかった死神と船が存在し、幽霊を何体ものせ停泊中だった。

少々気になる所があったので、《視》によって死人を判別する。

そして恐ろしい事に、およそ十分の九が罪人でした。
これじゃあ財政難にも陥るわけですね。と理解してそこ等の死神
に喋りかけてみることに。

「死神さん」

「ああ……なんででしょうか？」

その声にはやけに破棄が無く、お疲れのようだった。それと同
時に気になった事がまた一つ有ったので質問してみる事にした。

「私が誰だか分りますか？」

「そういえば余り見ない顔ですね？新入りですか？」

その事で、小町はどうして私が偉いつて分ったのか疑問に思いな
がらも、サボらなければ有能なんだと、安易な考えで隅に置いてお
き、本来の質問をする。

「映季様って今どこに居ますでしょうか？」

「映季様は今寝込んでしまってます……」

「嘘………ですよ？」

「いえ、本当にそう聞かされていますから」

少し私としたことがその嘘にイラつき始め権力行使しようかと思
ったとき。

「やめな白亜、弧徹に嘘言ったって無駄だよ」

「小町？どういうことそれ？」

幽霊を大量にのし上げた船で、小町が来た。

「やっぱり映季様はここには居ませんか」

「今地獄の削減案について懸案中だから今はさとの妖怪が居る地獄だね」

「ちよつと小町！それは極秘の」

そう白亜さんがいいかけたが、小町はそれを制した。

「あんたも勉強不足だねえ、こいつはこれでも死神を纏めていく物だよ」

「そんな大層な物なんですかこれ？」

「しつかりとがんばってくれないと困るよ？」

「じゃあ最近の噂って……」

少し気になって噂の内容を聞く事にする。

「実は……」

白亜さんが言うには、暫くしたら有頂天、つまり天界。それに地

獄、少ししたら旧地獄になるそうだが。そして映季様同等、もしくはそれ以上の立場を代える審判があるそうです。

そしてその中に全ての区域を監視する、つまり

「この次元の神の存在を新たに創る……ですか」

自分の所為で本来の神という存在が消え、新たになるはずだった季神も神の存在ではなくなり、遂には土着神の頂点、大和神側、今は封印されし神の派閥の神側、龍神までもが辞退をしようと言う事がおき、それに重なるように、私という存在が最早この次元に影響を与える能力がいくつも出現。

そして私が本当に神になっても構わないのかという審議を勝手に
行っているそうです。そしてようやく理解できた事は、私がま
もや死んでいなかった事。

今回の事に限って任意的にやったらしく、そして、神という条件
が死の概念が存在しない事だそうです。だから。

「いい度胸ですねえ？」

「弧徹落ち着きな」

「気持ちは分りますけど……」

「いい加減勝手に殺すの止めてくださいっていいたいですよ！」

もう本当に切実にそう思ったとき。

五十節 隠し事？警鐘に私は地獄逝き

「貴方の判決は天国ではありません。況してや地獄でさえ生温い」

現在私は映姫様に、判決を下されております。衝撃的な事実を知った数日後、部屋一杯に居た霊達は、三十秒とかからず、全てが消え去った。小町と白亜が止める中、ズカズカと寂れた屋敷に入っていくと、そこには見覚えのある服装をした幼き閻魔……では無いですが、四季映姫様が。

私の事で、すぐに文句を言おうとしたが、それは出来なかった。上の一文で私の言葉を封じられてしまったから。

「四季映姫様……いえ、映姫。貴方は全てを知つての判決か？」

私にしては、珍しい位怒っている。私は上下関係は嫌いけど、それでもしつかりとする方だ。そして、今は能力の所為で立場はどうなっているかは、全く分からないが、それでも、様を許しえず付けないで呼ぶのは、私が様を付けて呼ぶ必要がないと判断したから。しかし、映姫は顔色一つ変えずにいた。

「ええ、私の持っているこの浄玻璃の鏡で」

ああ、もう、無理、私には、無理だ。

「私が言いたいのはそのうちじゃねえ！」

はは、映姫、私が嫌いなことは、二つあるんだよ。

「私は偽善者だからこそ、根性が曲がっていても誰でも、寛容に

受け止める。けど」

その嫌いな事に、貴方は、触れたんですよ。

「私はね、映姫、貴方は立派だと思っていました。だからこそ」

私の過去を、その程度の鏡で見れるなら、分かるでしょう？

「私の生を、一度、二度、三度、何億共。手違いでなら、構わな
いさ」

私が、どれだけ、それに裏切られ、死を選びかけ、涙を流させた
か。

「それが、私利私欲のためじゃ無いのなら。それが、自分の意思
ではなかったら」

それが、私以外の誰かを犠牲にしなければ。

「貴方は一体何を言いたいのですか」

これだけ言っても分からない？それとも、理解しようとしていな
い？

「私の所為で、どれだけの神が消えると思っているのか、分から
ない？」

こんな事、当たり前前の事。私の能力は制御できないものが存在し
ている。それは次元を超えてレミリアの所まで行ってしまった事で
証明済み。それは制す、超える。この二つ。

私が何億年と制御を可能にしようとも出来なかった、それどころか、無限対数年行ったとしても、不可能。私が既にこの能力に適していないから。既にと言うのは、この能力の元の気持ちは、誰よりも、存在している者よりも、その気持ちで相手を押さえつける。そういう能力だからこそ、暴走した状態でしか扱えなかったのに、今の私で使えてしまったと言う矛盾。

《全てを、扱う、操る、制す、超える程度の能力》これにより、私が神なんて馬鹿げた存在になれば、つまり全てを本当の意味で押さえつけ、私以外の神は、信仰なんて物は無くなり、最悪の場合消える。それを理解しているからこそ、私は本気で怒っている。

「もう一度言わせて貰う。理解しての事なのか？」

やはり映姫は、何も言わなかった。

それは肯定なのか、私には分からなかった。

「はあ……」

その時、映姫が、私語に判断されるであろう溜息を付いた。そして映姫は、重い口を開いて、つらつらと話し始めた。

「弧徹、貴方は何故この地獄が財政難か、分かりますか？」

そんな事を唐突に言われた。

私は原作を深い所まで知っている訳ではないので、本当の意味を理解できなかったが、それでも頭を必死に働かせて考える。

今の現状。幽霊の多さ。罪の紫の桜の多さ。財政難。地獄の縮小化。神の死。私の能力。人間の増加。転生……妖怪の急成長……

「私の所為……？」

それが正解なのか、映姫様は寂しそうな顔をしながらも、答えてくれた。

「ええ、事実、貴方が何か大事を起こすたびに、全てが狂い始めました。お蔭で」

「私までもがここに来る羽目になったわ」

映姫様の隣には、いつの間にか見覚えのある服装、そして印象深い傘に扇子……

「紫……？」

何故か紫がこの場に。けれど、紫が何処となく大人びている気がする。するのは気のせいでしょうか。

「まあ別にその呼び方でも構わないけど……馴れ馴れしいのはやめなさい」

良く分からないが、私は他人行儀の喋り方に。

「では、この喋り方で宜しいでしょうか」

私の変わり様に、映姫様は珍しく驚いていましたが、確信に置いて置きたい事があるので、受け流してそのまま話を進める事に。

「八雲紫、貴方は私の知っている者ではない。それは構いませんが、例え境界を弄っても、平行世界のこの世界に来たら何らかの悪

影響が貴方にある筈ですが。それでもここに来る必要……いえ、私に会いに来る必要性はあるのでしょうか」

「あら、そこまで気づいていながら最後は私に言わせる気がしら私だつて伊達に時間を弄って億単位で生きていない。この位は簡単に予想がつく。だからこそ、分からない。」

「理解できませんね。何故この世界に来たのかが」

ここから先、つまり未来から来たのならば、少しは分かるが、こへ来たのは、全く別世界の紫。来る必要性が存在しない筈だから。

「簡単な事よ。私のいた世界が寸前で消えかけたからよ。そして……幻想郷に、本来なら存在しない幾つ物異変が、同時に現れたのよ。だからこそ、忠告、警鐘に来たのよ。このままだと、私以外の紫と言う存在が来るかもしれないわよ、貴方を殺しに」

「殺しに……ね」

「あら、信じていない顔ね。憶えておきなさい、子のためなら母は幾らでもする、と」

私は分かった。本気で、勝てないと分かってても、向かってくると。命を捨てても。

そして紫は、瞬きをする間で消えてしまった。

「映姫様、貴方は私を脅してどうしたいのですか」

「知りません。あの者が勝手に来ただけですから」

本当に、紫は何処でも勝手に、恐ろしくも優しい妖怪ですね……

「はあ……それで、もう映姫様が私の事を理解していると分かりましたから」

「まあいいでしょう……私以外の者も、結構貴方を気に入っているのですがね」

さらっと何かを言われたが、誰かが分からなかった。

「それで、貴方はどうするのです」

「神にならない」

「でしたら、せめてこれまでを償うことをしなさい。そうすれば地獄にいつて回避できるでしょう。どっち道行ってもらおうのですが」

どっち道行ってもらおう？　つまり神になろうがならなくても、行くことになっている？

「何しに行くんですか」

「簡単なことです。地獄の削減です」

つまり、今手伝うか、神として行つか。その二択だったのかな。

「じゃあ行きます。行かせて下さい」

「では、せめて貴方に、言っておきましょうか」

そんな事を、映姫様は改めて言うかのように……

「次、自分が最低だと思っことをしたら、即効で存在消去か神になりますから」

「絶対行いません」

心に誓ってでも行いませんから。

そして立っていた所に穴が開き、私は落ちていった。

少年……弧徹に、私は説教する立場だと言うのに、私が説教をされてしまいました。

ですが、一言一言に、重みがあり、それと同時に優しさが感じられました。

どうしてでしょうか、弧徹には消えて欲しくない、そんなおかしな感情を抱いてしまいました。

「こんな所は小町には見せられません」

「はい！四季様呼びましたか？」

小町は何故かニコニコと笑って……

「小町は後でお説教です……」

「え……！？それなら白亜も同罪ですよ！」

「ちよつと！私まで巻き込まないでよ！？」

「二人合わせてお説教です」

『なあああああ！？』

せめて、次に会える時を楽しみにしておきましょうか。

.....

――八歳四ヶ月

今日は、親戚の方に引き取られたが、私よりも年上の奴が妹を醜悪な目で見ていたのに気が付き、即効で出て行った。

男はどうしてそういう目でしか女性を見ないのか、吐き気がする。男はエンジニア関連の仕事をしているらしいが、私の過去など調べようが無いだろう。一応、引き取ってくれた親戚の方には感謝しているので、男の犯罪の事は通報しないで置く。いずればれるだろうがね。

そろそろ学校に行かないと、妹が精神的な年が上がらないなんて事になってしまうので、どこかに身を置かないと不味い。親戚を当たるのは、金銭的に危ないかもしれない。

もう食事を私は何日とって居ないのだろうか。

妹には悟られないように気をつけなければいけませんね。

.....

八歳十一ヶ月

親戚の方はこれで最後だったのに断られたが、その親友の方に、引き取ってもらえる事になった。

だが、その人は正直な物で、その妻の方に全てを話したらしく、妻の方が嫌がったらしいが、親友の方に気持ちで負けたらしく、戸籍では駄目だが、仮の状態で引き取ってくれた。

ですが、家ではなく、親友の方が持っているマンションで住む事になった。

本来なら、一ヶ月二百万円の所、三千円と破格の値段で済ませてもらえる事に。

さらに私の事を買ってか、本来なら子供が触る物ではないが、親友の方が理事長である私立学校の書類等々の筆記をやらせて貰い、お金を貰える事に。

本来なら駄目だが、お小遣いと言う名目ですね。

一応金銭面では安心出来た。

後は教育機関に入らせないと……

.....

- - - 十一歳十ヶ月

親友の方……神谷さんに、神谷さんが理事長を勤めている私立学校のパンフレットを渡された。

妹と私を、飛び級と言う名目で来て欲しいそうです。

一応妹は全ての計算を、過程を飛ばして結果が三秒程度で出せるようになっていますし……

教育機関に入るのなら過程も出来るように教えとくべきでした……

私はやれと言われたら全てが出来るようになってきましたし、大

丈夫……でしょうか。

妹が果てしなく心配です。

残り六ヶ月ですか。

神谷さんに本当に感謝ですね。

-
-
-

五十・？節　ここまでの全員の決意と疑問と狂気

「輝夜、私に不老不死の薬をくれ」

「私も、始めましてで悪いけど頂戴」

「つつ！？何を言っているの貴方たちは！？」

私は今竹が鬱蒼と生い茂る、竹林の中を住居として家を建てて、永琳と住んでいる。

弧徹がいない事で毎日が退屈過ぎた。だからこそ、久しぶりに妹紅ともう一人誰かがやってきた時は心が躍り、どんな事を喋ろうか、何をしようかと思っただのに……

「姫様、落ち着いてください」

「こんな事いわれて落ち着ける訳が無いでしょう！？」

だって……！私の始めての友達という存在が……私と同じ不老不死になりたいと言っているのに！

私は不老不死の辛さを知っている。だからこそ、この娘達に同じ辛さを与える訳には行かないでしょうが！

「輝夜、私は本気よ。甘い気持ちで不老不死になろうと思わない」

「私もです。私たちには決めた事があるからこそ、決意したんです」

「だけど……！」

「姫様、少しは話を聞いてあげて下さい。この娘達だってふざけて言っている訳ではないのですから……それ相応の決意をしている

筈でしょうし、ね」

その言葉にも反論しようとしたら永琳に咎められてしまった。ただ私には納得がいかない。何がこの娘達を掻き立てるのか……

「輝夜、私は貴方の苦しみを、少しだけかもしれないけれど、分かっているつもりよ。貴方が私に弧徹と一緒にいた時、まるで幼い子供のように、無邪気な笑顔をしていたのだから、その位不老不死は辛く苦しいって分かったわ。けどね……」

「私達は引く事なんて出来ないんです。弧徹と一緒にいる為にはそれ相応の覚悟を持つ必要があると分かったから」

私は二人の言葉に絶句した。この娘達は弧徹のためなら……いや、弧徹と一緒にいる為なら人間だってやめる覚悟だと分かったから

「でもっでも……!!」

私はどうしてか震えている、これは怒りなのか、それとも

「姫様、私はこの娘達の意味を尊重してあげたいです」

ああ、私は怖いんだ。だって、また失ってしまうと分かっ
てしま
うから……

けど、この娘達の気持ちは、私の一存で捻じ曲げてはいけない。
……どうしてごうも

「分かったわよ……もういいわ、不老不死にでも何でもなりな
いな」

「姫様……」

ああもう、どうして少年一人の所為で、ここまで辛い道が出来てしまうのよ……

どうせ二人は飲んだらすぐに出て行くんでしょう。永琳に思いっきり泣きつこうか。

「でも、それだけの覚悟なら止めときなさい。地獄以上のものを見る羽目になるわ」

「それだけの覚悟？ちがうわよ」

「私達は死だって怖がらず、何者にも恐れを抱かず、何にだって魂を売っても構わないわよ」

それぐらいの覚悟は……ね。けど駄目に決まってるじゃない。それじゃあ心が壊れてしまうのよ。それで何の意味があるの？不老不死は体が不滅かもしれないけど、精神は永遠じゃないのよ？

はあ……私って案外世話焼きなのかしら……？

「永琳薬を持ってきなさい」

「はい、姫様」

何処と無く永琳の顔は微笑んでいた。私はいつまでも駄々を捏ねる子供じゃ無いわよ。

さてつとこつち側を何とかしないとね。

「二人とも、妹紅に……名前、何て言ったかしら？」

「私は由梨ですけど……」

「そう、妹紅に由梨ね。二人に言っておく事があるわ。不老不死になる条件だけどね」

二人よりも私のほうがどうしようもないわね……
というか理解しなさい。首を傾げないで。

「不老不死の絶対条件一。自ら死なない、極端に殺されない事」
だけど二人はまた首を傾げ

『痛い！』

今やった事は簡単に言くと、弾丸を二人の顔面に放つただけ。
というか馬鹿よね、いや、馬鹿ね、うん、死んでしまいなさいよ。
きっと私の頭の血管ははちきれんばかりだろう。そこら辺の竹が
メキメキと音を立てて老朽化しているんだから。

「二人とも馬鹿じゃないかしら？不老不死といえど痛覚があるの
よ。何度も死ねば慣れるんじゃないやなくて精神が壊れるに決まっている
じゃない」

二人は今気づいたように、ああ、と言っている。もう良いわよ……

「次！不老不死の絶対条件二。強くなりなさい」

また二人は首を傾げている……

「いい加減になさい……」

《新難題・金閣寺の一枚天井》

『痛い!』

今のは……上からタライでも想像しなさい。

「二人の実力はどれ位よ?」

「私達は大体上の子の妖怪を倒せるくらいかしら?」

はあ……弧徹に鍛えてもらったのにその程度って……

「せめて上の子の妖怪は倒せるくらいになっておきなさいよ……」

輝夜の苦勞は耐えないのです。

.....

「弧徹、何処にいったのよ……」

全く、私を置き去りにするなんて……私だって幽香は怖いものよ？
というか、あの弧徹が創った空間、異常だけど大丈夫かしら？

弧徹が言った幻想郷のシステムは、力が弱まった者が来る、または忘れ去られた存在が来る。

だけど明らかに弧徹の力は異常だし……

「弧徹は幻想郷に入れるのかしら？」

まさか……ね。

.....

「あつううううううううう……！」

「チノ、うるさいわ」

「同意ね」

「私もです」

「皆酷くない!?!」

はあ、あの時から皆元気無いしなあ……

「逆に私も言わせてもらっけど、弧徹がいなくなっからあつあつ言うの止めなさい」

そんなに私いつてるかなあ？

思い返して見るけど、そんなに言っていないような……

「毎日欠かさず一回言っているのよ……」

「あはは……」

無意識で言っちゃったのかなあ？
怖いなあ無意識って。

「今のは私でも怒りますよ?」

「やだなあフエ、笑顔が怖いよ?」

だって目が笑っていないよ？

「今のはレスチノが悪いわよ。というかいい加減諦めなさい」

むっ、今のは侵害だよ、ルーミア。

だって

「皆諦めていないのに、不思議な事言うんだね？ルーミア」

「つつ！？」

私の言葉で緊迫とした空気に。……皆一日でも弧徹の事を忘れた事が無いという揺るぎの無い事実だね……もう少し正直にならないと。

「諦めているなら、とっくに弧徹から貰った物を捨てている筈だよね」

実は全員マフラーや手袋以外のものを貰っている。

全員同じ形だけど違う色の髪留め。

私が水色でルティが白、ルーミアが黄色でフエが緑。

元々は弧徹が持っていた物で、弧徹が出て行った後に、それぞれの貰った物の中に入っていた事に気が付いた。確か弧徹は白銀と黒銀だったけ。ちなみに形は花。何の花か分からなかったけど。

思考から戻ると皆俯いて涙を流していた……

全く、皆正直じゃ無いんだから……

「皆弧徹に会いたいんでしょ？忘れられないんでしょ？」

皆私の言葉にこくこくと首を立てに振っている。
だったら簡単でしょ？ 弧徹は運命が許したらっていったんだから

「私達から会いに行こう」

.....

「お兄様……」

会いたい、会いたい。今の私には唯々その気持ちしかない。
忘れる事の出来ない笑顔、心、私を見てくれた目。

「弧徹には暫く会えないわよ。場所の次元が違うのだから」

少し前、八雲という奴が私達に放った言葉。
その言葉に私達はどれだけ涙を流したのか。

「オニイサマ……」

お兄様に会えなくなってから、私の狂気は膨れ上がるばかり。
お姉様に私を幽閉させてもらっているが、それでも抑えきれなくなり、時たまお姉様達に迷惑を掛けてしまう。

ふと気になって、私の羽を見る。この羽は地獄の七つの罪を象った物なのだろうか？

だけど今は七対から六対になっている。二つを融合させてお兄様に渡してもらったから。

この六角形の七光するのを見て私を思い出してくれているだろうか？

会いたい、会いたい、会いたい。この気持ちを一体何処に向かわせれば良いのか？

分からない、ワカラナイ。

オネガイダカラ、もう一度、イツカイダケデモカマワナイカラ。

「オニイサマ……アハツ、アハハハハハハ！」

五十・？節 ここまでの全員の決意と疑問と狂気（後書き）

私はもう無理はしない

一回編集したら次に次話投稿する

これで頑張るです

五十一節 地獄で地獄……鬼つてしつこいね

馬鹿……！馬鹿……！貴方なんて……弧徹なんて……！お兄ちゃんなんて！

「うあ！？」

頭がかち割れるように痛い……！息が出来ない……！

「がはっ……！けほっけほっ！」

ようやく息が出来たけれど、その代償のように、途端に意識が覚醒した所為か、吐き気とそれに伴い頭がさらに痛い……！

流石にこれ以上は死にますよ……！？

そう頭が判断したため、意識が消えかけそなのを堪えて、能力を扱う。

行使……不可

思い出しました……柚木達に能力を使うなんて事をしたから……ならせめて体の状態を整えましょう……具現化……自身に負担が掛かる物を

そして私の目の前に現れた物は……黒く、見ていると拒絶反応が起きそうな、酷く禍々しい物が。

それに対して、フランから貰った石でレーヴァティンを具現化して、放って破壊した。

途端に体が軽くなり、怪我は流石に無くならなかったので、応急処置として包帯を適当に巻いておく。

「私ってなんでここにいますっけ……」

私は……ああそうです。映姫様に落とされて……
つまりここは地獄ですか。来たのは良いですが何をすれば良いの
でしょうか？

「頭がまだ痛いです……ね」

こればかりはもうどうしようも無さそうですから諦めましょう。
そういえば、この地獄ってもう旧地獄なのでしょうか……？もう既
に悟り妖怪……古明地さとりが居るといふ事でしょうし……

「仕方ありませんね……奥へと進みましょうか」

どっち道ここから出る術が私には分からないですし……
にしても、地獄とは名ばかりでは無いのですね。奥へ進むたびに、
一歩一歩が死に近づくという印象を受けます。というか真面目に奥
から妖力が伝わってきますし。

そんな事を思いながら、すたすたと歩いていると……

「おや？見慣れない顔だね？」

「見慣れないのは当たり前ですが……？」

目の前には……ああ、蜘蛛に似ている方……

「黒谷ヤマメさんですね」

「おお、私の事を知ってるなんて思わなかった。もしかして最近

地上で有名な大妖怪って者かい？」

私の知っている限りだと……紫か幽香ですが……私妖怪じゃありませんし……

「たしか孤独な妖怪……？違うな……」

私の事でしょうね……妖怪じゃないのですがねえ……

「ああそうだ！孤独を無くす人妖不老神だったね」

「色々ごちゃ混ぜよ……」

私は何ですか？新種族ですか？というか人にも妖怪にも神でも……

不老は合ってますね。

そんな風に考え事をしていたら、目の前に……

「へへえあんたがねえ」

「近いですよ〜」

そんな事を言ったら、そうかい？と言われてしまいました。

珍しいですね、人間でしたらこの近さだと真っ赤に顔を染めてしまいますのに……

そんな事に関心のような好印象を受けていると。

「そつえば名前って何て言うんだっけ？」

近いままそんな事を言われてしまい、なんか不意を付かれた気分のまま話す事に。

「私は伯柳弧徹です、孤独に徹すると言いますです」

私のこの言葉にヤマメさんは不思議そうに首を傾げました。何か変な事を言いましたでしょうか？

「私は孤独を」

けどヤマメさんの言葉は途中で遮られてしまった。

だって私の視界と聴覚が意味分からなくなったから。

轟音を出してそこらの岩にめり込んでから状況確認するというなら

……

鬼の二人に同時に何かされたというのが正確かしらね。

「何してくれてるのよ……!!」

目の前の鬼……勇儀と萃香を睨みつけながら、女性状態に任意でなった。

「へえ、あんたが弧徹かい。由酒の奴が言っただよように強いと思えないんだが」

「勇儀は感が衰えたんじゃない？今の私たちの蹴りを喰らってもすぐに復帰する奴だよ？」

目の前の二人……いえ、二匹が何か言ってますが戯言でしょうね。それを気にせず、ヤマメさんの方に視線を上げる。

「ヤマメさんー」

「んあ？ああ、別にヤマメでも良いんだけど」

本人様から呼び捨ての許可を貰った。まあ今は重要じゃありません。
ん。

「後で先程言おうとしていた事を教えていただけませんかー？」

「別に構わないけど……大丈夫かい？」

それだけ聞けたら十分です。さっさと終わらしてしまいたいです。
か。

「萃香に勇儀ー？」

二人は私の呼びかけに向いてくれました。まだ言い争っているの
ですか……

取り合えず指を三本立ててみた。

「なんだい？その指は」

「挑発なら一本だよー？」

ふふつ。貴女達にとっては、もう少し上の挑発よ。

「三十分、三十分で貴女達を立てなくさせて上げます」

「ああ？」

勇儀からは恐ろしく殺意の籠った視線を向けられますが無視ですわ。

そして逆に微笑みを返してあげますわよ。

それに萃香は切れたのか、思いつき私に殴りかかってきますが、明らかに由酒の方が早いと思える……遅さね。

そして萃香の拳を掴み、勇儀の居る方へと投げ返す。

それは戦いの合図で……

萃香と勇儀がさらにスピードを上げて向かってきた。

それに対して、私は微笑み返す。

勝ちをそこまで拘らないかのように……

五十一節 地獄で地獄……鬼ってしつこいな（後書き）

編集？なにそれたのしーの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173s/>

東方奔放紀

2011年10月7日02時33分発行